

長目塚古墳発掘調査 70 周年・熊本県史跡指定 60 周年  
出土品熊本県重要文化財指定記念シンポジウム

# 中通古墳群を考える

## - 長目塚古墳の温故知新 -

シンポジウム記録集

令和3年（2021年）3月

阿蘇市教育委員会

# 目次

開会あいさつ	1
佐藤 義興（阿蘇市長）	
チラシ	2
プログラム	2
登壇者プロフィール	2
基礎資料1（古墳分布図）	3
基礎資料2（古墳測量図）	3
<b>【午前の部】</b>	
趣旨説明	4
緒方 徹（阿蘇市教育部教育課 係長）	
配布資料	7
基調講演「弥生時代から古墳時代における鉄生産と阿蘇」	8
村上 恭通（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター センター長）	
配布資料	23
<b>【午後の部】</b>	
報告1「中通古墳群と阿蘇の古墳時代」	32
杉井 健（熊本大学 准教授）	
配布資料	42
報告2「長目塚古墳の出土品の価値と意義」	46
木村 龍生（熊本県教育庁教育総務局文化課 参事）	
配布資料	50
報告3「長目塚古墳発掘調査の経緯」	53
宮本 利邦（阿蘇市教育部教育課 学芸員）	
配布資料	59
報告4「幕末人からみた古墳からの出土刀」	62
池浦 秀隆（阿蘇神社 権禰宜）	
配布資料	68

パネルディスカッション「中通古墳群を考える」	74
------------------------	----

コーディネーター：田中 裕介（別府大学 教授）

パネラー：村上、杉井、木村、宮本、池浦

中通古墳群シンポジウム参加者アンケート集計結果	89
-------------------------	----

#### 関連事業

1. 古代体験学習（鏡づくり体験）	92
2. 中通古墳群講演会（中通地区学習会）	93
3. 長目塚古墳出土品特別公開	95
4. 阿蘇中央高校出前事業	97
5. 一の宮小学校土曜授業地域体験学習	98
6. 小嵐山景観・環境整備事業	99

## 例 言

- 1 本書は、中通古墳群長目塚発掘70年・熊本県史跡指定60周年・出土品熊本県重要文化財指定を記念して、熊本県世界文化遺産維持保全事業補助金を受け、2019（令和元）年12月14日に開催したシンポジウム「中通古墳群を考える-長目塚古墳の温故知新-」の内容をまとめた記録集である。
- 2 本書の構成は、シンポジウムの基調講演及び報告の内容と関係各スライド、パネルディスカッションの内容に加え、巻末には、シンポジウムの参加者アンケートの集計結果と、関連して開催した各事業の概要を掲載した。
- 3 本書の作成業務は令和2年度に阿蘇市教育委員会が行った。文章の校正は各発表者が行い、編集は緒方が行った。
- 4 本書に掲載している各発表者のスライド内の画像や図表などは各発表者が手配したものであり、これらの二次使用については原則禁止とする。

## 主催者あいさつ

佐藤 義興（阿蘇市長）

皆様、おはようございます。主催者を代表しまして、ひと言ごあいさつを申し上げます。本日、基調講演をご快諾頂きました愛媛大学の村上恭通先生、また、シンポジウムのコーディネーターやパネリストの皆様方におかれましては、ご多忙のなかご出席を賜り厚く御礼申し上げます。

また、本シンポジウムの開催にあたり、多大なるご支援とご協力を賜りました関係機関並びに関係者の皆様に改めまして心より感謝申し上げます。

さて、阿蘇谷東部の中通地区の水田中に所在する中通古墳群は、阿蘇地方屈指の古墳群であると共に熊本県を代表する古墳群ですが、中でも県下最大級の規模を誇る前方後円墳の長目塚古墳は、今年で発掘調査から70年、熊本県の史跡指定から60年の節目を迎え、さらに今年の3月には阿蘇神社で大切に保管されてこられました長目塚古墳の出土品が県の重要文化財に指定されました。

この3つの大きな意義を記念し、改めて中通古墳群の価値の再評価と、私たちの市民の宝としての再認識を図ることを目的としまして、「中通古墳群長目塚古墳発掘70周年記念事業」を展開して参りました。具体的には地域や学校と連携し、講演会や出土品の展示会、そして子供たちの現地散策会などを開催し、それぞれが想定以上の好成果を得て参りました。

本日は、これまでの記念事業の集大成としましてシンポジウム「中通古墳群を考える 長目塚の温故知新」を開催しましたところ、このように多くの皆様にご来場頂き、改めて中通古墳群への関心の高さを実感した次第です。

本シンポジウムの副題である温故知新、まさに「故きを温ねて新しきを知る」という趣旨のもと、中通古墳群の更なる保全活用や調査研究の推進、ひいては構成資産として世界文化遺産登録に繋がる契機となれば幸いに存じます。最後に、本日までご参加頂きました皆様方のますますのご健勝とご発展を心より祈念しまして、開会のごあいさつとさせていただきます。



長目塚古墳発掘調査70周年・県史跡指定60周年  
出土品熊本県重要文化財指定記念シンポジウム

## 中通古墳群を考える

—長目塚古墳の温故知新—



熊本県指定重要文化財（考古資料）  
長目塚古墳出土品

**【基調講演】**  
村上恭通氏（愛媛大学社会共創学部教授）  
『弥生時代から古墳時代における鉄生産と阿蘇』

**【報告】**  
杉井 健氏（熊本大学文学部 准教授）  
木村龍生氏（熊本県教育庁教育総務局文化課 参事）  
宮本利邦氏（阿蘇市教育委員会教育課 主任）  
池浦秀隆氏（宗教法人阿蘇神社 権禰宣）

**【パネルディスカッション】**  
『中通古墳群を考える』  
コーディネーター 田中裕介氏（別府大学文学部 教授）  
パネラー 各報告者

**日時：**令和元年12月14日（土）  
午前10時開始～午後4時10分終了予定

**会場：**阿蘇市農村環境改善センター（阿蘇市内牧976-2）

**参加費：**無料

**主催：**阿蘇市教育委員会 共催：熊本大学

**後援：**熊本県・熊本県教育委員会・宗教法人阿蘇神社  
熊本県文化財保護協議会・肥後考古学会・熊本古墳研究会

シンポジウムチラシ（表）

長目塚古墳発掘調査70周年・県史跡指定60周年  
出土品熊本県重要文化財指定記念シンポジウム

## 中通古墳群を考える

—長目塚古墳の温故知新—

熊本を代表する古墳群「中通古墳群」。  
今年はその中で最大の古墳「長目塚」が発掘調査されて70周年。古墳群全体が熊本県の史跡に指定されて60周年となります。そして今年3月には70年前の発掘で見えられた出土品が熊本県重要文化財に指定されました。  
これらを記念し、地域が誇る文化遺産「中通古墳群」について阿蘇の歴史・考古学研究に携わる研究者がこれまでの研究成果を振り返りながら、70年前の河川改修に伴って県内で戦後初めてとなった行政実施の長目塚古墳発掘調査の意義と将来の文化財保護・考古学研究に中通古墳群が果たす役割を考えます。

**開場・受付開始：**9時30分～  
**開会・趣旨説明：**10時～  
**基調講演：**10時30分～11時30分予定  
村上恭通氏（愛媛大学社会共創学部教授）

**『弥生時代から古墳時代における鉄生産と阿蘇』**

**休憩**  
**報告：**12時45分～15時  
杉井 健氏（熊本大学文学部准教授）  
木村龍生氏（熊本県教育庁教育総務局文化課参事）  
宮本利邦氏（阿蘇市教育委員会教育課主任）  
池浦秀隆氏（宗教法人阿蘇神社権禰宣）

**パネルディスカッション：**15時～16時10分予定  
コーディネーター 田中裕介氏（別府大学文学部 教授）  
パネラー各報告者  
テーマ『中通古墳群を考える』



発掘調査直後の長目塚古墳。現在は中環壕。毎年秋には、用土が埋め立てられた新田が広がっている。



長目塚古墳の発掘調査に携わった関係者らによる記念撮影。写真左から右へ、田中裕介氏、村上恭通氏、池浦秀隆氏、宮本利邦氏、杉井健氏。

**【お問い合わせ先】**  
阿蘇市教育委員会 教育課 社会教育係  
〒869-2695 熊本県阿蘇市一の宮町宮地504番地1  
電話 0967-22-3229 FAX0967-22-5205  
<http://www.city.aso.kumamoto.jp>

シンポジウムチラシ（裏）

長目塚古墳発掘調査70周年・県史跡指定60周年  
出土品熊本県重要文化財指定記念シンポジウム

## 中通古墳群を考える

—長目塚古墳の温故知新—

**○開催目的**  
熊本を代表する古墳群「中通古墳群」。  
今年はその中で最大の古墳「長目塚」が発掘調査されて70周年。古墳群全体が熊本県の史跡に指定されて60周年となります。そして今年3月には70年前の発掘で見えられた出土品が熊本県重要文化財に指定されました。  
これらを記念し、地域が誇る文化遺産「中通古墳群」について阿蘇の歴史・考古学研究に携わる研究者がこれまでの研究成果を振り返りながら、70年前の河川改修に伴って県内で戦後初めてとなった行政実施の長目塚古墳発掘調査の意義と将来の文化財保護・考古学研究に中通古墳群が果たす役割を考えます。

**<プログラム>**

**開場：**受付開始：9時30分～  
**開会：**10時00分～10時30分  
主催者あいさつ 佐藤義典阿蘇市長  
趣旨説明 阿蘇市教育課  
【午前の部】  
基調講演：10時30分～11時30分（60分）  
『弥生時代から古墳時代における鉄生産と阿蘇』  
村上 恭通氏（愛媛大学アジア古代産業考古学センター長）  
【午後の部】  
**報告：**12時45分～14時45分（120分）  
・『中通古墳群と阿蘇の古墳時代』杉井 健氏（熊本大学文学部准教授）  
・『長目塚古墳の出土品の価値と意義』木村 龍生氏（熊本県教育庁教育総務局文化課参事）  
・『長目塚古墳発掘調査の経緯』宮本 利邦氏（阿蘇市教育課主任）  
・『墓主人がみた古墳からの出土品』宗教法人阿蘇神社権禰宣 池浦 秀隆氏  
**休憩：**14時45分～14時50分（5分）  
**パネルディスカッション：**14時50分～16時05分（75分）  
テーマ『中通古墳群を考える』  
コーディネーター：田中 裕介氏（別府大学文学部教授）、パネラー：各報告者  
**閉会：**16時05分～16時10分（5分）

【スマートフォンでQRを読み取ることで資料のPDFをダウンロードできます】

- 長目塚古墳の発掘調査報告書  
熊本県教育委員会 1982『熊本県文化財調査報告第3集』
- 長目塚古墳で開掘された企画展図録  
熊本県立発掘古墳館 2006『神のすむ郷 阿蘇のものごたけ』
- 出土品指定のきっかけとなった学術研究書  
熊本大学文学部 2014『長目塚古墳の研究』

シンポジウムプログラム

登壇者プロフィール

**基調講演 講師**  
村上 恭通（むらかみ やすゆき）氏  
1962年、熊本県生まれ。  
熊本大学文学部史学科卒業、広島大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学  
現在、愛媛大学アジア古代産業考古学センター・センター長  
主な専門・研究分野はアジア考古学、主な研究テーマは日本の鉄生産史であり、現在はコーラシア大陸における古代遊牧民族の鉄生産について発掘調査を進めている。

**報告者**  
杉井 健（すぎい たけし）氏  
1965年、大飯町生まれ。  
大飯大学文学研究科史学専攻後期課程(研究分野考古学)中途退学。  
現在、熊本大学大学院人文社会科学部准教授。  
主な専門・研究分野は日本考古学、主な研究テーマは原始古代の生活様式、社会・政治構造、古墳動向の分析。近年は熊本地震被災古墳の復旧にも関わっている。

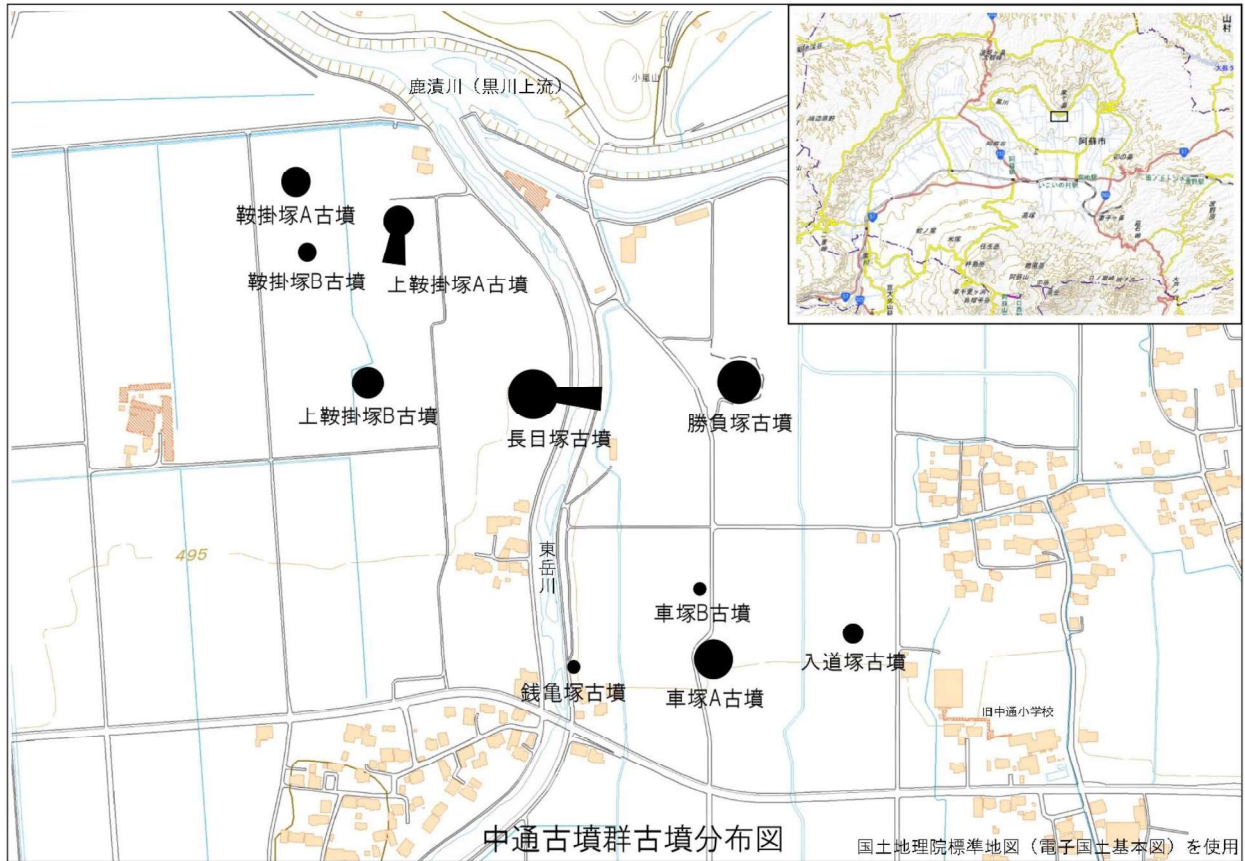
木村 龍生（きむら りゅうせい）氏  
1978年、熊本県生まれ。  
熊本大学大学院文学研究科歴史学コース修了。  
現在、熊本県教育庁教育総務局文化課参事（学芸員）。  
主な専門・研究分野は日本考古学、主な研究テーマは古墳時代、須恵器、遺跡の三次元計測等。

宮本 利邦（みやもと としくに）氏  
1980年、熊本県生まれ。  
別府大学文学部文化財学専攻文化財・考古学専修卒業。  
現在、阿蘇市教育委員会社会教育係主任（学芸員）。  
主な専門・研究分野は日本考古学、主な研究テーマは遺跡地理情報による地域歴史空間の復元分析。

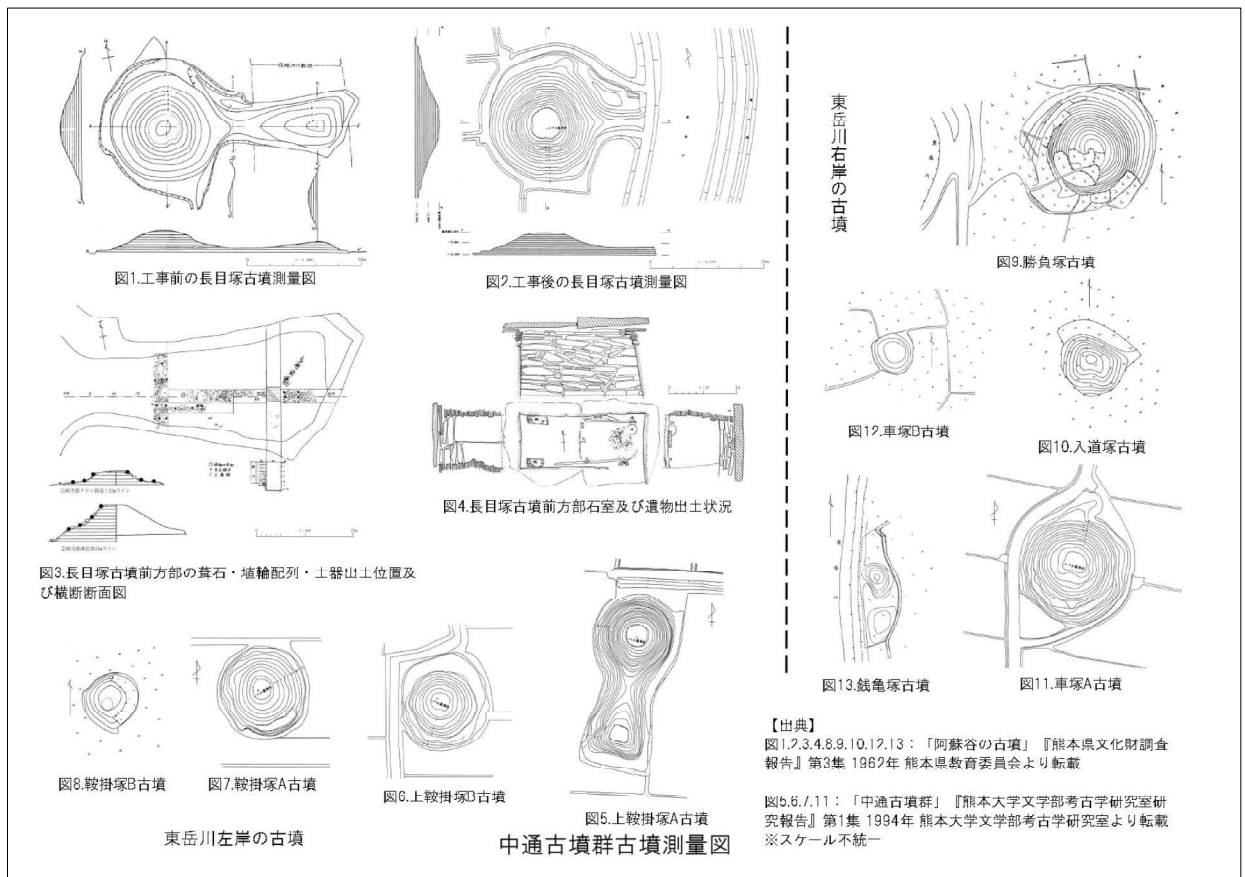
池浦 秀隆（いけうら ひでたか）氏  
1971年、福岡県生まれ。熊本市育ち。  
皇学館大学文学部国史学専攻卒業。  
現在、阿蘇神社権禰宣・宝物管理（学芸員）。  
主な専門・研究分野は近世の神社史。主な研究テーマは阿蘇大宮司家文書・阿蘇神社文書を活用した神社と地域社会の関係史。

パネルディスカッションコーディネーター  
田中 裕介（たなか ゆうすけ）氏  
1959年、大分県生まれ。  
岡山大学大学院文学研究科修士課程中退  
現在、別府大学文学部史学・文化財学教授  
専門・研究分野は日本考古学、古墳時代を対象に遺構などを研究。

シンポジウム登壇者プロフィール



シンポジウム基礎資料①



シンポジウム基礎資料②

## 趣旨説明

緒方 徹（阿蘇市教育委員会）

それでは、本日のシンポジウムの趣旨と大まかな流れについて説明させていただきます。配布資料のスライド 2 をご覧ください。先ずは中通古墳群につきまして、のちの報告で詳しくお話があるとは思いますが、冒頭ですのでポイントだけお話しさせていただきます。位置的には阿蘇谷の北東部、阿蘇七鼻八石で知られる象ヶ鼻の麓、黒川と支流の東岳川の合流地点の東岳川を挟んで東西に前方後円墳 2 基、円墳 8 基が現存する阿蘇谷最大の古墳群で、本日の主役であり、その中心を成す長目塚古墳は同時期の古墳では県下最大の規模を誇るというのが簡単な特徴になります。



続きましてスライド 3 の上段をご覧ください。そのような中通古墳群ですが、令和元年である 2019 年は、大きな 3 つの節目の年となります。一つ目は昭和 24 年、1949 年の長目塚発掘調査から 70 年になります。あとで詳しく報告がありますが、文化財保護法施行が昭和 25 年ですので、法整備以前に行われた、旧中通村による地元自治体主体の公的な緊急発掘調査であることです。今では開発前に埋蔵文化財との調整を図ることは普通に工事行程の一環として認識されていますが、戦後間もない時期にきちんとした発掘調査が行われ、しかもそれが熊本県下では初となる公共事業に伴う発掘調査という、現在の熊本県の埋蔵文化財保護行政の基礎を築いたと言っても過言ではない大きな意義を持つということです。時代背景についてはこのあと簡単に触れます。

そして二つ目は、その意義と古墳群としての価値の高さから、熊本県で最初期の県の指定史跡であることです。長目塚古墳の発掘調査から 10 年後の昭和 34 年、1959 年に県の史跡に指定され、今年で 60 年になります。県指定最初期の墳丘墓では、玉名市の大坊古墳と永安寺東古墳、永安寺西古墳は現在国指定史跡であり、残りは中通古墳群と手野の上御倉・下御倉古墳となりますので、価値的基準としては国指定同等といっても過言ではないと思っています。また、県指定の指定説明文には古墳群として「まさに壮観」と、見た目の景観が書かれているのも面白いです。ずばり阿蘇谷の田園中に中通古墳群が点在していることが評価されていたということがいえると思います。またあとで最初期の史跡指定については触れます。

最後の三つ目ですが、今年 3 月に長目塚古墳の出土品が新しく県の重要文化財として指定されました。未盗掘の古墳から一括して出土した貴重な資料ということと、バラバラに散逸せずに長く阿蘇神社さんが宝物として大切に保管されてきたことが、さ



らに古墳の価値を高め、長目塚古墳出土品の県指定に繋がっているということ、指定を機に再確認する必要があるということです。

これら大きな三つの節目に加えて、さらに言えば、そもそも今年は文化財保護法の前身の史蹟名勝天然記念物保存法の施行から100年になることや、調査を担当された坂本経堯先生の没後45年にあたる年であること、さらにさらに中通古墳群は阿蘇地域の世界文化遺産登録推進における構成資産に位置づけて頂いておりますが、その世界文化遺産登録推進に取り組んで今年で10年の節目であること、折しも郡市の世界文化遺産登録事業協議会事務局が役犬原から中通に移転したことなど、色々なタイミングが重なり、まさに何かやれと言わんばかりの背景がありました。

一昔前からすると文化的景観をはじめ価値評価が多様となり、例えば史跡という枠を超えて広く評価されるように、単体そのものの歴史的・人文的価値に加えて、景観など重層的な一つの文化的な空間を構成する要素としての複数の価値が付加されるようになりました。少し前に某大臣の発言で「学芸員と観光マインド」が物議をかもしましたが、観光やまちづくりなどへの活用を図る事例が多くみられるようになるなど、ここ近年で文化財を取り巻く環境が大きく変化してきました。また、文化財と地域振興との連携など相互的な活用を図り、これからの時代にふさわしい確実な文化財の継承を行うために、この3月に文化財保護法が改正され、国も地域社会総がかりで文化財の保存活用の仕組みを構築するよう後押しがなされるように法整備が行われました。

スライド3の下段になりますが、このような状況や背景を踏まえて、中通古墳群の大きな節目であるこの機会に、改めて過去を見つめなおし、これからの中通古墳群の在り方を考える必要があるとして、「長目塚古墳発掘70周年記念事業」を冠付けて今年度に関連の取り組みを行っていくこととしました。この記念事業の基本コンセプトは、「中通古墳群の価値の再評価と地域の宝としての再認識」としまして、さらなる保全と活用や調査研究の推進、成果の還元に向けて、地域の皆様や熊本大学さんと共同で中通古墳群を「見る・知る・学ぶ」をテーマに地元向けの学習会や出土品の展示会の取り組みを行って参りました。

そのような流れの中で、本日のシンポジウムは、「中通古墳群を考える」をテーマにその集大成として企画・開催させて頂きました。また、資料には記載はしてありませんが、この70周年記念事業の一環としまして、阿蘇五岳を背景に中通古墳群の全体が見渡せる絶好の眺望点として知られております小嵐山の山頂が、実は支障木により展望機能を失いかけていましたので、地元財産区のご理解のもと、市のASO環境共生基金を活用して支障木を伐採し、かつての素晴らしい眺望景観を取り戻しております。ぜひ皆さんも足を運んで頂ければと思います。

それでは、長目塚古墳の発掘調査が行われた今から70年前とはどのような時代だったのか私もそうですが、具体的にイメージできる方は会場にはいらっしやらないと思いますので概観してみたいと思います。スライド4をご覧ください。文字が小さく

て恐縮ですが、主な出来事は中学校の社会の教科書より引用しました。昭和20年の敗戦からGHQ占領下で、右側の緑と赤の箱の中にあるように色々と復興の兆しが見えてきた、まさに戦後の混乱期から復興期へ移行する直前という時代でした。復興の兆しは見えつつも長目塚古墳の調査報告書に「戦後日なお浅く調査用器材の入手が困難であり苦労した」と書かれているように、まだ闇市が横行する厳しい時代であったことがうかがえます。

次にスライド5の中通古墳群と同期の県指定史跡群を見てみます。熊本県の文化財保護条例が昭和30年に施行され、調査など約4年かけて文化財指定が行われていますが、史跡のカテゴリーに絞ると13件で、うち古墳は9件、さらに墳丘墓として絞り込めば6件、玉名と阿蘇の古墳に限定されます。

県内古墳の有名どころでは、現在国指定の氷川町の野津古墳群の県指定が昭和47年、大野窟古墳が昭和60年、阿蘇市一の宮町手野の迎平6号墳と同型の画文帯神獣鏡が出土している宇城市の国越古墳も平成10年という、そうそうたる古墳でさえも後発の県指定組になります。このように、いかに初期組はそれ以上に価値や優先度が高かったということになろうかと思えます。

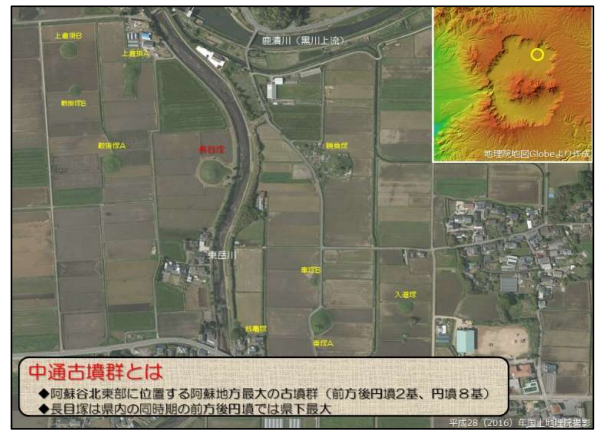
最後にスライド6の本シンポジウムの流れを説明させていただきます。まず、基調講演としまして愛媛大の村上先生に「弥生から古墳時代における鉄器生産と阿蘇」という演題でご講演頂きます。なぜに弥生かという疑問をお持ちの方がいらっしゃるかと思いますが、阿蘇の古代を語る上で重要なキーワードである「鉄器」や「鉄器生産」という視点から前代である弥生時代から古墳時代への変遷や中通古墳群の成立過程を窺ってみようという狙いがあります。

その後、お昼の休憩を挟みまして、熊本大の杉井先生をはじめ4名の方々に、中通古墳群の位置づけや長目塚古墳の出土品、過去の調査、神社からみた古墳とはなどなど、それぞれの報告をして頂きます。そして、「中通古墳群を考える」という今回シンポジウムのメインタイトルをテーマに、別府大の田中先生にコーディネーターを務めて頂き、村上先生と各報告者にパネラーとしてご登壇頂き、パネルディスカッションを行って頂きます。サブタイトルにありますように温故知新をテーマにこれまで蓄積された中通古墳群の調査研究を振り返りながら、これからの中通古墳群の在り方を議論して頂きます。議論の方向性として、今後どのようにしたら更なる地域理解の浸透や向上に繋がるような調査研究を推進できるのか、また多角的な価値や将来を展望した保存活用の中通古墳群ならではの在り方とは何か、そのような答えが少しでも導きだされるような議論であってほしいと願っております。

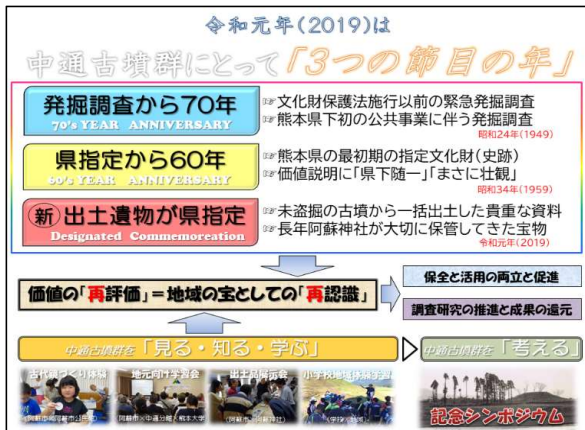
以上が今回のシンポジウムの趣旨となります。講師、報告者の皆様よろしくお願ひいたします。



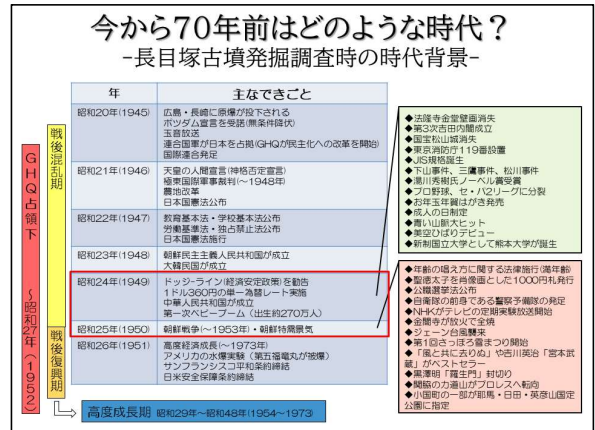
スライド1



スライド2



スライド3



スライド4

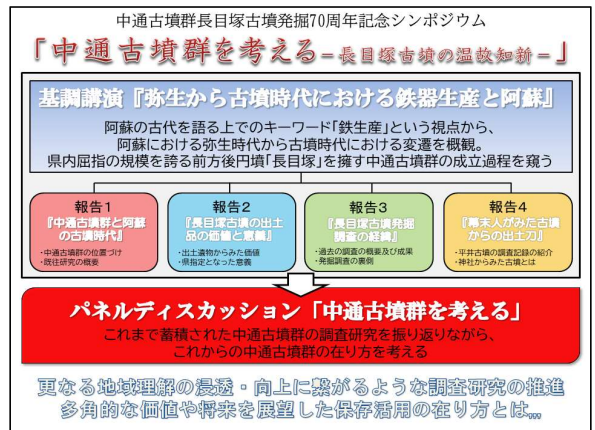
昭和34年(1959)12月8日指定(第1世代)  
中通古墳群と同期の史跡たち

昭和30年(1955) 熊本県文化財保護条例制定  
昭和32年(1957) 旧一宮町が調査及び同意書を提出

No.	指定名称	所在地	備考
1	伝教智城跡	菊池市・山鹿市	現国史跡「伝教智城跡」
2	城横穴古墳群	山鹿市	
3	小岱山古窯跡群	荒尾市	
4	小岱山製鉄跡群	荒尾市	
5	長岩揚穴群	山鹿市	
6	大坊古墳	玉名市	現国史跡
7	永安寺東古墳	玉名市	現国史跡
8	永安寺西古墳	玉名市	現国史跡
9	上御倉古墳	阿蘇市	
10	下御倉古墳	阿蘇市	
11	中通古墳群	阿蘇市	
12	浄水寺跡	宇城市	
13	京ガ峰横穴群	錦町	

史跡13件のうち、古墳は9件、墳丘墓が6件（うち、阿蘇市が3件）

スライド5



スライド6

# 基 調 講 演

演題「弥生時代から古墳時代における鉄生産と阿蘇」

講師 村上恭通

(愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター センター長)

## 基調講演「弥生時代から古墳時代における鉄器生産と阿蘇」

村上 恭通（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター長）

皆様、おはようございます。只今、ご紹介頂きました愛媛大学の村上と申します。

平成 28 年の熊本地震では阿蘇は大変大きな被害を受けられました。先ずお見舞いを申し上げます。私も 20 歳過ぎまで熊本で過ごしまして、親はまだ健在で熊本におります。震災直後、愛媛から熊本へフェリーで渡ろうと思いましたが、優先車両があってフェリーも乗れずに、宇和島から出港もできませんでしたし、九州に上陸してもなかなか車が走れないという状況で悶々とし



ながら運転をした記憶があります。変わり果てた土地を見て呆然としながら運転しました。私は小学校まで大津町に住んでおりまして、小学校は大津南小学校、かつて陣内小学校といった小学校ですが、そこに通いまして、だいたい鳥子川ぐらゐまでが遊びのテリトリーでございました。そして中学校に入ると多少、考古学に関する関心が出て参りまして、阿蘇にも遺物を採集に何度も足を運びました。おそらくその時の経験がなければ考古学はしていないでしょうし、今、ここでお話しすることもなかったのではないかと思いますので、この思い出が、記憶が今の私を支えているのであろうなというふうに思います。私の祖父は阿蘇ロープウェイの初代所長でありまして、昭和 33 年の中岳大噴火で火山弾を被弾して、左足の機能を無くしたということを聞いております。阿蘇というところは色々な思い出がありまして、そういう色々な思い出を胸に秘めながら、今日は阿蘇で勉強させて頂いたことをお話しさせて頂きたいというふうに思います。

### 【弥生時代中期後半の阿蘇の動向】

私の今日の話の内容は、中通古墳群が成立する前史といいますか、前段階の話に終始すると思います。なかなか古墳時代の中にまで切り込むことができないかもしれませんが、私が阿蘇をフィールドとしまして勉強させて頂いたことは、阿蘇に留まらない、各地に及ぼす影響力のあることが起こっていたのだということが研究する中で分かってきました。今日、私がお話しする時代は、ここに長目塚古墳が造られた 5 世紀の初めよりをはるかにさかのぼる弥生時代後期を中心にお話します。阿蘇の集落遺跡でたくさんの鉄製品が作られ、使用された時代です。そして、その前の段階の中期後葉、だいたい二千年前ぐらゐとお考え頂いたらいいのですが、この時代にも若干焦点を当てたいと思います。この頃から、阿蘇では外から入ってくる遺物が増加しまして、

大きな遺跡が形成される時期になります。このスライド 4 は南小国町にある地蔵原遺跡ですが、中通古墳群とはこのような位置関係になります。地蔵原遺跡はここになりますが、この遺跡から北部九州、福岡系のベンガラを塗った土器が大量に出て参りました。ちょっとスライド 4 の右側の写真では色が見えにくいのですが、真っ赤な土器がまとまって出て参りました。一般的には祭祀に使ったのではないかとされていますけれども、こういった土器ですとか、大分系の土器ですとか、そしてまた熊本の同じ時期の黒髪式土器などが大量に出土しました。

最近では南郷谷で、幅・津留遺跡の発掘が実施されました。スライド 5 ではちょうど右側のこの黒の矢印があるところ、このあたりが幅・津留遺跡になります。ここでも地蔵原遺跡と同じ頃のお墓も多数発見されました。また後期という段階までを視野に入れると大規模な集落があることもわかりました。特に先ほどの地蔵原遺跡で見ましたようなベンガラを塗った赤い土器が、中期の終わり、約二千年前の溝の中から大量に出てきました。北部九州、福岡周辺では一回の祭祀で使われる土器についてはある程度その量は分かっているのですが、それが一回分だけではなくて累々とですね、お祀りで使われた後に廃棄された状況であることがわかりました。中期後葉という今から二千年頃前というのは、全国的に人の動きが活発化する時期です。その時期に、この阿蘇に、外来系の土器がたくさん入ってくる。これは人の移動もあったと思われるのですが、内陸の阿蘇に向けての、この矢印が非常に大きいものであったと考えています。

#### 【弥生時代鉄器研究を牽引する熊本・阿蘇】

続いて、この弥生後期という、阿蘇で大量の鉄が発見される時期の話に入りたいのですが、その前に弥生時代の鉄の研究が今どうなのか、それに対して、熊本あるいは阿蘇はどのような影響力を持っているのかというところお話ししたいと思います。スライド 9 にお示した図では細かく見え辛いかもかもしれませんが、これは日本列島の地域ごとに鉄器がどのように普及したのかを示した図です。私の恩師、広島大学の川越哲志先生がお書きになったものです。要は九州が古くから鉄器が入ってきて、徐々に東に行きますと普及が遅いということを表している図です。ここに北九州、そしてここに南九州、南島とありますが、熊本というのは、どちらに入れられているのかというと北九州に入れられているのです。というのは熊本では、福岡よりも古い鉄器が既に発見されていたので、熊本の鉄器を北九州に入れて代表させて説明されていたわけです。南九州としては鹿児島、宮崎がありますが、私たちのイメージでいうと、ある清涼飲料水の会社、南九州何とかボトラーズとかありますよね。熊本は南九州に入れられたりしていますが、やはり北、南とは全く違う世界が真ん中にある、本当は中九州という捉え方が良かったのかもしれませんが。ただ川越先生はこのように熊本を北九州に入れていました。九州を出ますと、鉄器の普及はこのように階段状に差があると見られていました。かつて鉄器の出土が希薄で普及が遅かったとみられた山陰、北陸、それから四国の徳島、高知県は今では大量の鉄器が発見されています。そして

鉄器だけでなく、鉄器生産の痕跡、鍛冶遺構も発見されるようになりました。これは圧倒的に熊本での発見数が多いという状況は変わっていませんが、最近では日本海側では富山県あたりまで、太平洋側では愛知県あたりまで確認されるようになってきました。そしてかつての理解では弥生時代なので稲作に直接かかわるような鋤、鍬、鎌といった農具も鉄に変わっていたと言われていたのですが、そういった状況は見られないことがわかってきました。北部九州、中九州で見られる農具の鉄器化は、九州を離れるとかなり緩慢であることがわかっています。

スライド 10 になりますが、熊本は弥生時代の鉄の研究に対して、牽引者的な存在であり続けています。先ず日本最古の鉄斧といわれたのが玉名市の天水町で発見されました。斎藤山貝塚から出土した鉄斧です。これは中国製の鑄造鉄斧といいまして、鑄型に入れて作った鉄斧でした。鍛冶屋で鍛えたものではありません。2000 年代に入りまして新しい年代測定法が開発されて、それによって色々な遺物の年代の見直しが始まったのですが、斎藤山貝塚の鉄斧も最古とはいえない、時期が決定できない資料ということで、最古級の座を剥奪されてしまいました。私はこの資料を簡単に最古級の座から外すことはおかしいと思っていまして、中国、朝鮮半島という東アジアの流れの中でもっと評価すべきではないかと考えています。それから玉名市岱明町の下前原遺跡では住居跡から鉄滓（てっさい）が出土しました。鉄滓は製鉄や鍛冶を行うときに副産物として出てくるのですが、元々、砂鉄とか鉄鉱石には不純物が含まれており、その不純物が溶けて流れ出て、冷えて固まったものです。この鉄滓が出土すると、そこで何か作ったということが議論できるようになります。当初は、これは製鉄、つまり鉄鉱石や砂鉄を溶かした時に出たカスではないかと評価されまして、日本最古の製鉄の跡ではないかというふうな評価がささやかれたのです。その後の自然科学的な分析によって、製鉄ではなくて、鍛冶の鉄滓と判断されましたが、にわかに弥生製鉄論の一翼を担いました。これは弥生時代後期終わり頃の資料です。ただ、弥生時代の鍛冶についてほとんど議論もできないような時期に、鉄器生産に関する証拠をもたらし、鉄器生産論の予兆を示していたと考えられます。その後、予兆が現実のものとなり、弥生時代後期の鍛冶の痕跡が集落遺跡の中でたくさん発見されるようになりました。このスライド 11 に挙げていますように、玉名の諏訪野原遺跡、大津町の西弥護免遺跡、今、熊本市になっていますが、運動公園のところにあります山尻遺跡、そして山鹿の方保田東原遺跡があります。スライド 11 の右側に方保田東原遺跡のポスターを貼っていますが、皆さん、石庖丁というのはご存じでしょうか。稲穂を刈るための石の道具があるのですが、その形を模して鉄で作ったものですね。石庖丁形鉄器といいます。これは日本全国を見渡しても方保田東原遺跡にしかありません。それから多数の鉄製品の出土も知られるようになり、1980 年代までで、これほどの鉄製品が出土し、また鍛冶遺構が発見された県はどこにもありません。しかし、このことを鉄器研究の中でも取り立てて評価したり、弥生文化研究の中でも取り立てて評価するということは少なかったというのが実情かと思えます。ところが 80 年代後半以降、

この阿蘇の鉄が注目され始めます（スライド 11）。先ずは下山西遺跡です。この遺跡が発掘されて、竪穴住居跡と箱式石棺墓から鉄製品が出土しました。竪穴住居跡から出土した鉄製品は数えますと 80 数点になるのですが、これは一つの集落から出土数としては当時非常に多いと言えます。非常にタイムリーなのですが、この遺跡の報告書刊行の準備ができた頃、九阪研究会(埋蔵文化財研究会)という日本全国の研究者が集まるような研究会が高森町の南阿蘇国民休暇村で開催されました。その時に大部の資料集が 2 冊ワンセットで刊行されました。その中には日本全国の弥生時代の鉄器が収められたのですが、その 1 冊目の最初のほうに下山西遺跡出土鉄器のできたてホヤホヤの図面が掲載されました。阿蘇にはこんなにたくさんの鉄器を出す遺跡があるということを全国に印象付けたのではないかと思います。ただ、私はその一方で、阿蘇町教育委員会から速報で報告された陣内遺跡出土の数点の鉄器に注目していました。それは鉄の刀子（ナイフ）で、弥生時代の竪穴住居から出土したものです。私が学生の頃に見せて頂いたときは、あまり錆がついてなくて非常に残りが良いものでした。大変きれいなナイフです。今、どういう状態になっているのでしょうか？ 気になります。これを見たときに気づいたことは、普通の弥生時代の刀子と形が違うという点でした。刃部が先端から関(まち)に直接的にのびて、関は丸く収まるという独特の形をしています。同じような形をしたものが 3 点あるんですね。これは恐らくここにあったムラの鍛冶工房で作られたものであるからこそ、その作り手のくせが製品に現れて同じような形になったのではないかとすることを初めて考えさせられました。鉄器からの鍛冶の技術を想像させてくれた、私にとって非常に重要な資料です。

80 年代後半の阿蘇における鉄器の発見は序章に過ぎなかったことが 90 年代に入って分かります。90 年代になると、膨大な鉄製品を出土する集落遺跡が発掘されるようになりました。またなんとといっても鉄器の保存状態が良い。多いだけではなくて残りが良いんです。残りが良いと何ができるかという観察が良くできるのですね（スライド 13）。それまではスライド 14 にあるような刀子、鉄鏃（矢じり）なども錆に覆われていることもあって推定で図を作成するようなこともありましたが、阿蘇の鉄器は刃先の特徴がどうだとか、関をどう作っていたとか、穴をどう開けていたとか、そういう細かいところが観察、議論を可能にしました。出土量の多さによって、鉄の道具箱の中身が良くわかるようになってきた。それを示せるようになったのは阿蘇の鉄器のお陰です。

このスライド 14 ではこの赤い太線をつけている場所が先ほどお話ししました下山西遺跡です。そしては南側に行きますと宮山遺跡から下扇原遺跡までずっと遺跡が繋がっています。それからこの先に陣内遺跡がありますが、鉄製品を大量に出土する遺跡がこの阿蘇谷に非常に集中していることがこの地図を見て分かります。それから阿蘇の鉄器研究が与えてくれたもう一つの恩恵は、以前であれば見過ごされていた小型の鉄器、例えば錐とか針などですが、明らかになってきた点です。これは恐らく発掘調査に携わる方の目が良かったと思いますし、努力のたまものだと思います。場合に



よっては磁石を使って検出していましたからね。他地域の遺跡によっては、ある程度大きさがあって形があるもの鉄器は取り上げてくれるけど、針や錐のような小型品は土を掘っているときにそれを掘り飛ばしていることもあるのではないかと思います。阿蘇の遺跡ではそれを丹念に検出されたということなのでしょうが、その結果がこの地域において鉄製品の発見数が多いということに繋がっているのだと思います。これはあとで詳細に説明しますが、下扇原遺跡から出土した鉄器を、全部ではないのですが集成して研究会などで披露しますと、これは一つの県の鉄器の集成ですかと質問されることがあります。違います、一つの遺跡からの出土鉄器ですと返答すると驚嘆されます。そういう鉄器を大量に出土する遺跡が阿蘇には豊富にあるんですね。この地域が、例えば四国地方全県分とか中国地方全県分程度の鉄器出土量を、たったこれだけの範囲の遺跡で相当する量を出土しているということは間違えなく言えるでしょう。しかも先ほど言いましたように量だけではなくて質と言いますか、残りも良いということで弥生時代の鉄器研究をさまざまな方面に導いていると言えます。



### 【阿蘇の弥生時代鉄器－阿蘇谷を中心に－】

近年、弥生時代の木製品が各地で発見されているのですが、それらにはしばしば鉄器を使って削った痕跡が残っています。ただそういう遺跡では鉄器が出てこない。木器に残された微細な加工痕を検討しようとすると、そこには熊本の鉄器、とりわけ阿蘇の鉄器が引き合いに出されます。阿蘇の鉄器と大工道具を比較し、木器の加工にこのように使用されたのではないかと、といった研究も進められています。弥生時代の木工研究にとって阿蘇で発見された鉄器というのは非常に重要な鍵を握っていると言っても良いと思います。

と申しましても、土の中から発見されたときは土まみれなのですね。次に土を除去

して、赤錆を除去してもこのスライド 15 にあるような感じですが、やっぱり茶色っぽいですね。しかし、これを現代の鍛冶屋で復元しますとこのスライド 16 のようになります。ベースは黒です。黒か灰色ですね。そして刃部のところだけ研ぎますから、そこだけ銀色ということになります。ですから実際にこれらの鉄器が使用されていた当時は、こういうものであったというイメージを持ちながらこの図面や写真を見て頂きたいとお願いします。

鉄鏃・・・下扇原遺跡ではスライド 17 のように大量の鏃（矢じり）が出ていますが、茎がある鏃と茎がない鏃がありまして、多様な形態、サイズのものがあります（スライド 18）。鏃は、弓矢の先につけて武器として使用されたと断定される場合が少なくありません。しかし当時は動物の狩猟もありましたので、当然、狩猟具ということもあったと思います。これだけ鉄鏃がありますが、石で作った鏃も遺跡では出ています。

鉋・・・弥生時代の鉄器で最も多いのが鉄鏃ですが、その次に多いのが鉋（やりがんな）という道具で、のちの時代には宮大工さんが使うような大型品に形を変えています（スライド 19）。弥生時代の鉋は大工道具の鉋の祖形ということになります。先端が槍のような形をしているのでそう呼ばれますが、その刃の先端の形状は多様で、木の加工法や対象物に合わせて使い分けられていたと考えられます。

刀子・斧・・・これは刀子（ナイフ）になります（スライド 19）。それからスライド 20 の斧は多種多様でありまして、特徴的なのはサイズでいうと伐採用の斧が見られない。ただ、しばしばこの阿蘇の遺跡では磨製石斧が出ますので、恐らく大型鉄斧の代わりは石斧が補っていたと考えられます。その製作技法として注目されるのが、こういうふうに斧の袋の縁にみられる折り曲げです。鉄斧の袋の部分というのは柄を差し込みますが、使用頻度が高くなると脆くなったり、開いたりしたのではないかと推測されます。そういう部分をあらかじめ折り曲げたりして分厚くしているのではないかと考えられます。こういった鉄斧は圧倒的に熊本が多く、肥後型とでも命名して良いのではないかと思います。

摘鎌・・・そして、収穫具である石庖丁が材質を変えて鉄の穂積み具となったもの摘鎌あるいは手鎌です（スライド 21）。ちょうど手のひらにすっぽり収まる程度の大きさです。薄く細長い鉄板の両端を折り曲げまして、そこに木の板を差し込んで石庖丁と同じように使用します。この鉄器が非常に多い。むしろ根刈り用の通常の鉄鎌よりも多いということが分かっております。石包丁も発見されますので、鉄製品が作れないときには石庖丁で収穫をするということもあったと思います。

穿孔具・・・そして一番近年の研究で注目されているのは、スライド 22 の小型の穿孔具、穴をあける道具です。その量も非常に多いということが分かりました。管玉のような装身具を作る際、紐通しの孔を開けるのに鉄の錐とか針が必要で、玉作りの遺跡からそれらが出土しますが、阿蘇の遺跡ではそれ以外の用途で使われたと思われる針類が多いと言えます。それから、その針の先をちょっと叩いて開いて伸ばして、

マイナスドライバーの先端みたいな形状にしたものや少しだけ折り曲げたものなど、多様な形態の針状、錐状の小型製品が豊富に見られます。その繊細な、微細な加工を行うための道具だったのでしょう。

以上の阿蘇谷における弥生時代後期の鉄器は、狩猟具・武器・農具・工具がほとんど揃っていたというのが大きな特徴です（スライド 23）。それから特に鉄鏃・鉈・摘鎌が多い。その一方で鋤とか鍬先などの土を掘ったり、穴を掘ったりする道具は意外と少ない。これは、もしかしたら土壌の問題にかかわってくるのかもしれませんが。また、鏃や収穫具、伐採具については同機能を有する石器が存在するので、これだけ鉄を大量に消費している地域でも、鉄が無い時があり、石器が作られていたということも無視できません。そして最後に見て頂いた小型の先が尖った鉄器が豊富であるということは、それらを用いた手工業生産の多様性も示しているといえます。

#### 【阿蘇の弥生時代鉄器—南郷谷を中心に—】

阿蘇谷では見られない鉄器・・・これまでは圧倒的に阿蘇谷の鉄器の方がスポットライトを浴びてきたのですが、先ほど紹介しました南郷谷の幅・津留遺跡の鉄器はさらにそれに輪をかけて出土量が多いということが分かりました（スライド 24）。ここは道路幅の調査ですので、もっと広く掘ったら、どれだけの量の鉄器が出土したのだろうと想像すると恐ろしいものがあります。遺跡の全容が分かれば、もっと鉄に関する情報も多かったのではないかと思います。鉄器の様相は基本的には阿蘇谷の鉄器と同じですが、阿蘇谷ではみられなかった様相も幅・津留遺跡の発掘によって分かり始めました（スライド 25）。これらは小さい薄い鉄板を鑿で切って作られた鏃です。この鏃は莖をもっていますが、こういう作り方で莖をもっている小型鏃は阿蘇谷にはありません。この鉄鏃は比較的、阿蘇外部といいますか、大分とか宮崎で発見されるので、何か特別な意味合いをもつ鏃で、共有される範囲が異なるのかも知れません。それから興味深いのがこの板状の斧で、阿蘇で初めて発見されたものです。朝鮮半島製、韓国で作られた板状鉄斧ですが、鍛えて形を改変しています。このスライド 26 の板状鉄斧は朝鮮半島製を復元したものですけども実際の大きさは、人の手が写っていますけども、こんなに大きいのです。入手した弥生人はこれを後生大事に使用し、そのたびにどんどん短くなって行きます。最初は伐採具として入手したのでしょうが、短くなって途中からまず手斧として使われたのでしょう。それをさらに加工して何か別の道具に使用としたのでしょう。このほかにもスライド 25 にあるように弥生時代の遺跡では見たことがない鉄器もあり、朝鮮半島や中国などから運ばれてきた鉄器が含まれている可能性があります。

刀子・錐・針の多様性・・・さらに幅・津留遺跡で注目されるのは刀子です（スライド 27）。弥生時代の刀子は一定の刃渡りをもっているのですが、この遺跡の場合、刃渡り3センチとか、それ以下の小型品が豊富です。これには驚きました。最初は気づきませんでした。が、錆を落とし、詳細に観察すると刃部をもっているのです。なぜ、こういう小型の刀子が必要とされたのか？これについては、他の遺物の検討が進むに

つれてなるほどと理解できるようになりました。

この小型刀子、あるいは刀子のバリエーションの多さは、阿蘇谷にはなくて、今のところ南郷谷の幅・津留遺跡だけに見られます。全国レベルで見れば、一つの阿蘇なのですが、その阿蘇の中でも地域性がある、その違いが何か生産物の違いに対応している可能性も考えなければなりません。錐や針も阿蘇谷と共通する部分がありますが、大きさ・形状ともに多様です。それらは復元するとこのスライド 28 のようになります。私がさっき刃渡り 3 センチの刀子と言ったものはこのような感じです。それから棒状の鉄器は先端がドライバーの先のようなものもありますし、これは錐になりますけども、恐らく先端だけを研いでその部分だけ銀色を呈していたと考えられます。復元してみますと、それらの刃が鋭いことがわかり、そういうものを使用して木地屋、木の加工に携わる人たちはさまざまな木の加工ができていたのでしょう。

### 【鉄で何を加工したのか？】

しかしこの幅・津留遺跡は小型鉄器が木の加工のためにあったのではないことを示しました。熊本大学の大坪志子さんの研究で装身具の玉類の表面に鋭利な刃物の痕跡が残されていることがわかりました（スライド 29）。玉類は滑石とか蛇紋岩という柔らかい石で作られているものが多いのですが、その製作に先ほどの小型刀子を使っていると考えられるようになりました。勾玉を作るのにもこの刀子が使用されています。削って玉を作るという技術に鉄の工具が使用された例は初めてだと思います。この土地で生まれた鉄器の使い方かもしれません。管玉もそうです。管玉も外側を削っている。鉄針を使って管玉の穿孔に鉄を使用した例は日本海側で頻繁に見られますが、このように外形を削るといのは例がありません。阿蘇独自の道具の使い方だと思います。

それからこの軽石製のイノシシに注目してください（スライド 30）。私が幅・津留遺跡の出土品で一番好きな遺物です。スライドのように大きいものから小さいものまであり、小さいものは 2～3 本の指にのる程度です。親イノシシからウリボウまでを表現しているのでしょうか。これを観察しますと、鋭い刃で削っていることがわかります。こういうものを作って何をしたのでしょうか？自然の恵みに感謝する意味での祭祀があって、そういうときに使われたのかも知れませんが、玩具だったのかも知れません。このように石製品の製作にも鉄を採用するということがわかりましたが、熊本の鉄器について初めての発見ということになります。

### 【鍛冶工房と鍛冶具】

こういった多様なバリエーションの鉄器を大量に保持していた背景には、よそで作ったものをイチイチ、ここに持ってきたということではなくて、自分たちのムラで作っていることを示していると思います。スライド 31 は、阿蘇谷の下扇原遺跡における竪穴住居の跡です。一辺が 5、6 メートルあるような四角い住居の中で炉が出てきまして、その周辺を慎重に発掘すると小さい鉄の破片が出てきました。鉄板を鑿で切ったときに生ずるような鉄片ですとか、鉄器の作かけとか、多様な大きさと形状の

鉄片が発見されました。狩尾遺跡群や下扇原遺跡、幅・津留遺跡、その他の遺跡でも見つかっていますが、この鍛冶工房の密度はよその地域で見ることにはできません。なぜこれだけの鍛冶工房をもった集落が、このように集中するのか？ほかの地域では考えられない現象が阿蘇にはあります。

弥生時代の鉄器はどういう道具で作ったのかというと、ハンマーは意外と石のハンマーを使っています（スライド32）。石器で鉄器を鍛えた訳ですね。これまで一例だけ、長崎県の杵岐にある原の辻遺跡で鉄のハンマーが出ているのですが、こうした鉄のハンマーが今後発見される可能性はあると思います。巧妙な鉄器を見ているとこれは石で鍛えられないのではないかという鉄器もあるからです。ただ今のところ圧倒的にハンマーは石製が多い。そして台となる鉄床（かなとこ）も石です。鑿は当然、鉄を切りますので鉄です。鉄鉗（かなはし）が今のところ発見例がないですね。鉄鉗のかわりに一体どういうものを使ったのか分かりません。砥石が各種出ていますが、砥石は必ずしも鍛冶工房だけにあるのではなくて、各家々で研ぎますから一般の竪穴住居址でも出土します。皆さんご存じだと思いますが、天草陶石という陶器の原料となる石があり、リソダイトとも言われますが、これが阿蘇に大量に入っています。ですから、有明海の沿岸部とも関係があったということですね。あとでさまざまな遺物が阿蘇に運ばれてくるという話をしますが、鉄器の仕上げに使用する優れた砥石までも意図的に入手していたということは阿蘇では鉄器生産の向上が意図して行われていたのでしょう。

このスライド33は私が実用しているリソダイトの砥石です。地域とルートは違いますが、有明海沿岸であれば、この砥石は薩摩半島でも出てきます。薩摩半島でもわずかながら弥生時代の鍛冶工房の跡が発見されつつありますが、それに伴っています。こういう工房が発見される遺跡では必ずと言っていいほど免田式土器が伴います。頸の長い壺で、胴部に半円状の文様を施した土器です。鍛冶技術が南に伝わる際に免田式土器を携えた肥後の人に関わっていたことが分かります。この砥石が阿蘇で発見されていることと、肥後の土器や鉄器が大分の菅生台地や宮崎の高千穂方面で見られることからすると、このリソダイト製砥石も今後、それらの地域で発見される可能性があるかも知れません。鍛冶技術の伝播の道を検討するうえで重要な材料となるでしょう。

### 【鉄器生産と鉄生産】

ここで少し弥生時代の鍛冶の様子について復元実験の成果から説明してみましよう。私たちは遺跡から出土した鍛冶の道具を復元製作して鍛冶に取り組んできました（スライド34）。私がやってもうまく鉄器を作ることはできませんが、プロの鍛冶屋さんが作るようになりますと、「こんな石の道具で鉄の道具が作れるか」とブツブツ言いながらも、弥生時代の出土品と同様の鉄器を作ってくれました。一定の技術をもっていた鍛冶工人は弘法筆を選ばずで、石の道具で鉄器を作ることができていたのだと考えられます。ちなみに鞆は革鞆です。革袋の口に棒を二本付け、巾着の口を閉じる

ような感じで締めて袋の下に差し込んだ管より風を送ると、木炭をたたえた炉内は900度～1000度ぐらいの温度が得られます。

こういう鍛冶炉で熱せられた鉄素材はどのようなものであったのかという点については、一般的にはこのスライド 35にあるように切り餅のような四角い鉄板が候補にあげられます。しかし私はそのほかにもゴツゴツした塊のようなものもあったと思います。いずれにせよ鉄素材は朝鮮半島、大陸から輸入されたというのが通説です(スライド 36)。こういう考え方を決定づけたのは九州大学にいらっしゃった岡崎敬先生です。岡崎先生は『魏志』東夷伝弁辰條を読み解いて、今の韓国の釜山や慶州周辺にあったとされる弁辰地域に倭人が取りに行くという記事に注目されました。そのときに図示されたのが先の述べた壱岐の原の辻遺跡、カラカミ遺跡から出土した板状の鉄器で、これを朝鮮半島から運ばれた舶載の鉄が地金とする説が一般的となりました。近年、弁辰の鉄生産を証明するかのよう、慶州では弥生時代の遺跡ではまずあり得ないような大規模な炉の跡が見つかったり、直径が30センチぐらいある送風管が発見されたりしています(スライド 37～38)。今お話をしている阿蘇の大集落で鉄器が大量に生産されていた頃に、弁辰では大量の鉄が生産され、精錬されていたことが発掘でも明らかになってきたわけです。そうすると確かに朝鮮半島で作った素材が日本に入ってきて、それが『魏書』東夷伝弁辰條に描かれたというふうに考えるのは妥当だと考えます。このスライド 39は韓国における製鉄の復元実験の様子ですが、このような大型製鉄炉での鉄作りを弥生時代には想定することはできません。

ただ私は阿蘇において大量に発見された鉄器に接して、鉄の消費量の背景に土地の褐鉄鉱を原料とした小規模な鉄生産があったのではないかと考えています。これについてはかなり前に発表しまして、多くの方から批判もありました。意外に理系の研究者の中には同意していただける方もあります。むしろ在来の小規模製鉄があった地域でも、朝鮮半島製鉄素材を入手する方が生産性を考えて効率的であることから舶載の鉄素材中心に置き換えられていったという意見もあります。この阿蘇谷にはリモナイト採掘場がありますが、これは阿蘇市の宮本さんの図面でリモナイトが採れる範囲だと描かれています(スライド 40)。このように大規模な褐鉄鉱床があるのです。特に私は以前、摘鎌のように非常に薄い鉄器や小型鉄器の素材としては阿蘇で作られた褐鉄鉱起源の鉄が投入されたのではないかと考えました。その製鉄は技術的に当時可能かという点についてですが、鍛冶炉の規模をやや大きくした程度の炉でも、復元実験を行ってみると小さい鉄塊はできます。当時、どの程度まで炉内温度を上げることができたのか、その点が疑問でしたが、下扇原遺跡 46号住居跡で発見された鍛冶滓、鍛冶の際に出る鉄滓がそれに対する答えを与えてくれました(スライド 40)。この鉄滓を分析したら1180度から1310度ぐらいの間で溶けたものであることが判明しました。この温度があれば十分、低温還元の製鉄は可能です。こういう製鉄の痕跡もこれから探していかなければならないと考えています。

### 【外来系遺物と阿蘇のベンガラ】

さて、鉄器の大量生産、大量消費をしている阿蘇地域であります。もうひとつ特徴なのはたくさんの外来系遺物が弥生時代後期の段階に届いているということです（スライド41）。北部九州、福岡で生産されたと思われるような青銅製の武器ですとか、中国の鏡を模倣して作った模倣鏡（仿製鏡）が非常に高密度で出土しています。そして下扇原遺跡では、このような銅釦といって装飾に使ったりする青銅製品も出土しています。これは青銅製ではなく、錫製であり、大変珍しいものです。さらにガラス玉もあります。このスライド41は今、下扇原遺跡出土品を映していますが、幅・津留遺跡でも出土していますし、その他の遺跡からも出ています。九州大学の谷澤亜里さんがこのガラス玉を検討したところ、インド・パシフィックビーズといって、このガラス玉自体が海外で作られたということが分かっています。このガラス玉は集落から数点出土する場合がありますが、阿蘇では大量に出土する例のあることかどうもまとまった形で持ち込まれているのではないかとおっしゃっています。なぜ、これだけ価値の高い外来系の遺物が高密度に阿蘇に集中するのかということを考えてみると、私はその理由のひとつにベンガラというものがあるのではないかと思います。先ほど、弥生時代の中期、今から約2千年ほど前の土器に赤い顔料が塗ってある、ベンガラが塗ってあるという話をしました。赤い顔料を土器に塗って、特別な土器にしたり、あるいは生活の色々な場面で赤い顔料を使う時代だったのでしょう。その際に使用される良質のベンガラを入手する場所が阿蘇ではなかったかと考えています。ちなみにこのスライド42にあるベンガラは「ベンガラのふるさと」と呼ばれている岡山県新見市の吹屋産です。こういう箱入りで、赤ベンガラと黒ベンガラが売られています。今、赤ベンガラをお見せしているところです。

### 【ベンガラの使用法】

この吹屋の赤ベンガラの材料は異なりますが、先ほど述べた褐鉄鉱もこの赤いベンガラの原料となります。中期の段階ですとこのベンガラがこのスライド43のように土器全体に塗られたという話をしましたが、後期になる土器への塗り方がちょっと変わってきて全面に塗ることはないのですが、このように独特な塗り方をすることが分かっています。これは宮山遺跡の例ですが、これは下が黒で塗られて、上のほうが赤で塗られています。こういう壺型の特殊な土器が阿蘇では一定量出土し、後期になると塗り方こそ変わってきますが、やはり赤い顔料が特別な土器に塗られたようです。それからスライド44は、熊本県教育委員会の宮崎敬士さんが報告書で指摘されたことですが、住居にベンガラを撒く儀礼があります。非常に大量のベンガラが住居の床の上に堆積している場合があります。恐らく住居を廃棄する際に行われた儀礼と考えられるのですが、こういう祭祀は阿蘇の周辺でも見られます。例えば大分側の大野川流域にある豊後大野市で発掘された陣箱遺跡でも竪穴住居の床でベンガラが出土する例が複数発見されています。またこの遺跡でもベンガラを塗布した土器が発見されています。こういう現象が同時多発的にあちこちで起こったのか？しかし

大野川流域は阿蘇で作った鉄製品あるいは阿蘇の鉄器をモデルにした鉄製品が豊富に見られるので、ベンガラを使用する習慣も伝わっている可能性が高いと考えられます。阿蘇産ベンガラの流通と住居内祭祀行為の共通性と言った観点での検討も今後行っていく必要があるのではないかと思います。

ただ阿蘇でのベンガラ消費は集落だけではありません。墓の中で朱を使った痕跡が下山西遺跡、狩尾湯の口遺跡、宮山遺跡で知られています（スライド 45）。下山西遺跡の場合は、100 キロ以上のベンガラが石棺墓の中に納められていたということですが、ちょっと信じられない消費量です。このように阿蘇ではあらゆる場面でベンガラが使用されていることが分かりますが、このベンガラが他地域へ供給された可能性、そしてその見返りとして先に示した外来系の遺物が阿蘇地域にもたらされた可能性を考えておくべきではないかと思います。このスライド 46 は鹿児島大学の石田智子さんが須久式土器と言って弥生時代の中期後半のあの赤い土器ですね、あの時期の土器の動きを図に示されたものです。ちょっと複雑ではありますが、阿蘇には日田から、筑後から、そして熊本平野から入ってくると言うことが示されています。それに対して阿蘇は、土器を大野川流域や高千穂方面に送り出しているということを示しています。阿蘇には色々なベクトルが向けられるだけでなく、阿蘇から外に向かうベクトルがあるということが分かりますが、ベンガラも特産品として阿蘇から外に送り出すものであったと言えます。

#### 【阿蘇から外に伝えられたもの】

熊本大学の坪志子さんのお話しによると、この前段階の玉の動きもこれとよく似ていると言われました。特に阿蘇から大分側へ、阿蘇から宮崎側へという玉の動きはあるのだそうです。鉄器も同じです。先ほど、大野川方面には阿蘇の鉄器が動いているということをお話ししましたが、宮崎方面にも鉄器は伝わっています。南郷谷からであれば、高千穂を越えて五ヶ瀬川を下流に進むと延岡に到着します。延岡では形や製作技術が阿蘇そっくりの鉄器があります。このスライド 47 は延岡から少し南下しました川南町の尾花 A 遺跡の出土品を示しています。これらの地域は元来鉄器が少ない地域です。しかし、延岡では弥生時代後期後半になって鍛冶工房が出現します。その延岡を中心に鍛冶屋は出てきます。尾花 A 遺跡出土の鉄器は阿蘇の鉄器と本当にそっくりです。先ほど注目しました錐とか針といった小型鉄器も豊富ですし、この独特な形、二段の返しをもっている矢じりなどは、肥後型とも言える鉄鏃です。それから何と言ってもこの袋の口の部分を折り曲げた斧ですね、これは正しく肥後の鉄器です（スライド 48）。これが高千穂を越えて宮崎側に入っている訳です。ですから鉄製品の動きというの、玉や土器の動きと非常に合っていると思われれます。

このスライド 48 にあるような変わった刀子を川南の尾花 A 遺跡で見つけました。この道具を使った人たちは鉄器づくりを工夫しているなと感じました。しかしその技術はどこから得たのか？と疑問を持ち続けていましたが、その後、幅・津留遺跡の調査に参加して、その疑問が氷解しました。阿蘇と繋がっていたのです。



### 【ベンガラ生産について】

今一度、ベンガラについて触れたいと思います。ベンガラ生産の跡もいずれ阿蘇で発見されるだろうと考えていましたが、先に長崎県壱岐のカラカミ遺跡で発見してしまいました。壱岐にも弥生時代中期には真っ赤に塗った土器があります（スライド49）。カラカミ遺跡は大規模な原の辻遺跡に付属するような小規模遺跡と考えられることもありましたが、今はそうではなくて非常に独自性の高い生産活動を行っていた集落遺跡と評価されています。ベンガラを塗った土器に関してはカラカミ遺跡の方が原の辻遺跡よりはるかに多いのです。

カラカミ遺跡の今年の調査区はスライド50のこの部分でして、四角い掘り込みがあったのですが、ベンガラを焼いた炉はこの一角から発見されました。ちなみにこの地点のすぐそばでは、漢字の「周」という字が線刻された中国・遼東半島で作られた土器が前年出土していました。この土器に塗布されていた赤色顔料は朱でした。ベンガラではありません。朱は辰砂を精製して作ったもので、ベンガラが少し黒みを帯びているのに対し、朱は鮮やかな明るい色を呈しています。この調査区で、真っ赤に焼けた炉跡が発見され、鍛冶炉ではないかという話が持ちあがりました（スライド51）。そこで私に調査協力の声がかかりました。現地で掘り始めますと、どうも鍛冶炉の特徴が見られず、悩みながら掘り進めましたが、そうすると赤みのある小さな礫のかけらや、それらが固結して大きな塊になったものが木炭の粒と一緒に現れてきました。最後はこのスライド52のようになりました。そこで砕いた褐鉄鉱を砕いて燃え盛る火の中に投入した痕跡ではないかと想定しました。この礫を岡山大学理学部で分析していただいたところ、それがまさに褐鉄鉱で、周辺から出土した赤い粒がベンガラであることが証明されました。このスライド52のよう炉の近くの壁にも鈍い赤色を呈していたのですが、これは褐鉄鉱を焼いている時にベンガラの粉が飛沫して付着したものだ判断できました。この調査区の周辺ではこういうベンガラを磨った石が出て参りました（スライド53）。したがって先ほど述べたように焼いて赤変した褐鉄鉱を石皿という石の台の上ののせて磨石で細かく磨っていくことでキメの細かいベンガラにしたということが想定できるようになりました。いずれ阿蘇では弥生の集落遺跡からもこういう炉跡が発見されると思います。このスライド54は幅・津留遺跡の出土土器ですが、ベンガラが付着した資料が何点かあるのですね。私の手よりちょっと小さい手形を添えています。指先にこんな感じで掴んで磨ったのではないかなと思われる石もあります。これはこういう形で持って磨ったのでしょうか。ちょうどこの下の面にベンガラがベッタリ付着しています。この大型品は台石としていいと思います。いずれ豊富に消費されたベンガラが生産された痕跡というのを阿蘇の遺跡で説明されてくるのではないかと思います。

### 【特産物としての赤色顔料・若杉山産の朱】

もう一つの赤い顔料である朱についても少し触れましたが、この朱の産地として有名なのが徳島県阿南市の若杉山遺跡です（スライド55）。ここでは縄文自体以降、辰

砂が採掘されました。この地図では、徳島県がここにありまして、これが若杉山遺跡ですが、その近くで加茂宮ノ前という遺跡が発見されました。若杉山遺跡はついこの間、国の史跡になった遺跡でして、そこで採掘した辰砂を精製して、朱を生産した遺跡がこの加茂宮ノ前遺跡です（スライド 56）。ここでは辰砂を磨り潰した磨石がたくさん出土しました。さらに注目されるのが、の集落遺跡でなんと 30 軒もの弥生時代の鍛冶工房が発見されたのです（スライド 57）。この遺跡では石庖丁、石斧といった一般的な農具はほとんど出土せず、稲作農耕の痕跡を微塵も感じさせません。朱という赤色顔料と鉄器を生産する何かコンビナートのような印象です。したがって朱と言うこの地域ならではの特産品を生産する集落に、鉄も集まってきたと解釈するのが妥当なのではないかと考えられます。特産品を持つかということと鉄を獲得するということは密接な関係があったとみられます。こういう特産品と鉄との関係を最初に私が発想したのが阿蘇でした。阿蘇のベンガラがあるからこそ、北部九州や大陸起源の遺物も入ってくるという考え方ですが、同じようなことが朱を特産物として有する徳島でも言えるのだと思います。ただ顔料に限らず日本海沿岸地域の玉類やある種の木製品なども特産品としてあり得たと思います。そういったものを生産し、特産品としている地域は外来の文物を入手するうえで優位であったのでしょ（スライド 58）。

#### 【弥生後期社会の衰退とその要因】

さて、弥生時代の阿蘇の集落遺跡では大量の鉄があったという話に戻りますが、弥生時代も終末期、そして古墳時代に入る頃になるとにわかに一変します。近年、本日もお話しなさる熊本大学の杉井先生は有明海沿岸地域に非常に大きな勢力が出現したために阿蘇地域における集落の盛行が見られなくなるというお考えを示されています。古墳時代が始まる頃は、いたる所で沿岸地域に大きな勢力が登場し、前方後円墳が築造されます。これは愛媛でも同じです。ただ、阿蘇における鉄器やベンガラの生産・消費に見られた活況が一気に見えなくなるというのは、人間の活動といいですか、人為といいですか、それだけでは十分に説明できないと思います。

そうすると別の要因を考えなければなりません。阿蘇は平成 28 年に地震の被害を受けられていますが、やはり地震などの自然災害の影響は災害が可能性として考えられます（スライド 59）。小野原 A 遺跡では地震痕跡が発見されていて、これは弥生時代中期頃のあとに起こった地震ということでした。それと宮山遺跡では、ちょうど古墳時代が始まる頃に大きな断層が走っているということが発見されました（スライド 60）。愛媛大学の理学部の先生が熊本地震の調査に関わっていらっしゃいますけども、この先生も慎重な判断が必要と前置きされたうえで、地震の可能性を示唆されました。地震のような自然災害を含む環境変動と生活・生産域の変化というのは非常に重要な課題であると考えています。

環境変動には温暖期、寒冷期などのように長いスパンで捉えられるものがあります。これに対し、地震などの自然災害は究極の短期的な環境変動といってもいいのではないかと思います。私が現在、発掘している愛媛県の遺跡では長期の環境変動が人間の

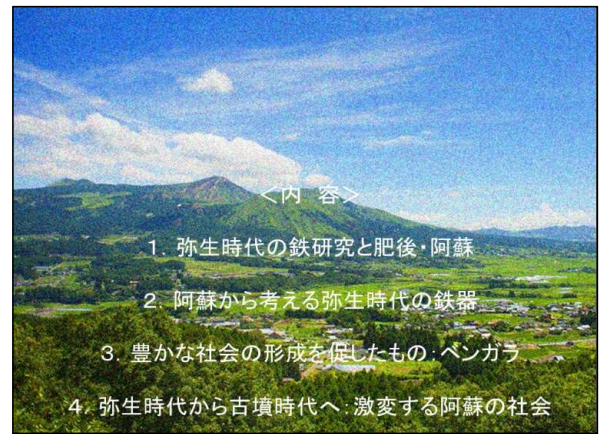
生活に影響を及ぼした痕跡を明らかにしつつあります。このスライド 61~64 は因島近くの佐島という島にある宮ノ浦(みやんな)遺跡という塩作りの遺跡の写真です。愛媛県越智郡上島町にあります。この遺跡を発掘すると、こういう黒い砂の中から、累々と堆積した塩作りの土器片が出土します。スライド 65 の黒い砂の層は全て古墳時代前期の層です。古墳時代前期だけ黒い砂層が堆積し、その上下には一切黒い砂はなく、白砂層のみです。深く掘りますと弥生時代中期前半、縄文時代孔は前半の薄いクロスナ層が認められます。このクロスナ層はもともと白砂なのですが、植物の繁茂、動物の活発な活動によって腐食・分解作用でクロスナ化したものであり、それが温暖期の証であることを熊本大学名誉教授の甲元眞之先生が主張されております。したがって宮ノ浦遺跡で活発な製塩が行われた古墳時代前期は温暖期で、前期の終わりとともにそのクロスナ層もなくなり、製塩活動の跡も見られなくなることから中期を迎えて環境が大きく変わったと考えられます。中期の5世紀代の製塩遺跡は全く芸予諸島からなくなってしまうのです。こう考えますと環境の変化は非常に甚大な影響を人間の生活に与えると言えます(スライド 66)。阿蘇については弥生時代から古墳時代への移行期に究極の短期変動であるのある地震を想定して、豊かに鉄器化した社会が甚大な影響を受けた可能性も考えられるのではないのでしょうか(スライド 67)。

阿蘇の弥生時代を鉄器やベンガラ中心に話をさせて頂きました。本当は古墳時代、長目塚古墳あるいは中通古墳群の時代までをまで話をすべきところでしたが、力も及ばずできませんでした。どうも申し訳ございませんでした。これで私の話を終わらせて頂きます(スライド 68)。

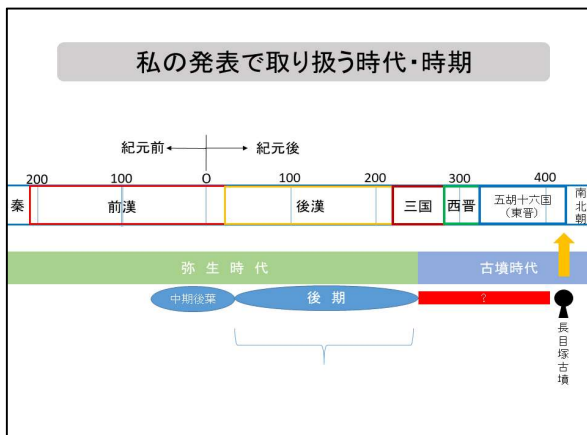




スライド1



スライド2



スライド3



スライド4



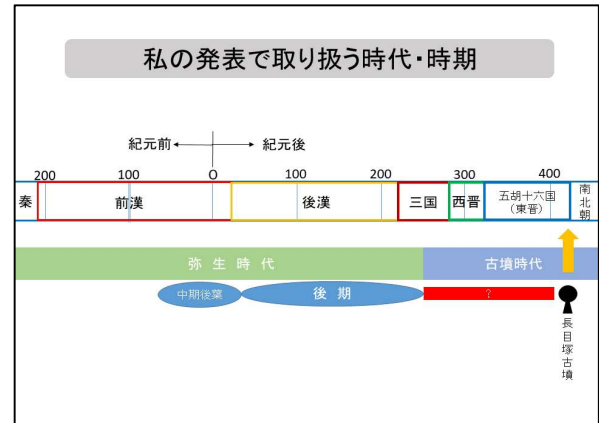
スライド5



スライド6



スライド7



スライド8

### 1. 弥生時代の鉄研究と肥後・阿蘇

地域	弥生時代前期	弥生時代中期	弥生時代後期	古墳時代前期	古墳時代後期
北九州・南九州	●	●	●	●	●
畿内	●	●	●	●	●
山陽	●	●	●	●	●
山陰	●	●	●	●	●
東海・北陸	●	●	●	●	●
関東	●	●	●	●	●
東北	●	●	●	●	●

・かつては鉄器出土が希薄な地域での出土が知られるようになった：山陰、北陸、四国東部(徳島)・四国南部(高知)・・・

・鉄器生産の痕跡(鍛冶遺構)は日本海側は富山(あるいは新潟)まで、太平洋側は愛知まで確認される。ただし、九州、四国東部をのぞくと点的な分布。

・農耕に直接関わる鉄器(摘鎌・鎌・鋤先)の普及及びその範囲は限られる。ただし、他の生業や手工業生産に関わる小型鉄器は各地各様に展開。

川越哲志1993『弥生時代の鉄器文化』より

スライド9

### 注目された肥後の弥生時代の鉄1

1. 斎藤山貝塚出土の鉄斧片
  - ・斎藤山貝塚:玉名市天水町尾田
  - ・貝塚の崩落した土より発見(1955年)
  - ・当初は鍛造品と考えられたが、その形態より鑄造品であることが判明。
  - ・伴った土器が弥生時代前期であったため「日本最古の鉄器」と称された。
  - ・その後、2000年代になって、新しい年代測定法に伴う弥生最古級鉄器の見直しによって「前期ではない。最古ではない」と判断される。
2. 下前原遺跡出土の鉄滓
  - ・下前原遺跡:玉名市岱明町下前原
  - ・弥生時代後期末の住居址より鉄滓出土。この鉄滓が「製錬滓」、すなわち製鉄に伴う鉄滓と判断され、弥生時代製鉄の一翼を担う。

※鉄滓・・・製鉄・鍛冶原料の鉱石・素材にもともと含まれている不純物が鉄よりも低い温度で溶出して、鉄から分離したものを。製鉄の際に生ずる鉄滓を製錬滓と呼び、鍛冶(鉄器生産)の際に生ずるものを鍛冶滓という。

・ちに金属分析によってこの鉄滓は鍛冶滓と判断される。

スライド10

### 注目された肥後の弥生時代の鉄2

3. 相次ぐ弥生時代後期の鍛冶遺構(鉄器生産址)
  - ・諏訪原遺跡:玉名郡和水町
  - ・西弥護免遺跡:菊池郡大津町
  - ・山尻遺跡:熊本市東区
  - ・方保田東原遺跡:山鹿市方保田
    - ・・・石炮丁形鉄器(2点)
    - 三角形鉄片鉄素材残

・全国でこれほど鍛冶遺構が発見された県はなかった。

スライド11

### 2. 阿蘇から考える弥生時代の鉄

阿蘇の鉄に対する注目(1980年代)

- ①下山西遺跡において大量の鉄製品が出土
  - ・下山西遺跡:阿蘇市乙姫
  - ・竪穴住居址と箱式石棺墓から鉄製品が出土
- ②九版研究会(埋蔵文化財研究会)第16回研究集会、高森で開催。
  - ・日本全国の弥生時代鉄器に関する資料集成、報告。
  - ・熊本弥生鉄器の多さが顕著。
- ③陣内遺跡の住居址出土鉄器
  - ・同形態の刀子(ナイフ)が複数の住居より出土。

スライド12

### 阿蘇: 弥生時代の鉄器出土量が最も多い地域

1990年代～

多いだけでなく遺り(遺存状況)も良好!

宮崎敬士編2019『阿蘇・津留遺跡』第1分冊、熊本県文化財調査報告336、熊本県教育委員会

スライド13

### 阿蘇谷の弥生時代後期集落

・出土量の多さ・・・当時の「道具箱」のなかがよくわかるようになった。

・小型鉄器も豊富・・・新たな鉄の工具が認識されるようになった。

下前原遺跡出土の鉄器

宮崎敬士編2010『阿蘇山遺跡』阿蘇市文化財調査報告2、阿蘇市教育委員会

宮崎敬士編2016『阿蘇山遺跡』阿蘇市文化財調査報告257、熊本県教育委員会

スライド14

### 弥生時代後期の鉄器(鉄の道具)

幅・津留遺跡

スライド15

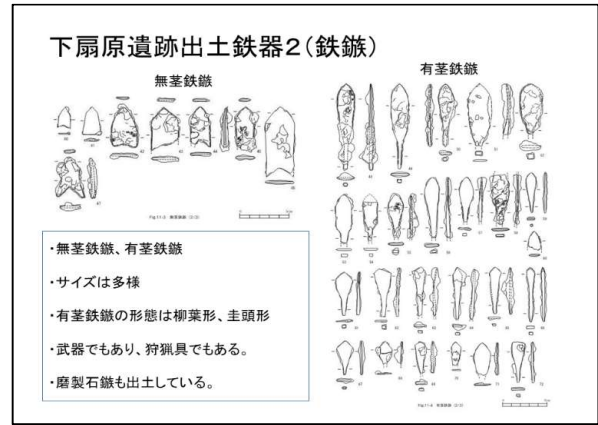
### 弥生時代後期の鉄器(鉄の道具)

故白鷹寺伯氏復元

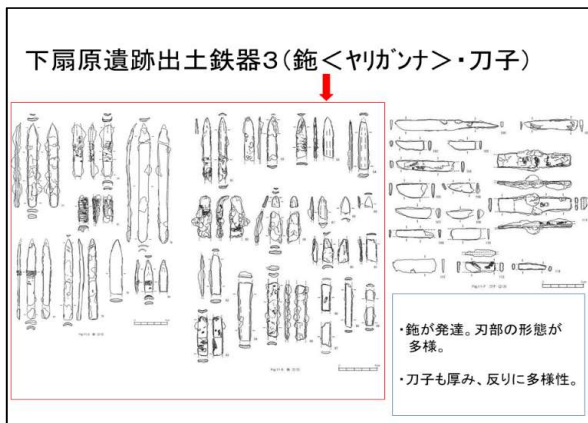
スライド16



スライド17



スライド18



スライド19



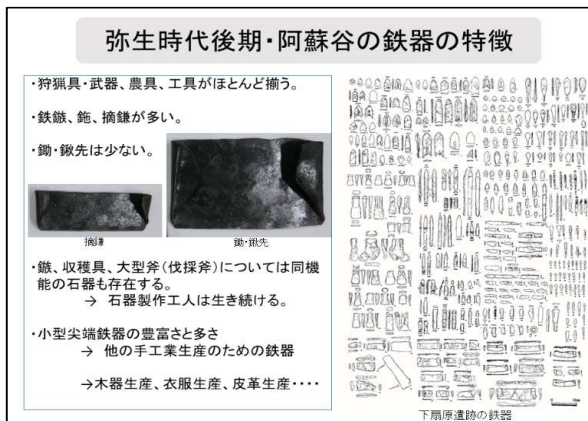
スライド20



スライド21



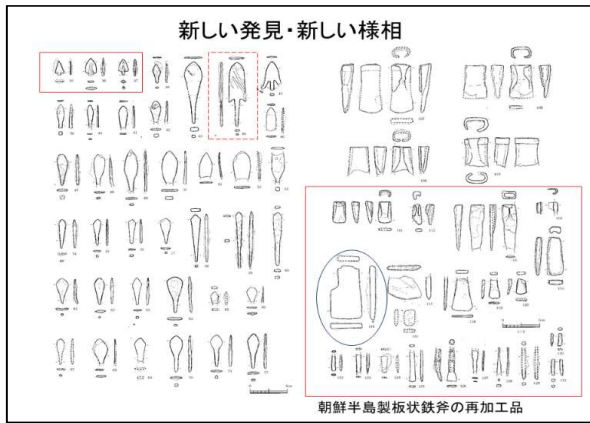
スライド22



スライド23



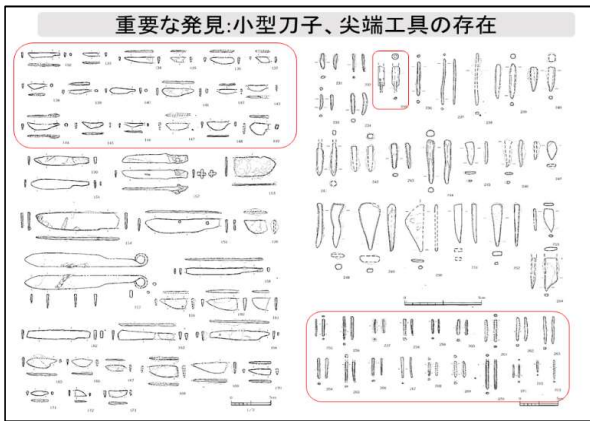
スライド24



スライド25



スライド26



スライド27



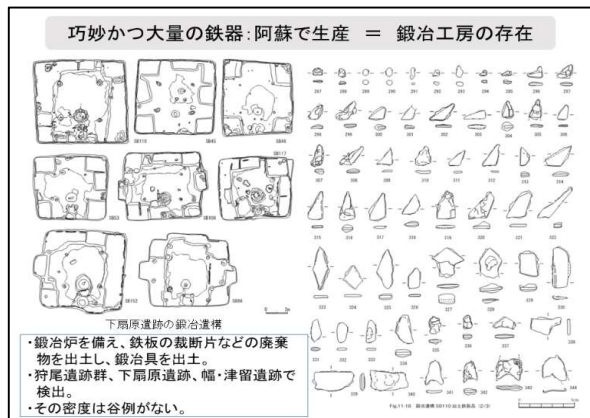
スライド28



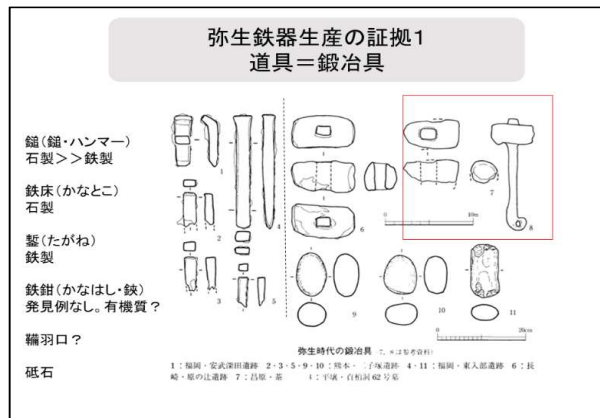
スライド29



スライド30



スライド31



スライド32

沿岸地域から阿蘇に運び込まれた優れたもの：天草陶石(リソダイト)

**砥石**



- ・下扇原遺跡、幅・津留遺跡などで複数確認されている。
- ・豊後、日向に搬入されているかどうか。
- ・ルートはことなるが、沿岸ルートでは薩摩半島の遺跡でも確認されている。

スライド33

1920年代、ジャワ・サラワク島での鍛冶風景



出土鍛冶用具(左、二子塚)と復元品

**弥生時代  
鍛冶復元の試み**

愛媛大学での復元実験  
(白藤幸伯氏と1997年)

スライド34

**弥生鉄器生産の証拠2 鉄素材**

西分増井遺跡(高知県南国市)出土三角形鉄片と「鉄素材」



出原恵三・山本利代編2004『西分増井遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書83、高知県埋蔵文化財センター

スライド35

カラカミ遺跡・ハルノツジ遺跡(長崎県杵崎市)出土の朝鮮半島産船載地金(鉄素材)

『魏志』卷三十東夷伝弁辰條「弁辰の鉄」という岡崎敬氏の解釈



(岡崎1996)

スライド36

「弁辰鉄」の生産遺跡・韓国慶州市隴城洞遺跡の鉄器生産址(2~3世紀)



スライド37



韓国・石帳里遺跡の送风管  
(4世紀)

スライド38

**韓国の三国時代製鉄炉の復元実験**  
(モデル：漆谷洞遺跡、会場：韓国・鉄博物館)



スライド39

**阿蘇における褐鉄鉱を原料とした製鉄の可能性**

・弥生時代後期の阿蘇における鉄器の大量生産・消費の背景に在来の褐鉄鉱を原料として用いた製鉄(鉄生産)があった可能性。



図2 阿蘇山遺跡(1号イイイ遺跡) 阿蘇山遺跡 阿蘇市教育委員会

図3 阿蘇山遺跡(1号イイイ遺跡) 阿蘇市教育委員会

図4 阿蘇山遺跡(1号イイイ遺跡) 阿蘇市教育委員会

・薄い、小型鉄器(摘録、小型工具など)の素材として在来生産鉄が投入されたのではないかと

・下扇原遺跡出土の鍛冶滓から判明した高温度の獲得(1180~1310°C)

大津正巳2010『下扇原遺跡出土鉄冶滓物の金属学的調査』『下扇原遺跡群』熊本県文化財調査報告書257、熊本県教育委員会

スライド40



### 3. 豊かな社会の形成を促したもの

・中期後葉以降、武器形青銅器、小型複製鏡、中国鏡片、ガラス玉などが高密度で分布。その理由は？

宮崎県土曜2010「宮崎県遺跡群」熊本県文化財調査報告257、熊本県教育委員会

スライド41

### ベンガラ

岡山県新見市吹屋のベンガラ

スライド42

### ベンガラが浸透した阿蘇の弥生文化

中期

地蔵原遺跡

後期

宮山遺跡

→

スライド43

### ベンガラが浸透した阿蘇の弥生文化

住居址内への散布：祭祀行為

波及

下馬原遺跡

43号墓穴（ベンガラ散布状況）

福岡県2018「福岡県遺跡群」熊本県文化財調査報告257、熊本県教育委員会

スライド44

### ベンガラが浸透した阿蘇の弥生文化

墓でのベンガラの使用

下山西遺跡3号石棺      狩尾・湯ノ口2号石棺

宮山遺跡1号墓

あらゆる場面で使用されるベンガラが他地域へ供給された可能性

スライド45

### 阿蘇から外へ向けての影響

ベンガラの動きは？

石田智子2019「福地区における墓域の土器産業遺構と出土土器」『福・津留遺跡』第2分冊、熊本県文化財調査報告336、熊本県教育委員会

- ・阿蘇から北部九州系土器が高千穂を越えて日向へ。黒髪式土器は豊後へ。
- ・玉も同じ動きを示す(大坪志子氏の教示)。
- ・鉄器の豊後、日向への動きは？

スライド46

### 日向の鉄製品<宮崎県川南町尾花A遺跡>1

松林豊樹・竹田亨志編2011「尾花遺跡Ⅱ」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書195、宮崎県埋蔵文化財センター

スライド47

### 日向の鉄製品<川南町尾花A遺跡>2

宮崎県埋蔵文化財センター

スライド48



スライド49



スライド50



スライド51



スライド52



スライド53



スライド54



スライド55



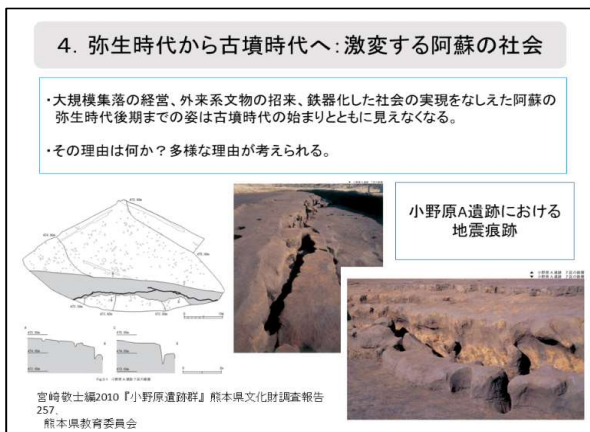
スライド56



スライド57



スライド58



スライド59



スライド60



スライド61



スライド62



スライド63



スライド64



スライド65



スライド66



スライド67



スライド67

# 報 告

1. 「中通古墳群と阿蘇の古墳時代」 杉井 健
2. 「長目塚古墳の出土品の価値と意義」 木村 龍生
3. 「長目塚古墳発掘調査の経緯」 宮本 利邦
4. 「幕末人からみた古墳からの出土刀」 池浦 秀隆

## 報告①「中通古墳群と阿蘇の古墳時代」

杉井 健（熊本大学文学部准教授）

どうもこんにちは。只今ご紹介頂きました杉井と申します。熊本大学で考古学の教鞭をとっている者です。出身は大阪なのですが、熊本に暮らし始めて今年で22年目になりました。大阪に32年間住んでいましたので、熊本での期間が大阪の期間に近づいてきたなあと思っています。

発表の時間が30分弱ですので早速内容に入っていきたいと思います。私の資料として、スライドがそのまま印刷されたものが配布されていますので、その印刷資料と前に写すスライドの両方を見て頂ければと思います。

私は今回、中通古墳群というのはどういう古墳群なのかを解説して欲しいという依頼のもと、このスライドを作りました。スライドのトップの画像（スライド1）は私がよく使うものですが、阿蘇と大阪平野の南部を同一縮尺で切り取って、大阪平野南部を阿蘇谷に貼ったものです。これをみると、阿蘇谷の面積は、大阪の百舌鳥・古市古墳群の範囲がちょうどそっくり入る大きさであることがよく分かります。大阪に行っても今は家ばかりになっていて古墳の様子がよく分かりませんが、大阪平野の南部にある百舌鳥・古市古墳群、あの大古墳群がそっくり入るくらいの面積を阿蘇谷は持っているのです。この画像ではそうした阿蘇谷の広さがよく分かると思います。では早速本題に入りたいと思います。

スライド2に示したのは本日の報告の目次です。この5つを順にお話しします。30分弱で全部こなせるかどうか不安なのですが、最初に、中通古墳群の内容から説明させて頂きます。そのあと発掘調査された長目塚古墳とはどのような古墳なのかということの説明したいと思います。3番目からは研究発表のような形になるのですが、中通古墳群の始まりをどのように捉えられるかという、その辺から話をしようかなと思っています。それから4番目は中通古墳群のその後はどうなったのかということですね。そして最後に中通古墳群の歴史的な意義について考えたいと思います。

### 【中通古墳群とは】

スライド3の写真では、中通古墳群の位置を示しています。本日の趣旨説明でお話があったように、中通古墳群は、象ヶ鼻という外輪山から南に伸びた丘陵南側の平地部に立地します。阿蘇谷東部の平地部に古墳群が造られているということが1つの大きな特徴になります。



スライド4では、古墳の分布を示しております。左に示した白黒写真は戦後すぐの1947年、昭和22年に米軍が撮影した写真になります。まだ写真中央を北に流れる東岳川が付け替えられる前ですので、中央に写る長目塚古墳の前方部がきれいに残っています。右の図は古墳群における古墳の分布図ですが、このような形で、東岳川を挟むようにしてその左右両側に古墳が分布しています。この古墳分布図は、今日、最初に配られましたプログラムなどの資料にある分布図と同様のものになります。

次のスライド5で古墳群の整理をしておきたいと思うのですが、まず、古墳の数ですけれども14基と言われていたのですが、現存するのは10基です。前方後円墳は2基になります。長目塚古墳と上鞍掛塚A古墳のこの2つが前方後円墳です。それ以外が円墳になりまして8基現存するということになります。時期ですが、これは非常に重要なのですけれども、古墳時代の中期、大体5世紀ぐらいに築造されている古墳群と考えています。ただ問題なのは、古墳群が築造され始めた最初の時期がよく分からないということと、もうひとつは古墳群の最後が分からないということです。これは中通古墳群を研究する上での大きな課題になります。古墳群の中で時期が明確なものは長目塚古墳のみです。つまり長目塚古墳だけが発掘調査されているということになります。時期は研究者によって多少前後しますが、私は中期の中葉のうちでも早い段階だと思っています。細かいことを申しますが、大体、5世紀の前葉、西暦の400年代を3つに割った最初の33年間の中に入ってくるかと思えます。今日、研究者の方が何人か来ておられますが、そういった方々には前方後円墳集成編年でいうところの6期後半から7期初頭と私は考えているということをお伝えしておきたいと思えます。この辺の細かい時期の話はこの後の方の報告でも説明されるかもしれませんが。こうした詳細な状況、つまり古墳の築造時期とか内容などが分かっている点で、長目塚古墳は非常に重要な古墳であるということがよく分かります。中通古墳群でもうひとつ注目したいのは、車塚A古墳横の石室です。それは、古墳分布図では11番で示されたものですが、9番の車塚A古墳の少し北側に位置します。今日はこれに注目したいと思います。

先ほど、中通古墳群の時期を古墳時代中期と申しましたが、スライド6を使って中期とは熊本県地域でどういう時期なのかを見ておきたいと思えます。スライド6の図は、熊本県内の古墳の動向について、古墳時代の前期、中期、後期、終末期という時期順に前方後円墳を中心に並べたものです。ざっくりと大きく前期、中期、後期、終末期というまとまりで見て頂ければと思えますが、前期は菊池川下流域や宇土半島基部地域、氷川流域などの海岸沿いを中心に前方後円墳がたくさん造られるのが特徴です。中期になると菊池川中流域や合志川流域、それから白川上流域の阿蘇谷とか、人吉盆地など、内陸部にたくさんの方後円墳が造られています。その中期に注目すると、長目塚古墳はこの図の真ん中に書かれている前方後円墳ですけれども、その同じ時期の県内をずっと見渡すと、この時期では長目塚古墳が県内では最大であったということがよく分かります。

## 【長目塚古墳とは】

こういう熊本県地域の中での位置付けを前提に見ていきたいと思いますが、スライド7で長目塚古墳はどのような古墳なのかということ整理しておきたいと思えます。ご存じの方が非常に多いとは思いますが、まず重要なことは、墳形が前方後円墳であるということです。古墳というのは今ではこんもりした山みたくに見えますけれども、墳丘斜面の途中に段を設けて造られます。これを段築というのですが、長目塚古墳はその段築の数が明瞭ではありません。後円部3段、前方部2段ぐらいなのかなとは思っています。また、かつては墳丘に沿った形で狭い周溝や外堤がcaろうじて残っていたということが報告書に書かれています。現在、現地に行ってもなかなかよく見えないのですが・・・。墳長は111.5mだったということです。ただ、これは測量図からの数値ですので、実際に周溝などの周囲をしっかりと調査すれば、本来の墳丘の大きさが分かって、数値が変わるかもしれません。次の外表施設というのは墳丘上にどういう構築物があるかということですが、長目塚古墳の表面には葺石が葺かれています。それから円筒埴輪と壺形埴輪を持っていることが重要かと思えます。埋葬施設ですけれども、前方後円墳の中心は後円部ですが、その後円部の埋葬施設はまだ分かっていません。調査がなされていないのです。調査されたのは前方部のほうで、前方部に竪穴式石室がかつてあったということです。石室の一番下の石材を立てていますが、こういう構造の石室を研究者たちは石棺系の石室と言ったりもします。その石室に誰が葬られたのかということですが、報告書によると歯が出ていて、その歯から35歳ぐらいの女性と推定されています。ただ、歯だけからここまで言うのはなかなか難しく、特に男女の差を出すのは非常に難しいので、その辺は再検討が必要なかもしれません。石室からは銅鏡、鉄刀、鉄鏃などといったものが出ていますが、これはまた後ほどの報告で説明されると思います。前方部からは須恵器と土師器が出ています。墳丘からは円筒埴輪や壺形埴輪が出ています。なぜ、このように両者を別に書いたかと言いますと、須恵器と土師器が出たのは前方部からですので、それらは古墳そのものというよりは前方部の石室に関連するものかもしれないということなのです。つまり後円部に造られるのが一番中心の埋葬施設ですので、前方部で出た須恵器や土師器は、後円部に被葬者が葬られた時期をあるいは示しているのかもしれませんが、必ずしもそうじゃないかもしれない。そうすると、やっぱり墳丘、つまり古墳を造った時期を知るという意味では、古墳を造った時に並べられた円筒埴輪と壺形埴輪が重要になってくるのです。ですので、須恵器・土師器と円筒埴輪・壺形埴輪を別に書いて示した訳です。こうしたことを考慮に入れて、先ほど古墳の時期は5世紀の前葉と考えたとお伝えした訳です。

スライド8の上の写真は、長目塚古墳の前方部が破壊される前の姿です。前方後円墳の形がよく分かります。下の写真は現在の姿で、前方部が失われています。前方部は本来なら川の対岸辺りにまで延びていたのですが、今は河川になっています。

スライド9は石室とそこから出土した遺物を示したものです。竪穴式石室は左上の



写真のような状況で検出されており、左下の写真の上の方、石室小口壁の近くに写っている丸いものが人の頭蓋骨だそうです。その頭蓋骨の両側に鉄刀があって、ほかに鉄鏃とか刀子とか鏡とかが出ています。右の写真はそうした石室から出土したものを並べて写したものです。

出土品については、のちに説明があると思いますのでざっと見ておきますが、スライド 10 には須恵器と土師器を示しています。このようなものが出ています。スライド 11 は円筒埴輪と壺形埴輪で、こういったものが出ています。これらの出土品が今年、2019 年の 3 月に県の重要文化財になった訳です。

### 【中通古墳群の始まり？】

報告の最初の方でもうひとつ注目したいと言ったのが車塚 A 古墳横の石室です。車塚 A 古墳横の石室は報告されていない資料なのですが、今回、これが中通古墳群の始まりを考える時のヒントになるのかもしれないと考えました。スライド 12 の左上の写真の田んぼの真ん中にある丸い高まりが車塚 A 古墳で、そのちょっと北側のこのあたり、赤丸をつけた場所で検出されていて、右の写真が調査時の写真になります。これは公表されていない写真です。左下の写真は公表されていますけれども、このような竪穴式石室が出ています。ただ墳丘は無かったそうです。

スライド 13 を使ってこの古墳の特徴を整理すると、車塚 A 古墳横の石室という名前と呼ばれているこれは、埋没古墳です。墳丘はよく分かりません。1973 年の圃場整備で検出されました。石室の構造を見ると石棺系の石室によく似ています。長さは 1.8m。これらの特徴を見ると、石室の大きさの点でも、先ほど紹介した長目塚古墳の前方部石室と非常によく似ていて、そっくりといってもいいかもしれません。また、埋没していた点と墳丘が分からないという点に注目すると、発見状況を含めて次に紹介する道尻古墳とよく類似しています。また、カルデア盆地の平地部にあるということ言えば、本村石棺群ともよく似ているなど私は思いました。本村石棺群というのは前期に位置づけられている石棺群ですので、カルデア平地部にあるこうした埋没古墳を古墳時代前期に位置付けることはできないのだろうか、今回この報告を準備していて考えました。とすれば、車塚 A 古墳横の石室も前期に位置付けられる可能性も出てくるように思われて、そうすると中通古墳群が営まれた場所に古墳が築かれ始めたのは前期のうちである可能性も出てくるんじゃないかなと思ったのですが、いかがでしょうか。

スライド 14 は車塚 A 古墳横の石室、道尻古墳、本村石棺群の位置を示した地図ですが、いずれも阿蘇谷東部の平地部にあり、道尻古墳はそのなかでも少し西の西岳川沿いであって、車塚 A 古墳横の石室は象ヶ鼻南側の東岳川沿いにあります。本村石棺群の場所は中通古墳群から少し西に行ったところです。いずれも、ちょうどカルデアの平地部に分布しているということに注目しています。

スライド 15 は道尻古墳ですけれども、これも報告されていない資料ですので詳細はよく分からないのですが、昭和 56 年（1981）の西岳川の河川改修工事中に発見

されています。その当時の水田面の位置は左上写真の上の方に当たりますが、その位置から4mも下で石室が発見されました。つまりそれだけの厚さの土砂で石棺が覆われていたということですね。埋没している古墳ですが、墳丘はよく分かりません。左下の写真は暗くて申し訳ないですが、道尻古墳の石室もおそらく下の方の石材を立てて使う石棺系の石室になると思います。長さが1.75mでして、こういう状況を見ると長目塚古墳の前方部石室ともよく似ていると思います。なかでも特に墳丘がよく分からなくて埋没しているという点に注目しています。

次のスライド16は本村石棺ですが、これは報告されています（島津編1980）。左上写真のような平地部で石棺が検出されています。昭和48年（1973）の圃場整備の工事中に調査されて、安山岩製の箱式石棺が検出され、石棺の外、つまり棺外でこの右上の写真にあるような壺が出た訳です。この壺は二重口縁壺というもので、時期は、私が見たところですが、古墳時代前期の前葉から中葉に収まる壺だろうと思います。周囲にはまだ数基の石棺が存在したが未調査のままになったということだそうです。石棺だけが単独で築かれていたのかどうかということが非常に気になるところで、方形周溝墓と言って墳丘の周りを方形の溝で囲う墳墓の埋葬施設だった可能性はないのだろうかと考えています。

以上見たように、こうした平地部に造られているのだけれども墳丘がよく分からない古墳が前期にあるとすれば、中通古墳群が営まれている場所にも前期から古墳が造られ始めていてもいいんじゃないのかな、ということが今回考えたひとつの重要な論点になります。

### 【中通古墳群からの系譜】

ここからは、その後の話です。つまり、中通古墳群からの系譜ということでまとめてみましたが、中通古墳群以後がどうなったのかということを考えてみたいと思います。スライド17が阿蘇谷の東側全体での古墳の分布と系譜関係を示したもので、その次のスライド18が中通古墳群とその周辺のみを大きく示したものです。中期の段階で中通古墳群が最盛期を迎え、それが中期のどのあたりまで造られ続けたのかというのは明確ではないのですが、その後、後期から終末期にどう古墳が展開していくのかということ想像しますと、次の後期の前半で迎平古墳群に築造地が変わり、後期の後半に西手野古墳群に変わって、最後に二俣筒横穴群に移動するというふうに考えてはどうか。それぞれが近くに位置しているということで線で繋いだのですが、象ヶ鼻の東側を北東に向かって有力古墳の築造地が移動していくという、このような順番で考えたらどうかという提案です。

ということで、今からこの3つの古墳の紹介をしていきます。まずは、迎平古墳群です。スライド19にまとめましたが、ここは、墳丘や古墳群全体の測量図がないんですね。そういう基礎資料の作成や提示は、今後ちゃんとやっていかなければならないことですが、古墳群に古墳は全部で8基程度あったということですが、現存は4基かなと思います。ただ『熊本県文化財調査報告』第46集では5基になっていて、

でも現地を何度見ても私には4基までしか数えられないので、私は今のところ残っているのは4基かなと思っています。分布調査と測量図の作成が必要ですね。古墳群のうち6号墳ですが、これは昭和50年（1975）に圃場整備によって破壊されています。墳形は円墳で、主体部は横穴式石室なのだろうと思っています。重要なのは左下の写真のような鏡が出ていることです。画文帯環状乳神獸鏡のAに分類されています（辻田2018）、現在ではこれの同型鏡、つまり同じ鑄型で作った同じ文様を持つ鏡が10面確認されています。昭和55年（1980）発行の熊本県報告第46集の段階では6面になっていますけれども、現在では10面ですね。古墳の時期を考える上での材料はこの鏡しかありません。中国製のこの鏡自体は、中期の後葉から後期の前葉に位置付けられますが、では古墳の築造時期はとなると、阿蘇谷で横穴式石室が築造され始めたのはどの時期なのかということが問題になってきて、現状で確実に中期に遡るものはないのではないかなと思っています。とすれば、鏡の時期を合わせて考えると、この迎平古墳群の時期の一点は後期の前半のうちに入ってきてもいいんじゃないかと思います。つまり中期で中通古墳群の築造が停止されるとすれば、次の後期には、ここ迎平古墳群に繋がるんじゃないかというのがひとつの提案です。

そして後期の後半になると、西手野古墳群に変わるんじゃないかというのがもうひとつの提案です。西手野古墳群には、スライド20に示しているように、上御倉古墳と下御倉古墳の2つの円墳が造られています。西側にあるのが上御倉古墳、東側が下御倉古墳です。スライド21は上御倉古墳の横穴式石室です。上御倉古墳にはこういう複室構造の横穴式石室が造られています。スライド22で西手野古墳群の内容を整理していますが、上御倉古墳は墳形が円墳で直径37mから38mの大きさ、主体部は横穴式石室でその全長は10.2mです。この石室は、今も中に入って観察できる石室で、熊本県内では入ることができる石室がなかなか無いので、是非、実際に見学をして頂きたいなあと思います。もうひとつの下御倉古墳は、円墳で直径が30m程度、現在は右の写真のように埋まっているので石室には入れません。両者の時期ですが、下御倉古墳のほうが若干古いらろうと私は思っています。といっても、どちらの古墳も後期の後半の中に入ってくると思います。つまり先ほどの迎平古墳群が後期の前半に中心の築造時期があるとすれば、こちらの西手野古墳群は後期の後半にその築造の中心時期があって、そのような流れでこの2つの古墳群をとらえることができるのではないかと思います。

最後に二俵筒横穴群です。スライド23にまとめましたが、これも正式には報告されていない資料で、その辺が少し問題なのですけれども、昭和58年（1983）の道路工事中に発見されました。これが位置するのは外輪山の上の方になります。標高700m程度というふうに雑誌『えとのす』第22号の説明文には書かれていて、推定10基以上あるということですが、調査されたのはそのうちの4基です。横穴ですので墳丘は持ちません。崖面に穴をあけて、そこに人を葬るというかたちのお墓ですが、2m四方の隅丸の四角の平面形でドーム型の低い天井ということ。人骨がたくさ

ん出ていて1号墓から3体、4号墓から5体、そして須恵器も出ているそうです。その須恵器をもとに7世紀に造られたと推定されています。この人骨資料は、熊本大学医学部に保管されています。右の4枚の写真のような状態で保管されていて、今後、人骨そのものの形質を分析すると面白い結果が出るかもしれませんが、まだそこまで調査は至っていません。

時期が7世紀ということは、二俵筒横穴群は終末期の古墳になります。スライド24を見ながら、これまで見てきたことをもう一度整理すると、中期に中心の時期がある中通古墳群から後期の前半に中心時期のひとつが考えられる迎平古墳群に古墳の築造場所が変わり、そして後期の後半には西手野古墳群に、その後終末期には丘陵を登った外輪山の上に二俵筒横穴群を造って古墳の築造が終了するのでないかなと今回考えてみました。どうでしょうか。

### 【中通古墳群の位置づけ】

スライド25に移ります。最後に、中通古墳群の位置付けをもう一度整理したいと思います。古墳群の意義ですけれども、まず中期に中心の時期があるのは確かなことだと思います。その古墳群中の盟主的存在の長目塚古墳の時期は、中期の中葉でも早い段階で、この時期では熊本県地域最大の前方後円墳になります。長目塚古墳の出土遺物についてはこのあとの報告で詳しく紹介されますけれども、私は大阪平野南部に百舌鳥・古市古墳群を営んだ当時の近畿中央政権との密接な関係が窺える遺物であると捉えています。同時に、長目塚古墳の壺形埴輪は熊本県地域ではおそらく最後の壺形埴輪になると思いますので、そういう資料の存在とか、前方部が非常に低い墳形などを見ると、在地的な様相もたくさん持っている古墳と評価できると思います。

次の点は私が従来から考えていることですが、古墳時代中期中葉というのは近畿中央政権が河川づたいの内陸ルートを特に重視した時代だったろうと思っています。その整備に力を注ぐ動きに関連して、中通古墳群に長目塚古墳のような有力な前方後円墳が築造されたのではないかと想像しています。つまり、内陸ルートの整備を目指す近畿中央政権は、九州島の東西南北を結ぶ内陸の結節点である中通地区の首長と密接な関係を取り結ぶことを重視したのではないかと。そういう一連の動きのなかで、その次の代には迎平古墳群が造られた。このように考える理由は、迎平6号墳で出土した同型鏡は近畿中央政権が同盟を結んだ各地の首長に分配した鏡であると評価されているものなので、そのような鏡が存在するということは、迎平古墳群に葬られた人物と近畿中央政権との密接な関係が示唆されますし、そうなれば中通古墳群の次の代として考えてもよいのではないかと思う訳です。

ただ、スライド26にまとめたように、問題点や疑問点もございます。中通古墳群に関しては開始と終焉の時期が不明です。今回の報告で私が考えたことも今後の調査結果次第で変わってくるかもしれません。これに関連したことでいえば、中通古墳群にある長目塚古墳以外の古墳の時期の解明がとても大事になってくると思います。中通古墳群に関しては、古墳に葬られた人たち、また古墳を造った人たちがどこに住ん

でいたのか、彼らの集落の場所がよく分からないということもまた大きな問題点です。

では、阿蘇谷全体で考えた場合にどのような疑問・問題があるのかということ、これは先ほどの村上先生のご講演と関連することですが、弥生時代終末期にとっても栄えているのは阿蘇谷の西部なのですが、その後の古墳時代に盛んに古墳が築かれるのは阿蘇谷の東部ということで、両者の間に断絶が存在するのです。しかも、古墳時代前期の様相には不明なところが多いのです。これに関連したところでは、古墳時代前期の集落の様相が分からないし、同時に前期の古墳の様相も先ほどお話ししたように多くが埋没しているのかもしれませんが、今のところよく分からない。集落に関していえば、前期だけではなく古墳時代全体で集落自体がよく分かっていません。さらに、前期に注目すると、前期の代表的な埋葬品である三角縁神獣鏡は阿蘇カルデラの周囲を見れば大分県竹田市の七ツ森古墳群まではもたらされていますが、そこから西の阿蘇カルデラ内にはもたらされていません。中期に関して言えば、甲冑は中期の代表的な副葬品ですが、竹田市とか高森町とか蘇陽町（現 山都町）とか、外輪山の周囲では出ているのですけれども、カルデラ内にはありません。それから装飾古墳に注目すれば、确实なところでは、これもカルデラ内にはありません。この装飾古墳の不在は、熊本県地域の中で考えると特異な様相のようにも思えます。

時間がなくなってしまいましたが、スライド 27 から 29 までの図を今回作りました。スライド 27 は阿蘇谷全体における弥生時代後期集落から古墳時代への動きと古墳築造の動向を示したもので、スライド 28 はスライド 27 で示した各遺跡・古墳をエリアごとにグループ分けしたもので、つまり系譜関係を想定したもので、スライド 29 は阿蘇谷における首長墓系譜変動についての一案を図にまとめたものです。

スライド 28 を見ていただきながら簡単に説明しますと、阿蘇谷は、古墳が多く築かれた東部と、弥生時代の後期から終末期に鉄器生産やベンガラ生産が盛んに行われた西部に分かれます。阿蘇谷西部平地部では弥生時代後期から終末期に大規模な集落が営まれ、そこは鉄器やベンガラ生産の一大中心地でした。でも、この地域が古墳時代前期へ継続する様相は見えません。古墳時代の集落は阿蘇谷全体でもよく分からなくなるのですが、阿蘇谷東部平地部に移ってくるような動きはなかったのだろうか今回考えました。その動きをこの図では右向き大きな矢印で示しています。集落の状況は分からないのですが、阿蘇谷東部平地部には、確実に古墳時代前期の石棺が築かれています。また、前期か中期か明らかではありませんが埋没古墳があって、阿蘇谷東部平地部では古墳が造られ始めています。それ以降は、この図に示したエリアごとの系譜において古墳の築造が継続されているような状況です。

このスライド 28 の地図に示したエリア分けにしたがって首長墓系譜変動を図示すると、スライド 29 のようになります。これは今回の報告のために、ちょっと強引に作ったものですが、時間もないので、これを作るうえでの視点だけを説明したいと思います。

視点①は、古墳時代前期の墳墓築造地として、阿蘇谷東部平地部を一体的に捉えた

らどうかというものです。古墳時代中期にはそれぞれの首長墓系譜を形成する本村・山田エリア、役犬原エリア、中通・西手野エリアですが、前期の間は阿蘇谷の東部平地部の近接した場所において、類似する内容の古墳を築造していたと捉えるのです。ですが、道尻古墳とか車塚 A 古墳横の石室は時期がよく分からず、中期に下る可能性もあるので、図の中ではクエスチョンマークを付けて記しています。視点②は、前期では一体的な造墓活動を行っていた阿蘇谷東部平地部の首長たちが、中期になると3つの系譜に分派するのではないかとこの想定です。つまり、本村・山田エリアの系譜、役犬原エリアの系譜、中通・西手野エリアの系譜の3つに分かれるのです。視点③ですが、中期では、中通・西手野エリア中通地区の中通古墳群と本村・山田エリア山田地区の平原古墳群の両者が2大古墳群として並列しているのではないかとこのものです。ただし、視点④ですが、前方後円墳を築くという点で、中通古墳群が営まれた系譜、つまり中通・西手野エリアの系譜が後代にかけても主流をなすと考えられます。そして視点⑤は、後期から終末期になると各首長墓系譜は横穴群に収斂する状況になるのではないかとこのものです。この視点⑤にしたがえば、今は横穴群の存在が確認されていない本村・山田エリアですが、その外輪山の高所部をもっと丹念に探索すれば横穴群が発見されることはないのだろうかということを考えてみました。ここまでお話ししたような視点を念頭に置きながら、この阿蘇谷の首長墓系譜変動図を作ってみました。これは今回の報告での新たな提案なのですが、いかがでしょうか。

最後です。私は長目塚古墳出土遺物の調査を2010年に始めまして、それ以来今年までの10年間、阿蘇の調査に継続的に関わらせていただきました。最後のスライド30は、そうした調査をともに行ってくれた学生たちの様子です。彼らの力のおかげで様々な成果を上げることができましたし、また、地域の皆様のお力添えのおかげで調査を何とか無事に行うことができました。阿蘇で学んで卒業し、九州各地の自治体で文化財担当の職員となっている学生もたくさんいます。本当にありがとうございます。

今回は、そうした調査成果の一端を報告させて頂きました。また来年以降も阿蘇谷で調査を継続したいと考えておりますのでご協力頂ければと思います。よろしくお願いいたします。ではこれで発表を終了したいと思います。ありがとうございました。

#### 【参考文献】

- 坂元経堯 1962「阿蘇長目塚 附小嵐山古墳」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp.1-40
- 島津義昭編 1980「塩塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第46集、熊本県教育委員会：pp.1-23
- 島津義昭 1982「阿蘇の古墳」『えとのか』第19号、新日本教育図書：pp.84-96
- 杉井 健編 2014『長目塚古墳の研究』有明海・八代海沿岸地域における古墳時代

首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究、2010年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、熊本大学文学部

杉井 健 2018「弥生時代後期集落の消長よりみた古墳時代前期有力首長墓系譜出現の背景—なぜそこに古墳は築かれたのか—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集、国立歴史民俗博物館：pp.351-407

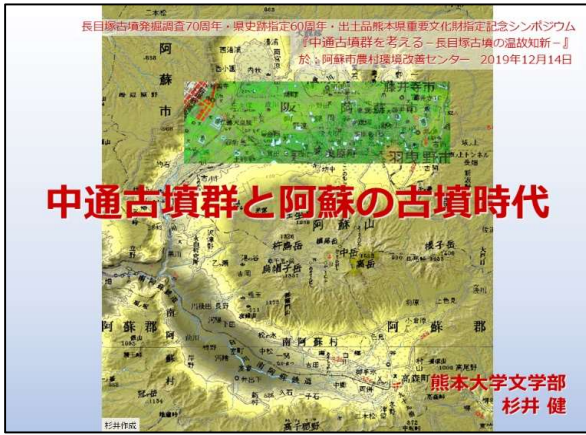
杉井 健編 2019『古墳時代阿蘇ルートの研究—阿蘇地域に築かれた古墳に着目して—』2014年度～2017年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、熊本大学文学部

辻田淳一郎 2018『同型鏡と倭の五王の時代』同成社

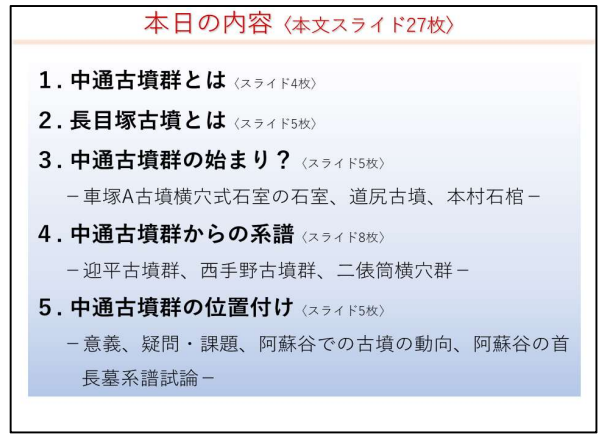
野田拓治 1983「阿蘇の古墳文化」『えとのか』第22号、新日本教育図書：pp.38-49

森山栄一 1983「長目塚古墳の埴輪」『肥後考古』第4号、肥後考古学会：pp.135-150

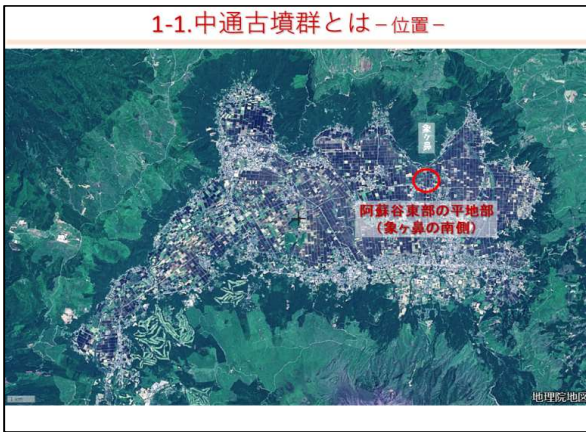




スライド1



スライド2



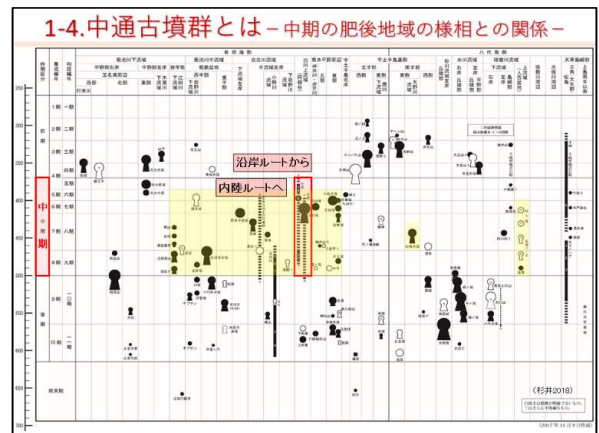
スライド3



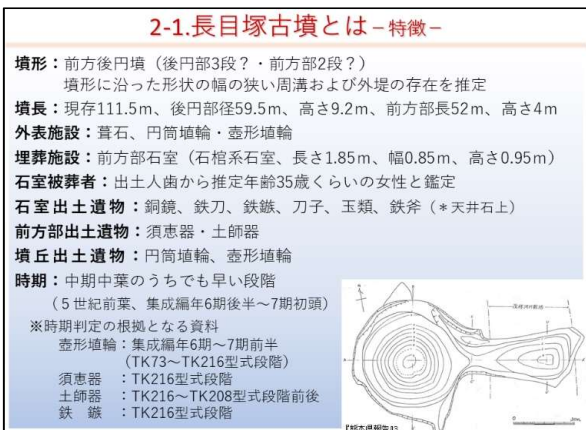
スライド4



スライド5



スライド6



スライド7



スライド8





スライド9



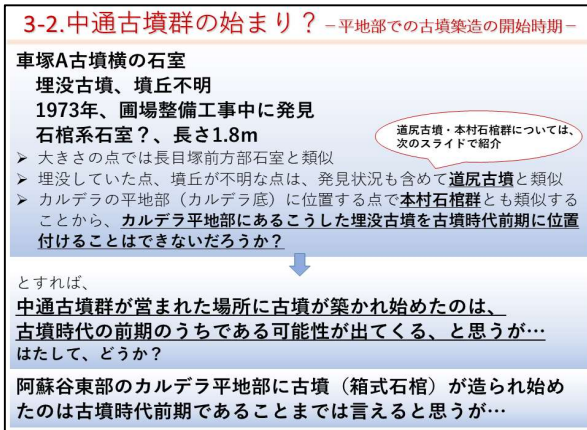
スライド10



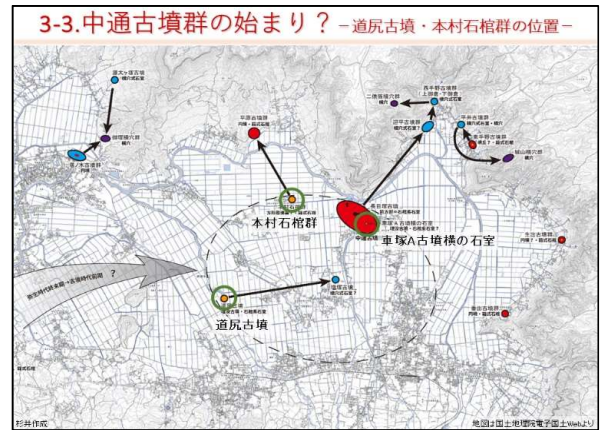
スライド11



スライド12



スライド13



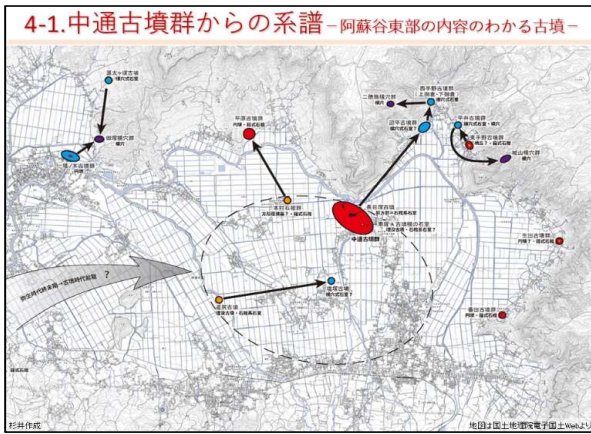
スライド14



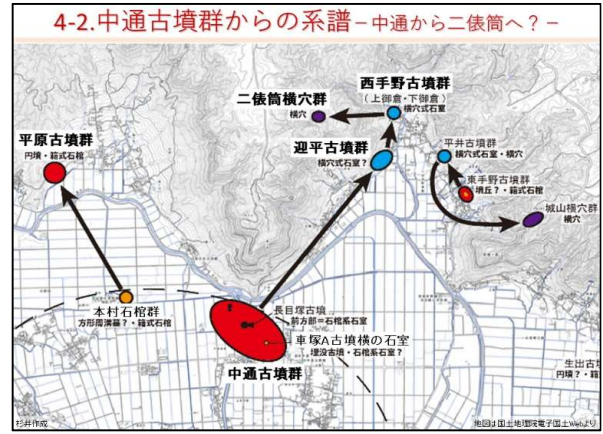
スライド15



スライド16



スライド17



スライド18

**4-3. 中通古墳群からの系譜 - 迎平古墳群 -**

古墳群測量の必要性

古墳群：8基以上（現存4基？、熊本県報告46では5基）

6号墳：1975年、圃場整備により破壊

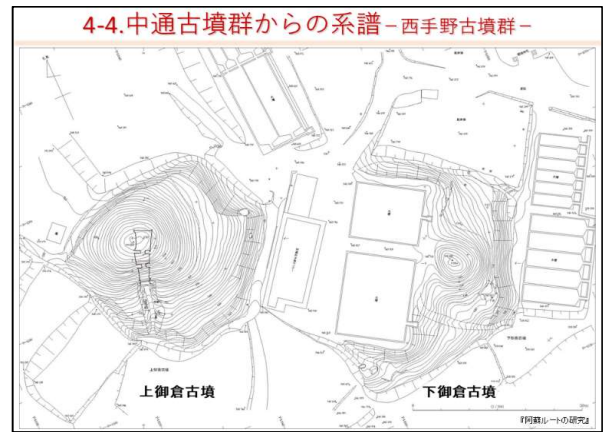
- ・円墳、横穴式石室？
- ・画文帯環状乳神獸鏡Aの出土

※同型鏡10面（熊本：江田船山・国越、宮崎：持田20号、福岡：山ノ神、香川：津頭西、ほか）

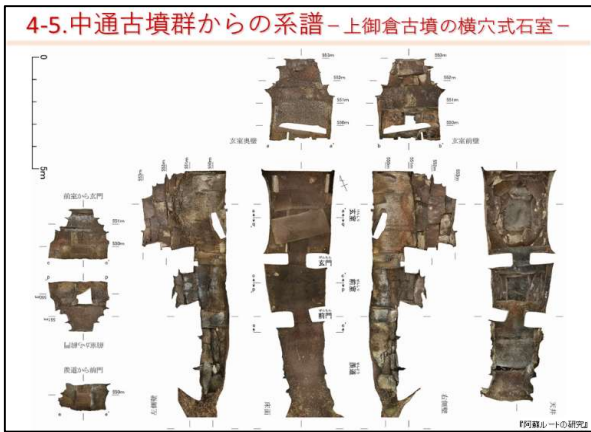
・時期…同型鏡からは中期後葉～後期前葉

※阿蘇谷で横穴式石室墳の築造開始はいつか？  
現状で確実に中期にさかのぼるものがないとすれば、後期前葉なのか？

スライド19



スライド20



スライド21

**4-6. 中通古墳群からの系譜 - 西手野古墳群 -**

上御倉古墳

- 墳形：円墳、直径37～38m
- 主体部：横穴式石室、複室構造・石屋形、全長10.2m
- 時期：後期後半（集成編年10期前半、TK43型式期）

下御倉古墳

- 墳形：円墳、直径30m程度
- 主体部：横穴式石室、複室構造・石屋形、全長8.8m(1962報告)
- 時期：後期後半（横穴式石室構造からすれば上御倉古墳よりは古相）

石室再実測の必要性

スライド22

**4-7. 中通古墳群からの系譜 - 二俣筒横穴群 -**

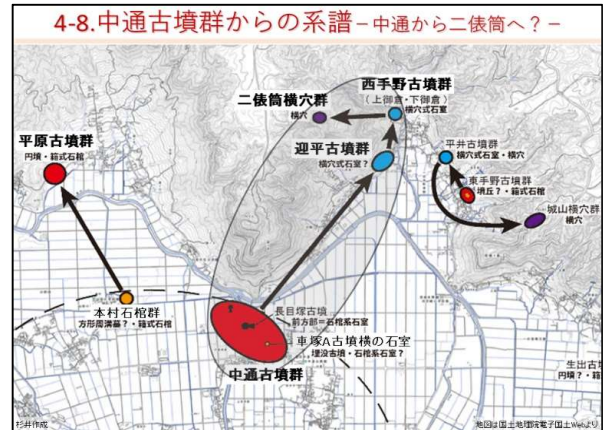
1983年8月、道路工事に発見。標高約700m。  
基数：推定10基以上。調査されたのは4基。  
横穴構造：2m四方の隅丸方形の平面形、ドーム形の低い天井。  
人骨：1号墓から3体、4号墓から5体。  
時期：出土須恵器より7世紀代と推定。

※以上の情報はすべて『えとのす』22

未報告資料

出土人骨は熊本大学考古部出土遺物誌熊本県で保管。

スライド23



スライド24

### 5-1. 中通古墳群の位置付け－意義－

**中通古墳群の意義**

- 古墳時代中期に盛行
- **長目塚古墳**（古墳群中の盟主的存在）の時期は**中期中葉でも早い段階**  
この時期では**肥後地域最大の前方後円墳**（墳長111.5m）
- 長目塚古墳出土遺物より
  - ・百舌鳥・古市古墳群を営んだ当時の**近畿中央政権との密接な関係**がうかがえる
  - ・同時に、肥後地域最後の壺形埴輪の存在や、前方部の低い墳形などからすれば、**在地的様相も色濃く**有している
- 中期中葉は近畿中央政権が**河川づたいの内陸ルート**をとくに重視し、その整備に力を注いだ時期であると考え、中通古墳群に**長目塚古墳が築造**された背景には、このことがあると想像する。
- つまり、内陸ルートの整備を目指す中央政権は、**九州島の東西南北を結ぶ内陸の結節点**に位置する中通地区の**首長との関係**をとくに重視したのではないかと。
- そうした近畿中央政権との密接な関係は、同型鏡の存在から、**次代の迎平古墳群の被葬者**にも引き継がれていると思われる。

スライド25

### 5-2. 中通古墳群の位置付け－疑問・課題－

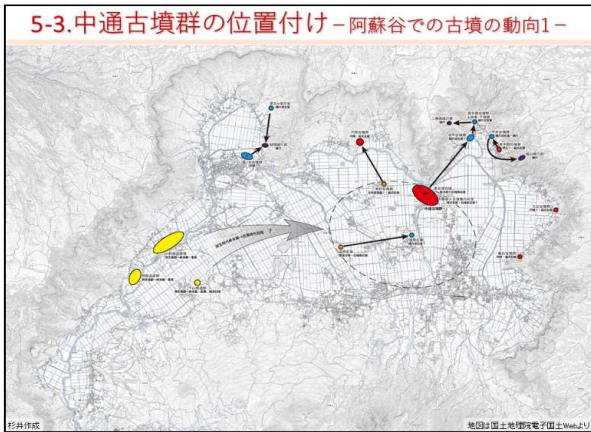
**中通古墳群に関する疑問・課題**

- 中通古墳群の**開始と終焉の時期**が不明であること。
- これに関連し、**長目塚古墳以外の古墳の築造時期**、内容が不明であること。
- 中通古墳群を営んだ人々の**集落**が不明であること。

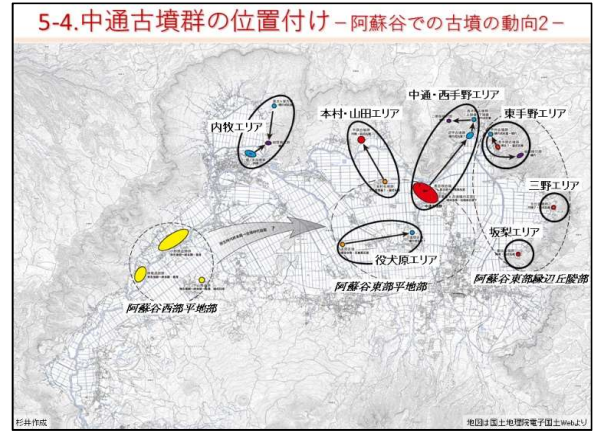
**阿蘇谷の古墳時代に関する疑問・課題**

- 弥生時代終末期と古墳時代前期の**断絶**。
- これに関連し、古墳時代**前期の集落**の様相が不明であること。
- 同時に、古墳時代**前期の古墳**の様相もよくわからないこと。
- 集落に関していえば、**古墳時代の集落**自体がよくわかっていないこと。
- 古墳時代前期の代表的威信財である**三角縁神獣鏡**は、阿蘇カルデラの周囲を見渡せば、竹田市七ツ森古墳群まではもたらされている。しかし、阿蘇カルデラ内では出土していない。
- 中期に関しても、今のところ、阿蘇カルデラ内で**帯金式甲冑**が出土していない点は不思議である。竹田市や高森町、蘇陽町など、外輪山の周囲まではもたらされているのだが。
- 肥後地域である点に注目すれば、今のところ**確実な装飾古墳が存在しない**点も重要な検討課題だと思う。

スライド26



スライド27



スライド28

### 5-5. 中通古墳群の位置付け－阿蘇谷の首長墓系譜試論－

阿蘇谷西部 中野地区	内牧エリア	本村・山田エリア	山田地区	本村地区	中野・西野エリア	東野エリア	三野エリア	経原エリア
古墳前期	場ノ木古墳群	中野古墳群	本村古墳群	山田古墳群	中野古墳群	東野古墳群	三野古墳群	経原古墳群
古墳中期	場ノ木古墳群	中野古墳群	本村古墳群	山田古墳群	中野古墳群	東野古墳群	三野古墳群	経原古墳群
古墳後期	場ノ木古墳群	中野古墳群	本村古墳群	山田古墳群	中野古墳群	東野古墳群	三野古墳群	経原古墳群
古墳新石器	場ノ木古墳群	中野古墳群	本村古墳群	山田古墳群	中野古墳群	東野古墳群	三野古墳群	経原古墳群

視点① 古墳時代前期の墳墓築造地として阿蘇谷東部平地部一帯を想定  
 視点② そこから少なくとも**3つの系譜**に分派  
 視点③ 中期では中通古墳群と平原古墳群が**2大古墳群**として並列  
 視点④ しかし、前方後円墳を築く中通古墳群の系譜が後代にかけても主流をなす  
 視点⑤ 後期から終末期になると、各首長墓系譜は横穴群に収斂するのは？  
 とすれば、本村・山田エリアの高所部にも未発見の横穴群はないのか？

スライド29

この10年、阿蘇での調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。  
今後とも、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

スライド30

## 報告②「長目塚古墳の出土品の価値と意義」

木村 龍生（熊本県教育庁教育総務局文化課参事）

皆さん、こんにちは。熊本県文化課の木村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私のほうで説明させていただきますのは、長目塚古墳の出土品についてです。平成31年3月に長目塚古墳出土品を県指定文化財にさせて頂きまして、その時の担当であったということから、今回、報告をして欲しいとお話を頂きました。



まず、その時の裏話を簡単にお話しします。私は平成30年4月に県指定文化財「考古資料」の担当になりました。現在、熊本県では価値がある文化財はどんどん県指定にして、保存・活用していこうという取り組みを行っています。その中で文化財分野ごとに指定候補リストを作成しているのですが、私が考古資料の担当となり、指定候補リストを見てみましたところ、価値づけが足りず、すぐに県指定の考古資料にできそうなものがないという状況でした。そこで、指定候補リストに掲載されていないもので、すぐに県指定にできそうなものがないか考えたところ、私の前にご報告頂いた杉井先生が編集・出版された『長目塚古墳の研究』という長目塚古墳出土遺物の再検討と価値づけをされた、すごくりっぱな学術報告書のことを思い出しました。この報告書の出版には私も関わらせて頂きましたが、この長目塚古墳の出土遺物だったら、すぐに県指定考古資料に指定できるのではないかと思い、阿蘇市の緒方さんと宮本さんにお話しをしましたところ、「実は来年（平成31年）が長目塚古墳の発掘調査から70周年、県史跡に指定されて60周年にあたり、その年に出土遺物も県指定になるとすごくタイミングが良いです」と、喜んで同意して下さいました。あとは所有者の阿蘇神社さんがどういう反応をされるかと思ひまして、緒方さんを通じて確認して頂いたところ、「熊本地震からの復興をしていく中で、神社で神宝としている大事な資料が県の重要文化財に指定されることは、すごくありがたいし、励みになる」というお返事をいただきました。ここで、私と阿蘇市さんと阿蘇神社さん、三者の思惑が一致した訳ですね（笑）。

そこで、長目塚古墳出土品は指定候補リストに入らなかったものですから、急遽リストに追加して、課内での調整、審議会の先生方への説明、審議会での諮問等、色々と段取りを踏みまして、平成31年3月に県指定重要文化財（考古資料）に指定できたということになります。ただ、私はなぜか平成31年度から考古資料担当を外され、今は別の分野の担当をやっております。こんな強引なことをしたのがまずかったのかなという気もしますけども、考古資料の担当をした1年の間に、長目塚古墳出土品を県の重要文化財に指定できたということは、何か縁があったのだろうと思っています。

さて、これから出土遺物等の説明に入ります。スライド 2 をご覧ください。まず、ドローンで撮影した写真をお見せしますが、これが長目塚古墳です。杉井先生等からのお話にもありましたように今回指定となったのは、写真の赤丸で示した部分に元々あった前方部から出土した遺物になります。本来、古墳の主要な主体部は後円部にありますので、先ほど杉井先生もおっしゃいましたが、後円部の主体部を発掘調査すれば、もっとたくさんの出土品が出てくる可能性もあります。もし、そのようなものが出れば、今回県指定となったものと合わせて、まとめて国の重要文化財にすることができるとも思いません。ただ、文化財保護行政は、原則として、発掘しなくてもいいものは現状で残すという考え方が基本です。将来、例えばドラえもんの道具みたいですけど、眼鏡で覗いたら下に埋まっているものが見えるとか、掘らなくてもそこに何かあるかが分かるようになるとか、そういう機械ができるかもしれません。そういうことができるようになるまで、後円部の主体部に何が埋まっているのか、楽しみにしておくのも良いかなと思っています。

続きましてスライド 3 をご覧ください。今回、長目塚古墳出土品として県指定重要文化財に指定されたのは、9種類451点になります。その種類を見ますと、鉄刀、鉄鏃、刀子、鉄斧、銅鏡、玉類、須恵器、土師器、埴輪の9種類になります。それと、残欠一括という形で、451点以外のものも一括してまとめて指定しています。では、これらの遺物について簡単にですが見ていきたいと思います。資料の中の調書も併せてご覧ください。

まずはスライド 4 とスライド 5 の鉄刀です。鉄刀は2振出土しています。鉄刀の特徴としましては、柄の部分等に有機質が非常に良い状態で残っています。実測図の方が分かりやすいのですが、2振りとも柄の部分に有機物が非常によく残存しています。柄の本体は木製、そして柄の間には繊維質の紐が巻かれているという痕跡がはっきり残っています。

次はスライド 6～8 の鉄鏃です。鉄鏃は1本ずつ出土することが多いのですが、長目塚古墳出土鉄鏃の特徴はスライド 6 の写真ように束になった状態で見ついているということです。この束ですが、一つの束は短茎片刃鏃という種類の鉄鏃が固まった束、もう一つが長茎柳葉鏃という種類の鉄鏃が束になったものです。スライド 7 の短茎片刃鏃という言葉は難しそうに思われますが、簡単に読み解くと、短い茎で刃が片方にある鏃というものです。それが束になっているのですが、最低でも39本の鉄鏃が束になっている状態です。矢柄の部分と鉄鏃を差し込んだ部分は有機質の紐をぐるぐる巻きにして固定するのですが、その紐が非常に良い状態で残っています。スライド 8 の長茎柳葉鏃は、字の通り長い茎で、柳の葉っぱのような形をしている鉄鏃です。この束は、最低でも49本が束になっている状態です。こちらも矢柄と鉄鏃を差し込んだ部分の紐の痕跡が非常に良い状態で残っています。この長茎鏃は長目塚古墳の時期を考えるうえでひとつ鍵となる遺物です。この長茎鏃が全国的に出現するのは、5世紀初頭ぐらいの時期です。長目塚古墳で出土した長茎鏃を色々と検討すると、長

茎鏃が出現してすぐの時期の特徴を持つものと分かりました。なお、先ほど杉井先生のご説明でもありましたが、長茎鏃は近畿の中央政権の影響で全国に波及するものですので、長目塚古墳に長茎鏃があるということは、長目塚古墳の被葬者が近畿の中央政権と何らかの関係を持っていたことを示しているといえます。

続いて、スライド9の刀子です。今でいう、カッターナイフみたいなものです。柄と刃の境の部分を開（マチ）と呼ぶのですが、この開が両側にあるタイプ（両開）と片側にしかないタイプ（片開）、そのどちらのタイプも長目塚古墳出土品にはありません。

それとスライド10の鉄斧です。無肩の有袋鉄斧です。有袋というのは、鉄を折って筒のような形態にし、そこに柄を差し込むような形状のものです。

そして、スライド11の鏡です。銅鏡が1面、仿製の内行花文鏡です。仿製というのは、日本国内で作ったものという意味です。これに対するのが舶載鏡といいまして、これは中国とか朝鮮半島からもたらされた鏡です。長目塚古墳出土のものは、国内で作られた鏡だと考えられます。櫛歯文帯という文様があるのですが、ここが擦り切れたり、擦り減って摩耗している状況が認められます。これは何らかの使用の痕跡によるものだろうと考えられます。

長目塚古墳から出土した玉類には、スライド12の勾玉、管玉、ガラス玉、それと滑石製の臼玉があります。ガラス丸玉10点ずつが被葬者の左右の手首付近から、その他の玉類は被葬者の上胸部付近から出土しているとされているので、恐らく首飾りと腕飾りをした被葬者が安置されたのだろうと考えられます。

これまで説明した出土品は、前方部の石室内から出てきたものですが、ここからは墳丘等で出土したものになります。

先ずはスライド13の須恵器です。須恵器は、4世紀の終わり頃に、朝鮮半島から日本に伝わった登り窯と轆轤という2つの技術を使って作り上げた焼き物になります。長目塚古墳が造られた時期は、須恵器が伝わってすぐにあたり、須恵器が一般の人では入手できない時期で、お宝に近い価値を持っていたと思われれます。長目塚古墳出土の須恵器を見ますと、先ず甕があります。甕というのは壺の真ん中に穴が空いていて、ここに竹筒などを差して、酒などを注いでいたと考えられます。そして、高坏、壺、器台というお供えに使うような土器があります。これらは、全部破片で出てきていますが、これは意図的に割ったものと考えられます。古墳などでは、被葬者を葬ったあとにお祀りをしますが、お祀りで使った土器は廃棄する際に叩き割って廃棄し、それが古墳の墳丘や周溝などから出土します。長目塚古墳でも、前方部に被葬者を葬った後にお祀りを行い、その後、使用した土器などは叩き割って廃棄したのと考えられます。ところで、これらの須恵器は熊本で作られたものではなく、大阪府堺市周辺にある陶邑窯跡群で作られた製品だと考えられます。この陶邑窯跡群は中央政権直営の窯跡と考えられているもので、そこで作られた須恵器が長目塚古墳にもたらされていることは、中央政権と長目塚古墳の被葬者との間に関わりがあったことを

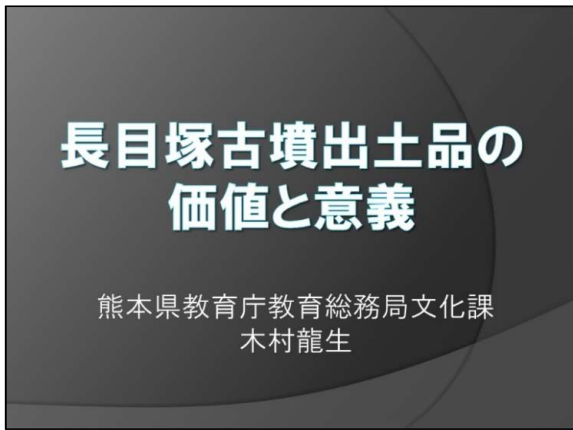
示す根拠になると思われます。ちなみに実物を見てもらうと分かるのですが、長目塚古墳の須恵器は焼成や作りがものすごくきれいです。私は須恵器を研究していますが、熊本県内で一番きれいな須恵器だと思っています。個人的には持って帰って飾っておきたいものです（笑）

次は、スライド 14 の土師器という素焼きの土器があります。こちら破片で出土してしまっていて須恵器と一緒に祀りをした後に叩き割って、廃棄したものだと思います。こちらは、熊本で良く見られる土器と作りなどが同じなので、恐らく地元で作られた土器だと思われます。

続きましてスライド 15 とスライド 16 の埴輪です。埴輪は古墳の上に立て並べるものですが、長目塚古墳には円筒埴輪と壺形埴輪があります。壺形埴輪については、先ほどの杉井先生のご発表にもありましたが、熊本県内の最終段階のもので、これと類似するものが、例えば熊本市南区城南町塚原古墳群の琵琶塚古墳等から出土していることから、そういうところと埴輪づくりで技術的な交流があったものと考えられます。これまで、中央政権との関わりが認められる遺物がいくつかあると説明しましたが、一部の遺物には熊本県内の遺跡の出土品と共通する特徴を持つものもあります。このことから、近隣首長間のネットワークと技術的交流も行われていたと考えられます。

最後に、スライド 17 の残欠一括について説明します。写真のような鉄製品の破片とか小さい土器の破片などですが、これが全部きれいに保管してあります。これは、阿蘇神社さんがこういうものも含めて、資料をすごく大事に保管をされていたことによるものです。通常、錆がボロボロと剥げてしまっている細かな鉄製品をきちんと保管するのは、非常に難しいところもあるのですが、そのようなものまで含めて大事に保管されてきたことが、長目塚古墳出土品が発掘調査から 70 年たった現在まで、きちんと残されてきたことにもつながっているのだと思います。阿蘇神社さんのこのような姿勢には、非常に感銘を受けました。このような点から、残欠一括として、附（ついたり）で指定しています。

スライド 18 の最後にまとめになりますが、古墳の時期を比定する材料となる埴輪、須恵器、鉄製品などから総合的に考えると、杉井先生も先ほどおっしゃいましたが、長目塚古墳が造られたのは 5 世紀前葉と推測できます。それと長目塚古墳出土品が重要なのは、未盗掘の一括資料ということ。未盗掘であるため、被葬者の埋葬時に石室内に何をどれだけ、どのように埋めたのかが検討できる重要な資料です。また、長目塚古墳の被葬者と中央政権との関わり、県内他地域の首長との関わりなど、当時の社会的ネットワークを検討する材料ともなります。以上のことから、長目塚古墳出土品は、熊本県古墳時代社会の構造を解き明かすために欠かせない、非常に重要な学術的価値を持っているということが言えます。このような理由から、県指定重要文化財（考古資料）に指定させて頂きました。今後も保存活用して、後世に伝えていきたいと考えています。どうもありがとうございました。



スライド1



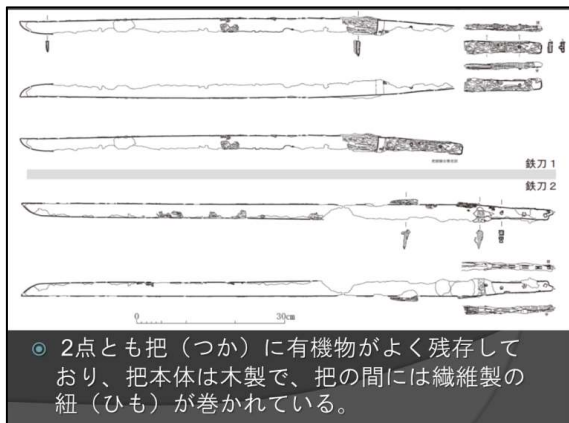
スライド2



スライド3 ※写真は『長目塚の研究』より  
以下、写真及び図面も同じ



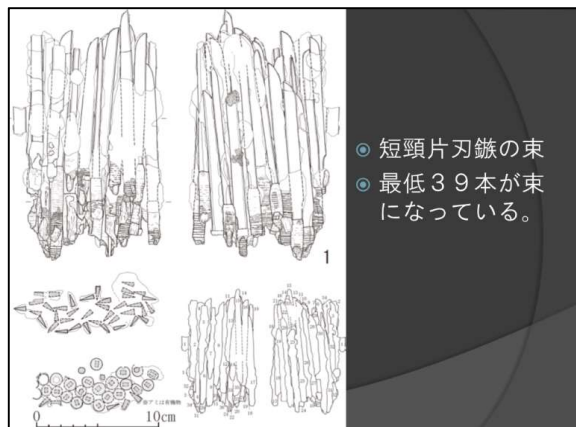
スライド4



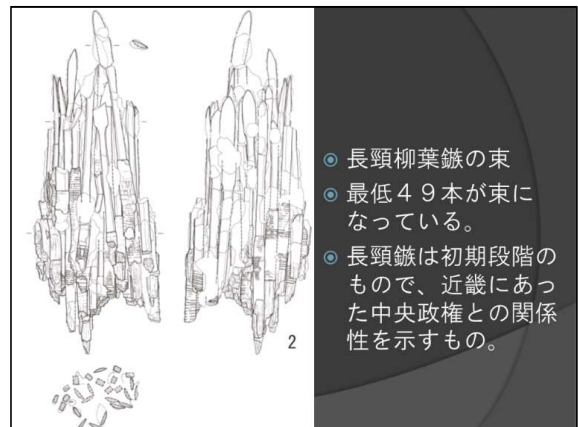
スライド5



スライド6



スライド7



スライド8





### 3. 刀子

- 両関のものと片関のものがほぼ同数みられる。

スライド9



### 4. 鉄斧

- 無肩の有袋鉄斧

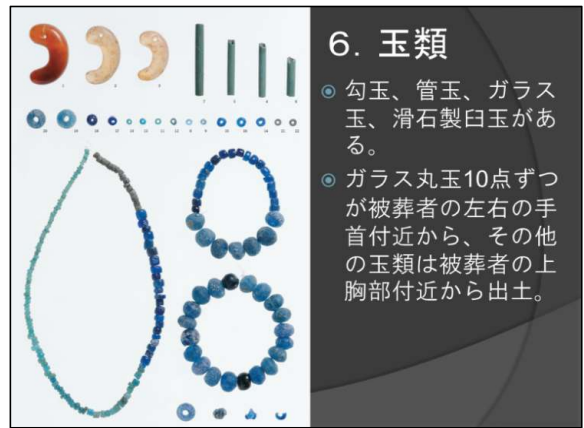
スライド10



### 5. 銅鏡

- 仿製の内行花文鏡で、櫛歯文帯付近に使用による摩耗がみられる。

スライド11



### 6. 玉類

- 勾玉、管玉、ガラス玉、滑石製白玉がある。
- ガラス丸玉10点ずつが被葬者の左右の手首付近から、その他の玉類は被葬者の上胸部付近から出土。

スライド12



### 7. 須恵器

- 甗（はそう）、無蓋高坏、脚付短頸壺、器台、壺、甕がある。
- 大阪府陶邑窯産と考えられ、近畿の中央政権とのかかわりを示している。

スライド13



### 8. 土師器

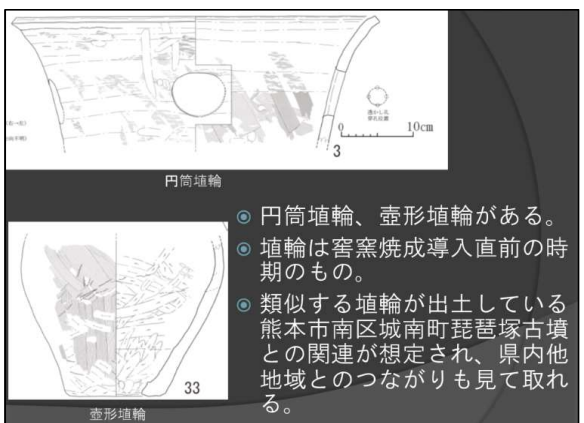
- そのほとんどが高坏、坏で、わずかに壺、甕が認められる。

スライド14



### 9. 埴輪

スライド15

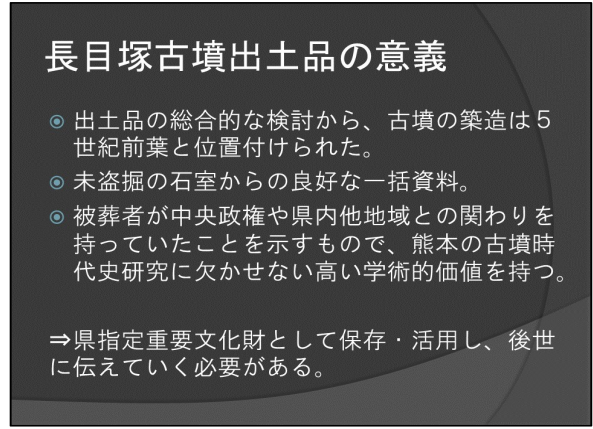


- 円筒埴輪、壺形埴輪がある。
- 埴輪は窖窯焼成導入直前の時期のもの。
- 類似する埴輪が出土している熊本市南区城南町琵琶塚古墳との関連が想定され、県内他地域とのつながりも見て取れる。

スライド16



スライド17



スライド18

調書

阿蘇市 「長目塚古墳出土品」の県指定重要文化財（考古資料）の指定について

名 称	長目塚古墳出土品
員 数	9種 451点（附 残欠一括）
種 別	重要文化財（考古資料）
具 申 者	阿蘇市教育委員会
所 在 地	阿蘇市一の宮町宮地 3083-1（阿蘇神社）
所 有 者	阿蘇神社
概 要	<p>長目塚古墳は、阿蘇市一の宮町<sup>なみたけ</sup>中通に所在する14基以上（現存10基）の古墳からなる県史跡「<sup>なみたけ</sup>中通古墳群」の主墳をなす前方後円墳で、墳長111.5mを測る県内最大級の古墳である。1949（昭和24）年に河川改修のため前方部が破壊されることになったため、前方部の発掘調査が実施された。今回対象となるのは、その出土品である。</p> <p>大まかな区分としては、前方部の主体部である石棺系石室からの出土品（鉄製品、銅鏡、玉類）と、墳丘からの出土品（須恵器、土師器、埴輪）に分けられる。なお、石室の被葬者は、1962年の熊本県教育委員会の報告書では、人歯から35歳くらいの女性と鑑定されたと報告されている。</p> <p>鉄製品には、鉄刀、鉄鏃、刀子、鉄斧がある。鉄刀は2点とも把に有機物がよく残存しており、把本体は木製で、把の間には繊維製の紐が巻かれている。鉄鏃は鉄鏃東2点のうち1点は短頸片刃鏃のみ、もう1点は長頸柳葉鏃のみからなる。長頸鏃は初期段階のもので、近畿にあった中央政権との関係性を示すものである。刀子は両関のものと片関のものがほぼ同数みられる。鉄斧は無肩の有袋鉄斧である。</p> <p>銅鏡は仿製内行花文鏡で、櫛歯文帯付近に使用による摩耗がみられる。</p> <p>玉類には、勾玉、管玉、ガラス玉、滑石製白玉がある。ガラス丸玉10点ずつが被葬者の左右の手首付近から、その他の玉類は被葬者の上胸部付近から出土している。</p> <p>須恵器には、甗、無蓋高坏、脚付短頸壺、器台、壺、甕がある。これらの須恵器は、大阪府陶邑窯産と考えられ、近畿の中央政権とのかわり方を示している。</p> <p>土師器は、そのほとんどが高坏、坏で、わずかに壺、甕が認められる。</p> <p>埴輪は、円筒埴輪、壺形埴輪がある。埴輪は甗窯焼成導入直前の時期のもので、類似する埴輪が出土している熊本市南区城南町琵琶塚古墳との関連が想定され、県内他地域とのつながりも見取れる。</p> <p>これらの出土品の総合的な検討から、古墳の築造は5世紀前葉と位置付けられた。</p> <p>長目塚古墳出土品には、未盗掘の石室からの良好な一括資料が含まれており、またその被葬者が中央政権や県内他地域とのかわりを持っていたことを示すもので、熊本の古墳時代史研究に欠かせない高い学術的価値を持つ。このことから、県指定重要文化財としてふさわしいものといえる。</p>
参考文献	『熊本県文化財調査報告』第3集 熊本県教育委員会 1962年 『長目塚古墳の研究』熊本大学文学部 2014年

熊本県教育庁教育総務局文化課作成

### 報告3：長目塚古墳発掘調査の経緯

阿蘇市教育委員会 学芸員 宮本 利邦

私、地元の阿蘇市を代表いたしまして教育委員会の宮本の方から、長目塚古墳の今回のメインテーマである発掘 70 周年記念ということで、70 年前の発掘調査の経過を当時調査団の代表を務められた坂本経堯先生が撮られた調査写真を使わせて頂き、当時の発掘の様子を振り返りながら、長目塚古墳そのものの内容につきましては杉井先生と木村さんから説明を頂きましたので、私の方は発掘に至る経緯と発掘が行われた意義についてお話させていただきます。



先ず私自身のことですが、ちょうどこのドローンで撮ったスライド 1 の写真（の中通集落で、私の実家もこの中通にありまして、小さい頃からこの古墳に非常に親しみを持って接していたものです。地元の方は、古墳を草が生える塚ということで塚坊主と呼んで、古墳に登って遊んだりしていて、私も小さい頃から歴史に興味があって、古墳に登って土器を拾ったりだとかして、そういった子供が今こういった大人になっています（笑）。一時期、長目塚古墳の残っている後円部分を私の祖父が地権者として管理をさせて頂いた時期もありまして、子供の頃から特に長目塚古墳は私の中では存在が大きいものです。

簡単に裏話をしますと、この今日のイベントに至るまでに、実は 2 年くらい前に色々と資料を見ていたら、ちょうど今年が 70 周年だということに気づきまして、で色々と画策をしまして、先ほどの木村さんの説明があったように県指定になる経緯なども、冒頭に趣旨説明をした緒方の方に話をしまして、ちょうどいい時期だと色々画策して今日の日に至っています。

それでは発掘調査の経緯ということで話を進めさせていただきます。先ず、中通古墳群がある阿蘇谷東部の地図を改めて掲示をしております。杉井先生の示された地図とほぼ一緒ですが、私の示している地図は古墳時代以降中世まで今のところ分かっている遺跡を落としています。御覧の通り古墳時代以降も阿蘇谷の東部は遺跡がたくさんあって、歴史的にもその後継続していく地域であることがこれで分かるかと思えます。スライド 2 の中心に中通古墳群があって、杉井先生のまとめでいけば、こちらの西手野古墳群に遷って二俵筒横穴墓に繋がるのではないかというお話がありました。その後特に外輪山の山麓にはたくさん遺跡が集中して、特に中世になるといわゆる中世阿蘇氏と言いまして阿蘇大宮司家を中心とする武士団が形成されていく中で、外輪山の山の中にちょうどお城のマークがありますけども、いわゆる砦がたくさん作られた

りしています。杉井先生がお話された平原古墳群がこのあたり。(平原古墳群がある) この山田地区には中世あたりからたくさんのお寺がつけられているという話もありまして古墳時代以降も歴史的な遺跡がたくさん残っている地域になります。言わずもがなこちらに阿蘇神社があり、こういう歴史的に非常に栄えている地域だということがこの地図で分かるかと思います。

スライド3は中通古墳群の現在の写真になります。国土地理院が平成28年に撮影した写真です。かつての資料だと中通古墳群全体で十数基あったと伝えられています。現状では明確に墳丘が残っているものだと10基、前方後円墳が上鞍掛Aと長目塚の2基、その他円墳を含めまして10基が残っている状況です。中通古墳群の景観上の最大の特徴は、水田の中に墳丘が展開しているという、今日も行かれたら分かるかと思いますが、非常に美しい景観が残っている古墳群になります。

これを過去の写真に戻りますと、昭和22年に米軍が撮影したスライド4の写真です。ちょうど70年前の発掘調査をする前の写真になります。これを見られると分かる通り、ここに長目塚古墳があって、ここに河川が流れていて東岳川といいます。ちょうど工事前ですので完全な前方後円墳の形で残っているのが分かるかと思います。東岳川が屈曲して流れている。70年前、この屈曲した部分で洪水が非常に頻発しましたので、これを改善しようということで東岳川の改修を目的として工事が行われ、そこでこの前方部を切り取らなければならないということで発掘調査が行われたというのが直接の原因となります。

長目塚古墳の発掘調査については、熊本県の方で発掘調査報告書を発行されていて、そちらの方にまとめられた色々な当時の記録が残っていましたので、それをスライド5という形でまとめさせて頂きました。まず、最初のきっかけとしては、戦時中に東岳川と合流する鹿漬川に新式の樋門が造られた。どうもこれが河川の水害、氾濫するちょっと原因になったようです。1947年に阿蘇山が非常に活発な活動をしていまして、大量の火山灰が降ってしまうということが起こっています。同年の7月に豪雨が発生しまして、この時に造られた樋門のところで河川を流れていた火山灰が堆積して、川床がどんどん上がってきますので、それによって川の水が溢れる。河川氾濫になっていって古墳周辺の中通地区の広範囲の水田が水没してしまうという災害が起きてしまいます。翌年の1948年にも豪雨が発生して、この時には堤防が決壊して多くの水田が流出してしまいます。古墳に近い下西河原集落というのがありますが、まさにここは水没の危機に遭う訳です。ですので、この災害対策のため東岳川を改修しようと計画が持ち上がります。この計画が持ち上がった翌年1949年にまた豪雨が襲うと、長目塚古墳の東側のちょうど屈曲部分に大量の火山灰が堆積してどんどん川床が高くなってきて、いよいよいわゆる天井川の状態になります。それで豪雨災害の危険性が高まったということで河川改修をしましようということになりました。どういうルートで河川を改修しようかと色々計画がされたのですが、やはり屈曲部分を真っすぐにしよう、それが一番合理的であるということで、その案が長目塚

古墳の前方部を切り取って川を真っすぐにしようという河川改修案でした。その当時、ちょうど阿蘇神社さんが古墳の土地所有者でしたので、所有者と災害にあった当時の中通村の地元関係者との協議が始まりました。この協議の時に実は、単純に古墳を壊して工事をするのではなくて、もうちょっと違うルートはないのだろうかとか、阿蘇神社さんは所有者としてやはり古墳を大切に守って欲しいということで、この時に古墳の保存と工事をするという相反するところに地元では非常に葛藤があった訳です。それを乗り越えながら結果としては、工事で壊される前方部を発掘調査して記録して残し、もしそこから出土物が出た場合は所有者である阿蘇神社さんでその出土物を保管するという事で協議が決着しました。それで1949年の12月、正しく今もう12月ですね、12月18日から長目塚古墳で発掘調査をするための奉告祭が開催されて、翌19日から28日まで発掘調査を行われ、僅か10日間の非常に短い期間なんですけども、杉井先生や木村さんのご報告にあるように大きな成果が出てきたということです。そして年を越して翌月まで周辺の測量が行われています。翌年1950年に長目塚古墳以外の古墳だとか手野の周辺の古墳の測量が行われています。10年後、1959年に12月8日付で長目塚古墳を含む中通古墳群全体が県の史跡に指定をされています。史跡指定の後に1962年には当時の発掘調査の成果をまとめた調査報告として熊本県文化財調査報告第3集として報告書が熊本県教育委員会から発行されています。そして70年後、2019年3月に当時の発掘で出土した出土品一式が熊本県重要文化財に指定をされているという経緯になっております。

スライド6は、河川改修工事のルートを知りやすくしたもののなんですけど、新旧の写真を並べてみました。左側が今の東岳川で、右側が70年前の河道です。ご覧のとおり一目瞭然で屈曲していたものが真っすぐになっている状況です。ちょうどこの前方部分が河川改修のルートに引っ掛かって工事をするので発掘調査をしたということです。ただこれを見ますと、本当ならばもっと真っすぐした方が合理的なんですけど、やはりそこは古墳の本体である後円部を迂回するよう、もしかすると工事計画者側がある程度を配慮されたのではないかと勝手に想像しております。(後円部を)ちょっと避けて前方部分を掛けて河川改修をしているという状況です。ということでやはり先ほど申し上げたとおり、工事ともう一方で古墳の保存という葛藤の結果、こういう形になったのだろうと考えております。

スライド7は当時の発掘調査の体制になります。当時の熊本県史跡名勝天然記念物並びに国宝重要美術品調査員をされていた坂本経堯先生を調査団長として、当時熊本にいらっしゃった乙益先生や田邊先生など考古学をされている先生方を中心とし調査員が組織され、調査団の全体事務として当時の中通村が全面的にバックアップしています。調査の協力者として中通村の青年団約20名近くと、あと今は阿蘇中央高校となっています当時ありました県立阿蘇高校と阿蘇農業高校の社会科研究部員さん達が発掘調査に加わって調査をされたということです。

スライド8は非常に貴重な写真です。当時、調査に参加された中通村青年団と調査

員の写真です。ちょうど真ん中に調査団長を務められた坂本先生がいらっしゃいます。そこで、ここにどうも私に似たような人がいるかと思いますが(笑)、宮本孝利で、私の祖父になります。当時、多分22歳くらいですかね、ちょうど私の祖父も70年前にこの古墳の発掘調査に参加している訳ですね。三代に亘る遺伝といいますか、これが今日に至っているのが不思議な気がします。非常に、特に地元をあげて調査をしたということを裏付ける写真になると思います。

スライド9は河川改修前の長目塚ですね。こちらが後円部、こちらが前方部で非常に全体が見渡せる良い写真かと思います。杉井先生のご報告にもあったとおり前方部が低いタイプのもので、後円部がこう高いのに前方部が低い感じで、古墳として工事前非常に優美な形が当時あったということです。スライド10は反対の北東側から撮った写真です。こちらが河川改修前の東岳川です。当時、火山灰が非常に堆積して川床が上がっているのが分かる。当時はいわゆる堤防がありませんので越水しやすい状況だというのがこれで分かるかと思います。

スライド11は古墳の着工と調査前の奉告祭・起工式の様子です。恐らく阿蘇神社の方が派遣されて式が行われたと思います。こうやって皆さん、当時は恐らく工事の進捗と合わせて発掘調査を同時にやられるという形をとられたと思います。掘削と同時に調査を進めて行くというかなりタイトなスケジュールだったので、工事関係者と調査関係者が同時にお祭りをしている様子です。

スライド12は発掘様子の様子です。恐らくこれは東の方から前方部を見ていて、測量を行っている様子じゃないかと思います。スライド13は調査中の前方部です。これは後円部の方から前方部を見ていて、まだこういう風にきれいに前方部が残っているのが分かります。こちらは切り崩された後です。前方部の途中を川が通過して切り取られている様子が分かります。

スライド14は発掘調査を進めると古墳の表面に敷石が詰められている状況が分かりました。これはいわゆる葺石と呼ばれる古墳の表面をある種土止めで石を置く、あるいは見た目上石を張り詰めて景観を良くする機能があるかと思います。こういった葺石が古墳表面に敷き詰められていたのが分かりました。古い写真だと良く分かりませんが、右下の写真はイメージとしてお隣の大分の亀塚古墳の復元整備された様子ですが、こういったイメージのものが長目塚古墳にもあったということが発掘調査で判明しています。

スライド15は前方部の頂上で発見された石室の様子です。発掘するとこういう大きな石が2枚ありまして、これを外すとこういう竖穴の石室が見つかっております。その中に人骨の一部と木村さんのご報告にもありました様々な副葬品が発見されたということです。当時の記録を読みますとこれが赤い石室だったというふうに残されていますので、恐らく村上先生のご講演にもありましたベンガラを用いて石室が赤くなっていたと考えられます。

スライド16は古墳の測量図です。全長は111.5mありまして、ちょうど前方部

のこの部分で石室が見つかっております。それで、これが頭蓋骨の一部が残っていますので、東枕という表現がいいのでしょうか、東向きに頭が向いている状態で納められていました。河川改修で無くなったのはこちらの前方部の部分で、杉井先生のお話にあったようにこちら後円部の方は発掘調査をしておりません。恐らく主体部となる埋葬施設はこちら側にあるだろうと考えられています。

スライド 17 は工事前と工事後の様子です。こちらはまだ前方部が残っているんですけども、こちらでは完全に河川改修で切り取られています。

スライド 18 は、今年 6 月にたまたまですけども、NHK の「ブラタモリ」でこの長目塚古墳が登場しました。その時に先ほど見せた測量図を NHK さんに参考資料で送ったら復元図を作られて番組で放映されました。今回のスライドに表示したものは、番組に出たものをそのまま使えませんので、私のほうで同じような形で再現してみました。こちらが現状で、復元するとこういう風になっていて前方部が東岳川の対岸まで伸びるが分かるかと思えます。もし工事がなければ現在もこういう優美な形で前方後円墳があったらという想像図になります。

スライド 19 は私がドローンで撮った現状の中通古墳群の様子です。こちらに長目塚があってこれが東岳川です。それで、いわゆるこれが杉井先生のご報告に登場した中通古墳群を含む古墳のグループの範囲かなというところですね。ちょうどこのあたりが国造神社でこのあたりに上御倉・下御倉古墳があって、二俵筒横穴群はこのあたりの外輪山の上の方に展開します。ちょうどこのあたり一帯が一連の古墳の連綿とした系譜のある地域になるんじゃないかなと考えています。こちらは北側の外輪山上から撮った写真です。スライド 20 が長目塚でこのように東岳川が流れていて、ちょうどこの部分で切られているのが分かります。全国的に見てもこういう上空から見える古墳群というのは非常に稀ではないかと思えます。普通、古墳群というのは台地の上に人々から見えるような形で目立つ場所に造られるんですけども、こういう上から見展開している様子が窺える古墳というのはなかなか全国的に珍しいのではないかなと。バックに阿蘇山があって景観的にも素晴らしい古墳群となっています。

最後にスライド 21 の長目塚古墳発掘調査の意義です。先ず時期的に見て戦後すぐに実施されたということで、当時は恐らく終戦後すぐということで物資も少なく、まだ当時は GHQ の占領下です。まだ戦地から帰ってくる人々がぼちぼち居たという時代の中で良く発掘調査ができたな、というそういう社会状況です。その次に、何回も言いましたが、やはり古墳保存と工事、特に災害対策の工事ですのでやはり優先すべきは人命ということがあったと思えます。そこを地元と所有者である阿蘇神社さんなどそういった地元関係者の葛藤を乗り越えて実施されたものという意義づけになるかと思えます。もう一つ、これは今でこそ遺跡で工事をする場合は発掘調査をしましょうというのは当たり前になっています。文化財保護法という法律に基づいて工事前に発掘調査をするということになってはいますが、当時は、文化財保護法が施行されるのが昭和 25 年で長目塚発掘調査の翌年からなんですね。当時まだ行政が主導

して工事前に発掘調査をしましょうという、制度だったり体制がない時代です。そういった時代にも関わらず発掘調査が実施されたということです。まとめになります。文化財保護制度・体制が未確立な時代において、先人が遺した古墳に対する所有者や地域住民の思い、そしてやはり調査に当たられた先生方の執念もあったと思います。何とか古墳を守りたい、でも工事はしなければならない。それでは発掘調査をしましょう。しかしどこまでできるかという色々な制限があったかと思いますが、それでも実現されたという執念。そして工事計画側の配慮です。先ほど示しましたとおり、河川部がちょっと曲がって前方部は引っ掛けていますが、古墳本体は壊さない配慮がもしかするとなされていたかもしれません。そういうところで、文化財保護制度・体制が未確立な段階で、いろんな地域住民の思いと工事計画側の思いが入って実現された発掘調査ということです。時期的に見て恐らく熊本県内で行政が主体となって大々的な工事の前に発掘調査を実施した初の事例ではないかと思います。ですので、戦後熊本における埋蔵文化財保護の出発点として非常に意義深い発掘調査であったとまとめまして私の報告を終わります。ありがとうございました。

## NHK総合「ブラタモリ」に長目塚古墳が登場しました！

○放送日 : 2019年6月29日(土) 午後7時30分～午後8時15分

○放送回 : 「#138 阿蘇～阿蘇は世界一の“お役立ち”火山!?!～」

○放送内容: 阿蘇の火山活動が実はあなたの生活にも役立っていた？

その謎をタモリさんが解き明かす。日本一の大草原に隠された秘密！

タモリさんも毎日お世話になる「阿蘇黄土」とは？

○出演: タモリ、林田理沙、語り: 草薨剛

○案内: 宮縁育夫(熊本大学)、宮本利邦(阿蘇市教育委員会)

蔵本厚一(日本リモナイト)、山本誠也(山田中部牧野組合)





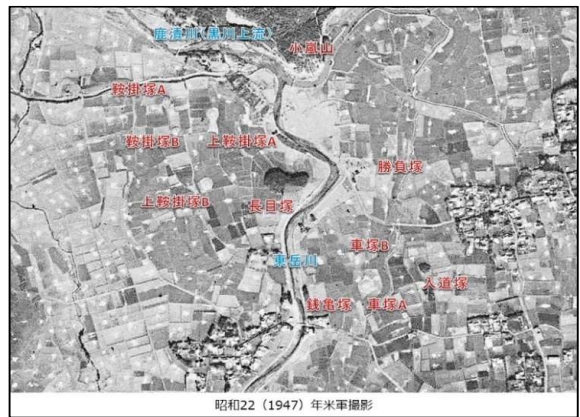
スライド1



スライド2



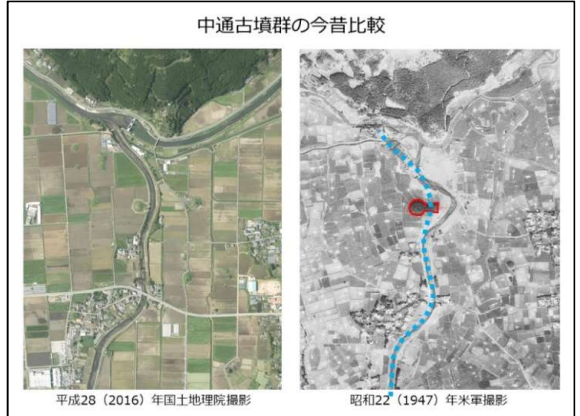
スライド3



スライド4

長目塚古墳発掘調査までの経緯	
戦時中	食糧増産を目的として内牧方面の開田を進めるため、灌漑用水整備として鹿瀬川の井堰を樋門式に改修。
1947年5月	中岳火口が激しい噴火を繰り返す。阿蘇谷全域で大量の火山灰が降る。
同年7月	阿蘇地方で豪雨。新式の樋門に火山灰が堆積して越水、河川氾濫によって広範囲の水田が水没。
1948年7月	再び豪雨。堤防決壊による水田が流出。下西河原集落は水没の危機。災害対策工事として東岳川川尻を鹿瀬川の支流に接続するよう改修。
1949年	再び豪雨。長目塚古墳東側の東岳川屈曲部分に大量の火山灰が堆積して川床が集落より高くなり天井川の状態。豪雨被害の危険性が高まったことにより東岳川の河川改修工事が計画される。
同年10月～	長目塚古墳の前方部を切り通す河川改修案について県と所有者の阿蘇神社、中通村ら地元関係者が協議。
同年12月	12月18日長目塚古墳にて発掘調査奉告祭と河川改修工事起工祭挙行。翌日19日から28日まで発掘調査。翌日まで測量など補足調査。
1950年8月	中通古墳群や手野など周辺の古墳の測量調査を実施。
1959年12月	12月8日付けで長目塚古墳を含む中通古墳群が熊本県史跡指定。
1962年3月	熊本県文化財調査報告第3集として発掘調査報告書が熊本県教育委員会から刊行される。
2019年3月	長目塚古墳出土品が熊本県重要文化財(考古資料)に指定される。

スライド5



スライド6

発掘調査の体制	
【長目塚古墳発掘調査団】	
文部省派遣	文部技官 齊藤 忠
調査責任者	熊本県史跡名勝天然記念物並びに国宝重要美術品調査員 坂本 経堯
調査員	熊本女子大学助教授 乙益 重隆
	熊本県立玉名高校教諭 田邊 哲夫
	熊本県立荒尾高校教諭 土山 公也
	肥後考古学会員 東 光彦
調査団庶務	中通村役場史員 書記 春野 時雄
	調査参加 中通村青年団 団長 園田 松美
	他幹部18名
	熊本県立阿蘇高校社会科研究部員
	熊本県立阿蘇農業高校社会科研究部員
調査団本部宿舎	下西河原区長 高宮 彌 宅
調査員宿舎	上西河原 栗明 直 宅

スライド7



スライド8



スライド9



スライド10



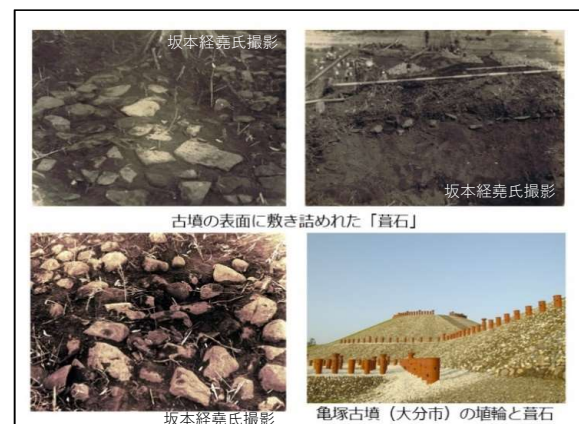
スライド11



スライド12



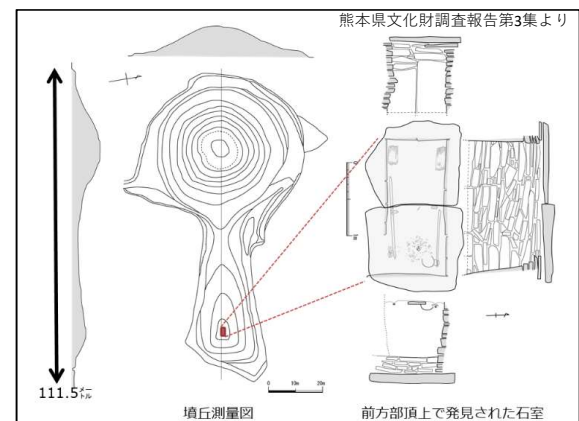
スライド13 ※写真は全て坂本経堯氏撮影



スライド14



スライド15 ※写真は全て坂本経堯氏撮影



スライド16



工事前と工事後の遠景

スライド17 ※写真は全て坂本経義氏撮影



宮本作成

前方面復元写真

現況写真

スライド18



宮本撮影

スライド19



宮本撮影

スライド20

### 長目塚古墳発掘調査の意義

- 戦後すぐの時期に実施された
- 相反する古墳保存と工事という葛藤を乗り越えて実施された発掘調査
- 記録保存を目的とした行政主導の調査
- 文化財保護制度・体制が未確立な時代において、先人が遺した古墳に対する所有者と地域住民の畏敬の念、調査員の執念、工事計画側の配慮が複合して実現された戦後熊本における文化財保護の出発点

スライド21

## 報告 4：幕末人がみた古墳からの出土刀

宗教法人阿蘇神社 権禰宜 池浦 秀隆

改めまして、皆様こんにちは。阿蘇神社の池浦と申します。よろしくお願ひいたします。私の報告は直接的に中通古墳群を学術的に価値づける内容ではないのですが、一般的に文化財と呼ばれているものがどのように伝来をするのかを、皆様方に少しお考え頂けるようなお話をしたいと思っていますところでは。

まずは、神社にある文化財というものは、神社所蔵の「宝物（ほうもつ）」という言い方をします。宝物というものは言葉の意味から

して、神社に祀られている祭神に奉納されているもので、それはまぎれもなく神様の物ということになります。それを神社の人間が納戸役（なんどやく）のようなことをしながら、何世代にも亘って伝えられてきました。厳密にいうとそれは神様の物でありますから、（神社としては）それを公開するとか、人々の目に留まるような機会を設けなくても別にいい訳です。宝物とは、いわゆる秘匿性だとか守秘性の価値観を伴っているものです。

ところが中通古墳群の出土品に関しましては、全くそういう価値感はなく、元々、古墳は神社の所有地であったのですが、それが発掘当時の文化財行政の方、発掘調査に携わった地域の方々と、その時の神社の私たちの先輩が、色々先ほどの宮本さんのお話にもありましたとおり葛藤もあったでしょうし、悩ましい判断もあった上で、神社に伝えられたという経緯があります。

さらにその後、阿蘇神社に出土品が納められたのですが、適切な管理をしていたとは言えない時期が暫くありました。当然、保存環境であるとか、神社の人間がそれに対する深い知識を有している訳ではありませんでした。私が神社に赴任した時には、お世辞にも良い状態であったとは言えないものがありました。

17、8年くらい前に、当時の県文化課に野田拓二さんという方がいらっしゃって、もうお亡くなりになられているのですが、阿蘇市の緒方さんにご相談して野田拓次さんに話を繋げて頂いて、野田さんがどうぞ持って来て下さいということで、当時、熊本市の渡鹿に県の文化財収蔵庫があったのですが、そこに出土品を全部持っていきまして、野田さんのご厚意で保存処理をして頂きました。それがあから今、神社の方に健全な形で出土品が伝わっていると思っています。当時のことを思い出すと感謝の念でいっぱいです。その後、熊本大学考古学研究室の杉井先生の詳細な悉皆調査がありまして、さらに熊本県の文化財指定に繋がる形になったことに、非常に感慨深いも



のがあります。

私が申し上げたいのは、こうした文化財というものが、所有者が自分の物だから大切にすることはあるのですが、それ自体にどのような価値があって、それを学術的に評価をする機会があったり、皆さんに広く知って頂くことも、文化財を伝えていく上で大切だと思っているところです。

私の話は少し変わりますが、平井古墳というところが東手野の方にありまして、お配りしている資料1の地図を見て位置を確認して頂きたいのですが、この古墳から出土したものが、その後、阿蘇神社に奉納されております。全部ではないのですが、元々の土地の所有者が持っている物と分割して神社の方に奉納されている経緯があります。参考文献として、戦後に坂本経堯さん等の文化財調査報告書にもそのことについて触れている部分があります。戦後すぐの平井古墳には、まだ古墳の残骸みたいなものが残っているようなことが書かれています。その後、残念ながら水害がこの地区にあたりしたことも影響があると思いますが、今では所在が分かりにくくなっているようです。

それで、この古墳の経緯ですが、資料1の【出土品の伝来】を見て頂きたいのですが、先ず、この古墳が当時の坂梨手永の手野村庄屋の山部家屋敷内で弘化元年(1844年)3月27日に発見されます。当時の事を書いた史料がございまして、史料1をご覧ください。こちらは発見から22年程が経過した時の記録なのですが、これは阿蘇谷の地誌で「蘇溪温故」という史料がございまして、これは『神道体系』というPHPが編纂した神社関係の大きな史料集がありまして、その中の「阿蘇・英彦山」という巻の中に収められているものです。

少々読んでみますと、庄屋の山部武三右衛門という人がこれ(出土品)を持っていて、山部家は代々手野村の里長、これは庄屋ですが、武三右衛門の父の山部市助は年取って隠居して、小高き山を開発して、多分、庵を建てようとした時に、図らずも岩穴が三つに開いたようです。その穴の中から武器類、あるいは曲玉・瓶など色んな古器が出てきた。そして骨も出てきた。その中で特に注目している物がありまして、剣が二振り出ているのですが、それを後々に、三井閑水という人がその時の様子を詳細に書いた記事が【史料3】です。これはまた後でご紹介しますが、当時の様子を史料の中に割と詳しく書いてございます。この「蘇溪温故」の後半部分にはその時に出土してきた物には何があるか書かれていますから、それを確認してみたいと思います。

まず「剣が二振 長短あり」とありますが、これは資料2の【写真1】を見て頂けますか。今、阿蘇神社で考古資料として扱っている宝物があって、上二つが長目塚古墳の太刀二振、上から三段目と四段目がこの平井古墳の出土刀になります。一番下が、先ほど杉井先生のお話の中にありました迎平古墳の出土刀で、これは厳密にいうと国造神社の所蔵になりますが、阿蘇神社の方で預かっていまして、この五振を一つの箱の中に納めて今管理をしております。平井古墳の刀は長い方が83cm、短い方が57cmあります。元々、この刀が奉納された時に納められていた木箱が下の写真で、奉納

の経緯等がこの箱にも墨書として記されています。また下の写真は刀の茎（なかご）を拡大したものになります。

資料 2 の【図 1】は古墳を開いた時にどういう状況だったかを図示したもので、この図を元々描いたのは、熊本藩の著名な国学者で木原楯臣という人が調査をして図示したものを、大分県の後藤碩田という豪商の家に生まれた国学の系統を引く人が木原楯臣のこの図を写し、それをさらに後藤の図を明治初期に阿蘇神社の神職だった宮川千尋という人が写したものになります。古墳は円墳で真ん中に太刀が 2 本描かれ、亡骸の状態、その他の出土品がどういう位置だったのか描いてある図が、写しの写し、ですけれども残っております。

それで、先ほどの「蘇溪温故」の記事にその出土品の一覧がありますが、先ず剣が二振、長短あり。共に反りがなくて真っすぐの直刀である。短い方は片刃。片刃というのは刀剣のお好きな方はすぐ分かると思いますが、刀剣の多くは左右対称になりますが、裏表で片方しか刃が入っていないものになります。何れも名作なるべしとあります。

他にも短刀が 2 点、それから轡が 3 点で、これは資料 2 の【写真 2】をご覧ください。こちらは馬具です。そしてその他、○が付いているものは江戸時代の「蘇溪温故」が書かれている時には既に無いことになっているのですが、その後ですね、土焼きの徳利みたいなものがあるとか、土焼きの壺が 2 点、これが恐らく資料 2 の【写真 3】にあたる提瓶と呼ばれる焼き物で須恵器です。それから土焼きの腰高の菓子台というものが 1 点、これが資料 2 の【写真 4】になります。こういうものが刀二振と一緒に阿蘇神社の方で今所蔵しております。

さて、それでこの出土品がその後どのような取り扱いを受けたのか、という関連記事を見ていきます。先ず発掘されたのが天保 14 年（1844）で、その後、弘化 3 年（1846）の 6 月 24 日に南阿蘇郡代の中村庄右衛門という人が、この人は結構有名な人で自分の在職中に日記をたくさん残している人なのですが、一部にその編纂委員会ができて、今、『中村恕斎日録』が 2 冊刊行されています。その中に、国造神社のお祭りに参列した時の記事が出て参りまして、それが史料 2 になります。中村庄右衛門は国造神社に参列する時に、どうも庄屋の山部家に泊っていたようで、そこで山部家が持っている平井古墳の出土品を拝観している記事が出てきます。

史料 2 の線を引っ張っているところを見て頂きたいのですが、古剣は反りもなくこれは直刀です。唐剣、多分、中国の刀を半分に割ったような形でという表現をしています。あとは瓶、多分、さっきの提瓶のことだと思うのですが、形も「異形なり」とか、轡もこれあり、ということが書いてあります。そして、右古剣は相役、郡代は 2 人居ますからもう 1 人別人（別の郡代）が居るのですが、その（相役の郡代）が熊本へ持ち出して研がせたという記事が出て参ります。その後「地合甚宜敷焼刃も見事也、目利杯甚珍敷賞し候事なり」と書いているとおり、この刀を古墳の遺物というよりも、実際に研がせたことは何の目的で研がせたかということ、多分ですね、刀剣を好

きな人は分かると思うのですが、錆刀を見るときに「窓開け」と言ってちょっとだけ研いで中の鉄肌や刃の部分を見ることをするんですね。多分、そういうことをやっているのだと思われます。そしてその焼き刃が見事だとか、そんなことを書いている訳です。

それで実際に今、阿蘇神社にある刀をよくよく見ますと、写真に載っている方では分からないのですが、裏側を見ると研いだ痕が確かにあります。全面的に研いでいる訳ではなくて、多分、2・3寸くらいの幅で研いだ痕が見受けられます。もしかしたらこの時に研いだ痕跡かもしれせん。

その後、この刀がどうも阿蘇神社もしくは大宮司家の阿蘇家の方に奉納されたと思われる文書が残っておりまして、それが史料3になります。三井閑水という人がこれを書いているのですが、三井閑水が何者かは結局分からなかったのですが、恐らくこの山部家にも関係する人だと思いますが、私はこの人は明らかに国学者だと思っております。

その史料3を少し紹介しますと、最初に発掘の経緯、それから出土品の概要が書いてあります。先ほど蘇溪温故と同じように弘化元年(1844)の3月27日に庄屋の山部市助の屋敷内で加藤清正を祀る祠を作ろうとしたらしく、そのところを掘っていたら凶らずも古墳に掛かったと。それで「土骨の内より太刀二振、短刀五本、曲玉桃核水晶器品々、陶器の品々、鏃七本、轡一口・・・」など、たくさんこういうものが出てきたことが書いてあります。骨については元のごとく埋め戻して、出土品その他は取り上げた。

そして次の2番にその太刀二振の所見について触れてあります。「鉄器は皆朽そんじたれ共、太刀は鉄性丈夫に見へしかは、」と書いてありまして「如何あらむとて」研ぎを試みたり、そのことがもしかすると先ほどの中村庄右衛門の日記に出てきた研ぎのことかもしれません。見ると「鉄性精金美玉を見るごとく」と表現され、太刀二振の造りについても触れてありまして、長い方の太刀は「平造の太刀ハ鍛数少く見へて、底青く上に火氣を受てしらみ、板目肌有て、尚其上白髪糸を引ちらしたるゝ如き筋はだ有て、焼刃ハ匂斗残れり、京物の上作を見るごとし」という表現をしております。

そしてもう一つの片切刃は、こちらの太刀も「地鉄青くつまりて、所々正目肌有、刃はゞ壱歩斗の直刃にて匂ふかく、大和物の身肌を見る如し」という表現で、いかにもこれは現代と同じように、明らかに刀として鑑賞している見方になります。さらに次が3番です。今でいう岡山県の津山藩の刀工がたまたま来ていて、その刀工にも刀を見てもらったことがいろいろと書いてあります。

そして次の4番です。この出土刀をどうするのか、貴重な刀の散失を恐れて阿蘇家の神庫に納め置く判断をしたことがここに書いてあります。もしかしたら、ここに書かれていることが理由で、刀が後々、阿蘇神社に伝わったのではないかと考えられる根拠の一文になります。

次の5番に、平井古墳の主は誰なのか三井景行（閑水）は触れています。「景行謹而按するに 皇御国ハ諸事万国に秀たれとも人質の仁厚勇武、鉄性の純粹精鋭に至てハ、海内無双といふ事ハ、外国人の称誉する所にして」と、自分の国を称賛して出土刀の素晴らしさと刀を重ねてこのような表現をしています。それは「一己の自讃にあらず、此古墳文字の徴なれば、何人たるを するによしなしといへ共、曲玉等の品あれば高貴の古墓たる事疑なし」と、自分だけが勝手に称賛しているのではなく、その刀には古代の文字は何も書いてないけれども、曲玉などが一緒に出てきているのであれば、それは高貴な人のお墓であって疑いないことだとしています。

さらにここは神社の由来に関わってくることなのですが、手野村には国造神社がありまして、そこには阿蘇神社の祭神である健甕龍命の御子神である速瓶玉命が祀られていますから、「手野村ハ 速瓶玉命岩隠れの地と称すれば、恐らくはこれならむか」と、平井古墳がそれにあたるのではないかと書いています。その後、今度は健甕龍命の位置づけが書いてありまして、命は神武天皇に命じられて九州にやって来て、阿蘇を開拓した功績で阿蘇神社に祀られていて、天皇からも九州の地の有力な豪族として認められ中央の皇族の藩屏としての位置づけにあることを書きます。これが国造（くにのみやつこ）の始まりだと記しています。

最後の6番のところですが、ここが一番面白いところになります。ご承知のとおり、幕末は異国船がたくさん現れて、外国とどう向き合うかというところで、ついに幕府が滅びてしまって、新しい近代国家に生まれ変わるきっかけとなって行きます。そうした状況とこの刀剣が出土したことを、かなり重ね合わせて三井は表現しています。この古墳から刀が出てきたことを、例えば「劔造良美の御国にしあれば」と、日本という国は昔から素晴らしい刀剣を作っている先進性のある国であるとし、古墳の出土刀は出雲神話の中で素戔鳴尊が八岐大蛇を退治した時に使った十握叢雲劔という宝劔に匹敵するようなもので、出土刀は健甕龍命もしくは速瓶玉命に対して日本の国を外敵からの防禦するために分け与えられたものではないかと記しています。

さらに最後には、この古墳は加藤清正を祀る祠を造ることきっかけに発見されていることから、そもそも加藤清正は朝鮮出兵の際に武勇を轟かせた人であって、そうした清正を祀るときに出てきたということに意味があるものとし、刀には、昔から我々の祖先が日本の国を護る意味の精神性と素晴らしい刀剣技術を持っており、そうしたことから外夷も恐れることはないとして、刀の出土と結び付けてこの三井閑水は表現している訳です。

私は、この古墳の刀が出土したことを幕末人がどう見たのか、この事例は大きな示唆を与えてくれると思っています。残念ながら平井古墳は今では後の開発や災害で所在が分からなくなっていますが、当時発掘された時の関係史料を見ると、幕末人である郡代の中村庄右衛門に所有者が色々と出土品を見せているように、昔も古墳の出土品に関心を持つ人がそれなりにいたのではないかと思う訳です。

ただ、そうした中で注目したいのは、所有者が最終的に出土品を神社もしくは阿蘇



家に奉納した理由であります。この当時は幕末の攘夷論が流行した世相の中で、出土刀も単なる遺物ということではなくて、あくまでも刀剣として捉えられていて、その精神性や出土の意味を強く重んじた上で奉納したということが分かることです。また古墳本体も速瓶玉命の神陵ではないかということさえ解釈することになる訳です。

そして出土品は最終的に神社の宝物になることで宗教性を帯びて、その後も伝えられてきた訳です。最終的に古墳の遺物が神社の宝物になったということは、そこに宗教性が伴うということになりますけれども、そもそも文化財というものを保護とか伝来させるという意味において宗教性を帯びたことがどういう意味があるのか、よくよく考えたほうが良いと思っています。例えば古墳本体のことを考えると、今回は中通古墳群の長目塚古墳が開発で壊された経緯について報告がありました。古墳自体が神社の社有地もしくは宮内庁が管理する陵墓の場合の古墳と、そういうものと全く無関係の古墳だった場合にどういう違いがあるのか気になるところであります。

そこが神社の社有地という宗教性を帯びた場合には、少なくとも何かしらそこに人々が開発を止める聖域観念のようなものを意識すると思います。それが作用すると、周囲の何らかの日常的な関わりであるとか、そこでお祭りを行っているかどうかは別にしても、少なくともその古墳が将来保全されていくとか、守られていく一つの要素になっていくと思っています。

この平井古墳の出土刀を取り上げた時の解釈の仕方、あるいは出土した古墳をどう捉えるか、文化財の将来性を考える意味でも、平井古墳の事例はいろいろ示唆を与えてくれる良いテーマだと思っています。良ければこの後のパネルディスカッションでもう少しこの辺りを掘り下げてお話しできればと思います。

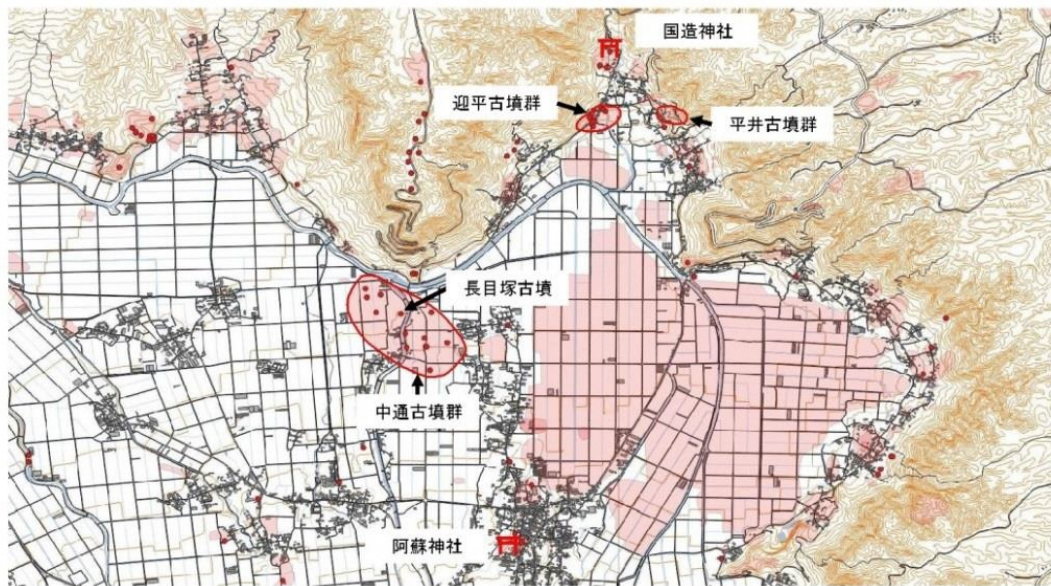
それでは私の報告は以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

幕末人がみた古墳からの出土刀

池浦 秀隆

1, 平井古墳群（阿蘇市一の宮町手野、現在は所在不明）

- ・幕末に岩穴3つ（円墳1、横穴2）が発見される。太刀2振や馬具、曲玉、古骨等が出土、現在は出土品の一部が阿蘇神社に伝来する。



※この図は、国土地理院基盤地図情報为背景地図として使用し、熊本県遺跡地区を合成して作成した。

作図：阿蘇市教委（学芸員）宮本利邦氏

2, 出土品の伝来

- ・弘化元年（1844）3月27日 坂梨手永手野村庄屋山部市助の屋敷内で発見（その後、国学者木原楯臣が調査か ※一次史料は現存せず）
- ・嘉永3年（1850）6月24日、阿蘇南郷郡代中村庄右衛門が北宮（現国造神社）御田植神事出役の帰路に拝観【史料2】
- ・安政5年（1858）7月 阿蘇宮（阿蘇家）に太刀2振ほか出土品の一部を奉納【史料3】
- ・地誌「蘇溪温故」（慶応2年）山部家蔵出土品の記事【史料1】
- ・明治13年（1880）4月 木原楯臣の見取図を後藤碩田が写す  
9月 阿蘇神社神職宮川千尋が後藤図を写す【図1】

〈参考文献〉

- ・坂本経堯「阿蘇谷平井古墳について—木原楯臣の一業績—」（『上代文化』20号、國学院大學考古學會、昭和26年）
- ・『熊本県文化財調査報告 第三集』昭和37年

【史料1】阿蘇谷の地誌「蘇溪温故」慶応2年（1866）

（神道大系 阿蘇・英彦山）昭和62年所収）

庄屋山部武三右衛門蔵ス、山部家ハ代々手野村ノ里長ニシテ其家系古シ、武三右衛門父山部市助年老ヒ、致仕シテ古城ト云小タカキ山ヲヒラキ居ヲ構ントスルニ、ハカラズモ岩穴三ツニヒラキアタレリ、此穴中ヨリ武器類、或ハ曲玉・瓶ナド種々ノ古器ヲ得タリ、骸骨モアリシカドモ朽テタシカナラズ、サレド足トヲボシキ骨、今ノ人ノ足ヨリモ三寸モ長カリシト云、誰トソノ姓名ハシレザレトモ、曲玉、又ハ劍形ノ異ナルヲ以テハカリ見ルニ、官位高貴ノ人ノ墳墓ナル事ハ明カ也ト云ベシ、三井閑水翁ノカ、レタル記事※

【史料3】山部家ニアルヲ見テ、マスマス常ナラヌ品々ト思フナリ、好古ノ人ハ必ス一見スベシ、此古器ヲ得タルハ弘化元年辰三月二十七日也ト云、今年慶応二寅迄二十二年ニナル、

劍二振 長短アリ※【写真1】、二フリ、共ニソリナクシテマダスグ也、短キ方ハ片刃

ニシテ、何レモ名作ナルベシ、

短刀二 轡三※【写真2】

鍔數十 ○水晶六 角玉四

○曲玉九 ○青クタ玉八

「鐵カ」ケツニ 「ツチャキ」瓶德利三

「ツチャキ」壺二※【写真3】「ツチャキ」腰高菓子台一※【写真4】

○桃実三

合十二品 ○コノシルシ今ナシ

【史料2】熊本藩士の日記『肥後 中村恕齋日録 第二卷』平成21年）

嘉永三年（1850）6月24日、阿蘇南郷郡代中村庄右衛門が北宮（現国造神社）

御田植神事出役の帰路

一、今夕山部武三右衛門（宿所也）宅近所より先年堀出候古劍、並曲玉瓶器等又ハ執槍も有之見物いたし候事、此執槍ハ極上代の物ニ而、千年以上の物杯と噂承り、古劍ハそりも無之、唐劍半分ニ割候様なる形に而、瓶器等も尤異形なり、くつわも有之、尤異躰ニ相見候、右古劍ハ相役（横井左平太）熊本へ持出し研せ候処、地合甚宜敷焼刃も見事也、目利杯甚珍敷賞し候事なり、

【史料3】三井閑水の記録（平井古墳発掘の由来）阿蘇神社文書466号

※見出しは報告者による

（1、発掘の経緯・出土品の概要）

弘化元年甲辰三月二十七日、坂梨手野村庄屋山部市助の元屋鋪内に、清正主をいつきまつらむと此の所をひらきほりしに、不図一古墳有、土骨の内より太刀二振、短刀五本、曲玉桃核水晶器品々、陶器の品々、鍔七本、轡一口、鐔式枚、鉄器式ツ、銀環老ツ、銅輪老ツあり、古骨ハ元のことく埋治て、器物ハ悉取あけ置たり、

（2、出土刀の所見、部分研磨する）

鉄器は皆朽そんじたれ共、太刀は鉄性丈夫に見へしかは、如何あらむとて研見るに、鉄性精美玉を見るごとく、平造の太刀ハ鍛数少く見へて、底青く上に火氣を受けてしらみ、板目肌有て、尚其上白髪糸を引ちらしたる、如き筋はだ有て、焼刃ハ匂斗残れり、京物の上作を見るごとし、片刃作の太刀は地鉄青くつまりて、所々正目肌有、刃はゞ老歩斗の直刃にて匂ふかく、大和物の身肌を見る如し、

（3、津山藩刀工の所見）

折節作州津山之劍工多田四郎左衛門正利と云人、来り居りしに見せしに、正利云、平造之太刀ハ鍛数三篇はかりの物なるべし、しら肌の見ゆるハづ、鉄氣の残れるなり、片刃造之太刀ハ重く古の鑄刀なるべし、鍛数多くバ所々に正目肌有べからず、正目の見ゆるハ鑄刀の印なりと云り、古は劍工鉄沙を吹て刀劍を造る故、鉄の位十分なれば其儘打演て作るを鑄刀と名付しなり、正利掃郷之後研直せしニ、最前の地肌と模様打変り、二筋の移り有て正目の延肌にて鍛し物とは見へず、正利は劍造の上手のミならず、目察もまた達したれば、其説感るに余りあり、

（4、出土刀を阿蘇家の神庫に奉納）

誠に希代の珍器なれば散失の患を恐れ、好古之人々経元をすゝめて、此度 阿蘇家の神庫に納置ぬ、器物は外々に打ちりし品有て全からざれ共、残りし品まで納置ぬ、或ハ此器物明器ならんといふ人あれども、此古劍ハ出来之趣も不明にして、地刃の模様を見るにすくれたる上作なれば、明器といふ説ハ不可用歟

（5、古墳の主は誰か）

景行謹而按するに 皇御国ハ諸事万国に秀たれとも人實の仁厚勇武、鉄性の純粹精銳に至てハ、海内無双といふ事ハ、外国人の称譽する所にして、一己の 自謙にあらず、此古墳文字の微なれば、何人たるを するによしなしといへ共、曲玉等の品あれば高貴の古墓たる事疑なし、手野村ハ、速瓶玉命岩隠れの地と称すれバ、恐らくはこれならむが、往昔 神武帝の七十六年、 健甕龍命を阿蘇国に封し給ひしハ、筑紫ハ韓国漢国

に隣する所なれハ、親き公族をして藩屏となし給ひしなるべし、これや国造の始なりけむ、

（6、幕末の世情と出土刀発見の意義）

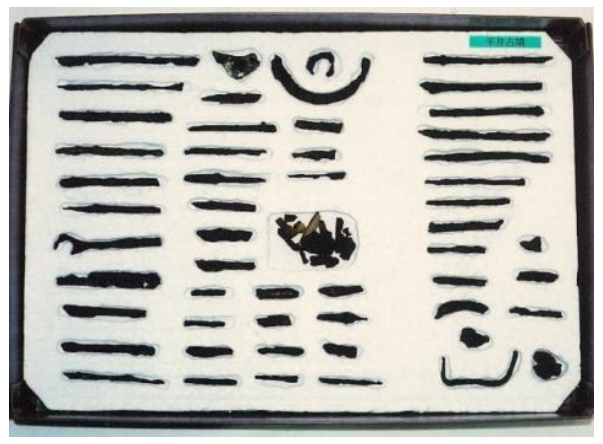
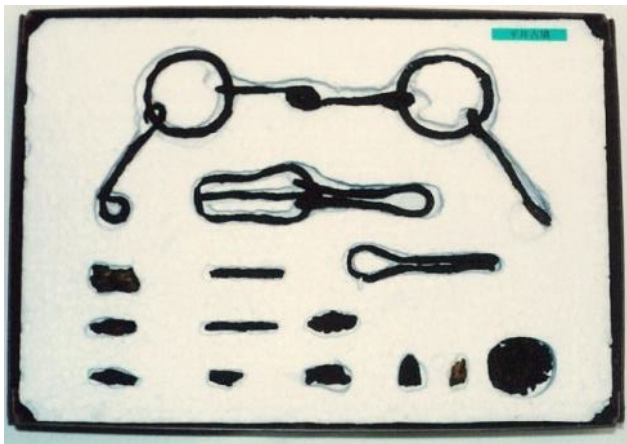
此二刀其形今世に行はるゝ刀劔の姿にあらず、また外国の劔杯いふものにもあらず、皇御国ハ神代の始より細支千足の国とも名付給ひし、劔造良美の御国にしあれバ、神代の良工の造りし十握叢雲杯いふ宝劔にひとしく、伝へ持給ひしを命に分ち授けて、外夷防禦の守となし給ひしものなるべし、今を去る事二千有余年を経て、鉄性不変事無類といふべし、また昔より外国に武勇を示せしことは度々なれ共、つゝに外国の侮辱を請し事はなかりしに、近年に至り、やゝもすれハ外夷來襲せんかとして、諸人畏懼るゝ事、婦女子の雷をおそるゝにひとしきハいかばかり、皇祖神の御心にうしとおほさむ、されハ、清正主は韓国に勇威を顕し給ひて、外夷の称誉にもあづかり給ひし人なれば、其堂を建んとて地を鑿てかゝる珍器のあらはれ出て、凡下の人手に取、目にも見て、何の咎もなきハいかによや、これ全く皇祖神の御心にて、此鉄性のごとく清く潔く、大和魂をみかきたてゝ、外夷共を露恐れざれとの事ならむかも

安政五年戊午七月吉日 七十翁

三井閑水景行誌（花押）



図1 【宮川千尋の図】



「轡三」か【写真2】



「ツチャキ 腰高菓子台一」か【写真4】



「ツチャキ 壺二」か【写真3】

【写真1】「劍二振 長短アリ」



茎（拡大）



写真はすべて阿蘇神社蔵



# パネルディスカッション

## 「中通古墳群を考える」

コーディネーター 田中裕介

パネラー 杉井 健、木村 龍生、宮本 利邦、池浦 秀隆



## パネルディスカッション「中通古墳群を考える」

コーディネーター：田中 裕介（別府大学教授）

パネラー：杉井 健、木村 龍生、宮本 利邦、池浦 秀隆

**司会**：それでは皆様、お待たせ致しました。パネルディスカッション「中通古墳群を考える」を始めさせていただきます。これからの進行は、別府大学の田中先生に務めて頂きます。田中先生、よろしくお願い致します。

**田中**：皆さん、席に戻られたでしょうか。今日ご講演と報告をして頂きましたパネリストの皆様、ありがとうございます。今から一時間ばかり、私が司会進行を務めさせていただきます。パネルディスカッションの進め方として、最初に長目塚古墳がどんなものであったかが一つ目の問題です。次に長目塚古墳が、阿蘇神社との関係や戦後まもなくの発掘調査などの経過を含めて、どういう経緯で今日まで守られてきたかという二つ目の問題、最後に長目塚古墳を含む中通古墳群がどうしてこの時代に、この場所に造られたのかという問題を柱に話を進めて行きたいと思えます。講演と報告に対する質問につきましては、問題に沿って討論の中で答えるようにしたいと思います。



**2-1.長目塚古墳とは-特徴-**

**墳形**：前方後円墳（後円部3段？・前方部2段？）  
墳形に沿った形状の幅の狭い周溝および外堤の存在を推定

**墳長**：現存111.5m、後円部径59.5m、高さ9.2m、前方部長52m、高さ4m

**外表施設**：葺石、円筒埴輪・壺形埴輪

**埋葬施設**：前方部石室（石棺系石室、長さ1.85m、幅0.85m、高さ0.95m）

**石室被葬者**：出土人歯から推定年齢35歳くらいの女性と鑑定

**石室出土遺物**：銅鏡、鉄刀、鉄鏃、刀子、玉類、鉄斧（\*天井石上）

**前方部出土遺物**：須恵器・土師器

**墳丘出土遺物**：円筒埴輪、壺形埴輪

**時期**：中期中葉のうちでも早い段階  
（5世紀前葉、集成編年6期後半～7期初頭）

※時期判定の根拠となる資料  
壺形埴輪：集成編年6期～7期前半  
（TK73～TK216型式段階）  
須恵器：TK216型式段階  
土師器：TK216～TK208型式段階前後  
鉄鏃：TK216型式段階

杉井報告スライド7

先ずは、第1の話題となる長目塚古墳そのものの基礎的な事実を私から簡単にまとめますと、全長が110mを超す前方後円墳であること。そして古墳時代中期の中頃の古墳であると先生方から説明されましたが、そのことで「古墳の絶対年代は測定できないのでしょうか」という質問が来ています。いかがでしょうか。

**杉井**：絶対年代というのは西暦何年かということだと思います。皆さん良く

ご存じの方法としては、<sup>14</sup>C（放射性炭素）年代測定法というのがありますが、古墳時代の遺物についてはあまりなされていないというのが現実です。というのは、<sup>14</sup>C年代測定法で測るには古墳時代はなかなか難しい時期でもあるので、あまり行われていないのです。ただ、古墳時代の出土遺物については、日本で出土した遺物であっても、中国など暦を使っていた地域からもたらされたものがありますから、そういう遺物と中国の暦との並行関係といえますか、関連を調べて実際の年代を推定することはあります。ただ、長目塚古墳に関してはそれはなされていないということです。

**田中**：絶対年代を測れるような資料がないということでしょうか。

**杉井**：しょうと思えば鉄鏝の矢柄とか、そうした有機物で年代測定を試みてもいいのかなと思います。

**田中**：それと、墳丘の形は前方後円墳で、葺石がふかれていると宮本さんのご報告の中でありましたが、「調査時に周溝はなかったのでしょうか」という質問が来ています。

**杉井**：『熊本県文化財調査報告第3集』の中に、幅の狭い周溝と外堤があると書かれていますので、当時そういう痕跡がみられたのかもしれませんが。ただ、墳丘周辺の水田部のところまで発掘調査がなされていないので、実際にどの程度のものがあつたのかは確認されていないという状況です。

**田中**：宮本さんは何かありますか。例えば前方部を断ち切った時などの記録の中に。

**宮本**：やはり杉井先生のおっしゃったとおり、当時の報告書を読む限りだと、記述としてそういうものがあつたということが書かれているだけで、具体的にその周辺でいわゆる周溝、痕跡としてどのくらいのものがあるというのは、当時の資料を振り返っても分からないという状況です。

**田中**：長目塚古墳の墳長 110m という大きさは、熊本県の中では、同時期最大ということでしたが、熊本県全体としては何番目の大きさでしょうか。

**木村**：熊本県内で 100m 超える前方後円墳が 6 基存在します。県内で一番大きいのは氷川町、旧竜北町にあります大野窟古墳が 120m 弱で最大の前方後円墳と言われています。その次が長目塚古墳で、2 番目か 3 番目に大きい古墳で、県内ではトップ 3 に入るくらい古墳だったと思います。

**田中**：熊本県ではトップ 3 に入っている。同じ時代の中期に時間を限定すると一番大きいということになりますか。

**木村**：古墳時代中期になりますと、長目塚にちょっと遅れる位の時期になりますが、山鹿市の旧鹿央町に岩原双子塚古墳というのがあります。これが 100m ちょっとの前方後円墳で、同じくらいの規模になると思います。

**田中**：110m くらいの大きさというのは実際掘ったら 120m 近くに大きくなる可能性もあると思います。大分県側も亀塚古墳など大体 120m が中期の一番大きな古墳の標準的な大きさということなのですね。そういう規模の古墳が阿蘇盆地にあることを確認しておきたいと思います。そのうえでもう一つ確認したいことは、前方部にあつた石室のことですね。この石室は古墳の一番中心部にある埋葬主体部ではないということ。前方部にもあれだけの副葬品を持った副主体部があるということ。後円部の中心主体部にはさらに大規模な埋葬があるはずということを確認しておきたいと思います。

**田中**：次の質問に進んで行きたいのですが、長目塚古墳が調査された経緯ですが、「長目塚古墳はいつから古墳であると認識されていたのでしょうか。そのあたりの調査以前の記録はありますか」という質問が来ています。

**宮本**：昭和の以前にも大正年間に、実は古墳の大半が神社の所有という話をしたのですけども、大正年間に境内地編入ということで神社の所有になって、近代に入って神社としても古墳というのがある種、神話にもあります健甞龍命であるとか速瓶玉命であるとか、いわゆる国造の系譜にあたる豪族の墓という認識が多分そのあたりではもう既にあって、そういった形で、いわゆる奥津城として編入したという認識があったろうと思います。大正あたりでは学会で中村徳五郎先生が阿蘇の古墳について発表されていますので、近代に入ってから阿蘇に古墳ありという形で認識されていたのではないかと書かれています。

**田中**：ちょうどその頃でしょうか。中通古墳群が明治・大正の頃に阿蘇神社の所有地になったという話がありましたけども、古墳や前方後円墳であると知られた頃に所有者から阿蘇神社に寄付されたということでしょうか、それとも以前から阿蘇神社の所有だったのでしょうか。質問の中にも「中通古墳群は、旧中通村の所有者が明治・大正の頃に阿蘇神社に寄付したという記録を見たことがある」とあるのですが、分かる範囲で教えてください。

**池浦**：明確な土地の所有者として登記されたのは、大正になってから神社の境内地に編入されているのですが、その経緯は寄贈とか購入とかどちらもあるかなと思いますが、そのあたりを詳しく調べたことがないのですけれども、近代的な土地制度以前の江戸時代で、古墳で何かしていることは見たことがないです。



ただ、その代わり神陵であるという、先ほどの幕末に古墳が出てきたという解釈、そういう認識は恐らくあったと思っているのですが、それが明確に神社の所有地ということで祭りをやった記述は見たことがありません。

**田中**：土地そのものが登記は大正4年ですけども、それ以前から神社のものだったかもしれないし、そのあたりの経緯ははっきりした記録はないということですか。

**池浦**：どちらかという古墳というものを神社としてどう接するか、ほかの事例を見ないと分からないのですけれども、あまりないのではと思います。つまり仏教の影響もあると思いますが、墓というものと葬礼というものへの神社の関りをみると、近世末期までは殆どないですね。葬儀をやるようになったのは殆ど近代以降なので、そこから関わるようになってきますから、墓というものについてどういう関わり方をしているか、史料では見ることはできないものだと思います。

**田中**：そのあたりの事情は中通古墳群が守られてきた経緯、あるいは戦後に法律的なものがない時点で長目塚古墳を掘削しようという話が出た時に、阿蘇神社の意向によって発掘調査が行われた。地元の方々がここを守ってきた経緯の重要なところですが、神様が守っているという、神様のものであるという一種の神聖さを与えることで守っていくというような伝統が阿蘇地方にあったということでしょうか。

**池浦**：それは阿蘇に限らず、一般的にそこはいじってはいけないという領域が古墳に限らず色々なところにあると思います。そこに立ち入ることで、そこに触れる、切込みを入れるということを憚られる観念が当然あって、それは宗教といえば宗教なのですが、例えば神社の境内地を開発しますか、というしませんよね。それは誰でも分かっていることで、開発の理由が出てきた時に、では神社を壊して開発しましょう、ということはありませんよね。そういうものに準ずるとするか、昔、ここを治めていたという祭神が祀られている伝承があって、その神の神陵であるという認識が少しでもあれば憚られるような、そんな動向に作用する一面があるとは思いますが、だから、中通古墳群も水田に近接して特段そこに敷居とか境界を作っている訳ではないが、ずっと残っている古墳を守っているというか、伝えられてきたということに少なからず作用していると思います。



**田中**：それは昭和24年に河川改修によって前方部を破壊するという決断に至るのですが、そのときの阿蘇神社の対応というのは具体的には伝わっているのでしょうか。

**池浦**：最初聞いたときは言語道断だと思います。ただ、神社が置かれている時代的な立場であるとか、敗戦後間もないことでもありますし、もう一つは神社の代表者が替わったばかりの時期で、若い宮司さんが赴任されたばかりだったので、今後の神社の将来性も鑑みながら、出土品は神社に奉納して下さい、ということで折り合いをつけたのではないかなと思います。

**田中**：逆に言えば、そういう戦後の時代でなかったら、神社は神域である古墳を触ることはまかりならんというのが基本的な立場だったということでしょうか。

**池浦**：私の個人的なイメージではありますけども、すんなり「はい」とは絶対言っていないはずです。

**田中**：そういう阿蘇神社の古墳観が文化財を守る力になっていたということですが、関連して阿蘇神社のことで質問が一つ来ています。「国造神社という神社がありますが、国造神社と阿蘇神社は、これは一緒に創建されたものなのでしょうか、どういった関わりがある神社なのか」という質問です。

**池浦**：国造神社と阿蘇神社の関係をきちんと整理してみないといけないと思いますが、まずは祀られている神は親子関係という順番になります。ただそれだけではなくて、

国造神社と阿蘇神社は同じ年中行事をやっていることを考えないといけないと思っています。(阿蘇神社では)「阿蘇の農耕祭事」という(国指定無形民俗文化財の)お祭りがたくさんありますが、ほぼ同じものを規模は違いますが丸ごとセットで国造神社でもやっていることを考えないといけないと思います。それから、神社の伝承をどう補完するかという話ですが、当然、文献史料は後世のものしかない訳ですけども、文献、文字が残る前の状態をどういうふうに理解するかというのが、考古学の成果を考えないといけないと思いますが、少なくとも、例えば権力を持っている主の墓である古墳が(神社の)近隣にあるということとか、地域の生産性とか人々の生活、歴史的な環境というものも考えれば、それは間違いなく今の阿蘇神社があるところよりも、国造神社のほうが優先して考えるべき立地環境ではないかと思います。そういうものを考えると、国造神社が現在進行の元宮的な位置にあったものが、後々、僕の立場で言うのもなんですが、親子関係という話が後でできているような感じはしております。**田中**：具体的な創建はいつか分からないということでした。それでは長目塚古墳に限らず、阿蘇の古墳時代の話に移っていきたいと思いますが、その前に時代背景のご質問がいくつか出ています。「この時代は農業の時代でしょうけど、牛とか馬とかは活躍していたのか、古墳時代の交通については馬が主役だったのでしょうか。」という質問です。

**杉井**：長目塚古墳の頃というのはギリギリ、馬がまだそんなに交通の中心にはなりきっていない時期です。日本列島に馬が伝わったのは古墳時代中期になります。牛はもう少し遅れるのですが、日本の考古学の成果ではそのように考えられます。長目塚古墳の時期は、まだ馬の使い方が完全に定着はしていないけれど、内陸交通のルートを整備していこうとしていたそういう時期にあたるのかなと思います。

**田中**：まだこの古墳時代前期までは、人が歩いていた時代でいいですよ。牛もまだ普及していない時代ですね。ですから農作業にも馬も牛もいない、全部人の手でやっていたという時代だと思って頂ければと思います。これから村上先生のお話に移っていきたいと思いますが、それによれば弥生時代後期にこの阿蘇盆地は特にその西側は鉄、鉄器、あるいはベンガラ等を生産することで非常に栄えた、交易の中心地となる場所だったということですが、阿蘇で出土した鉄器は阿蘇の褐鉄鉱であると科学的に証明できるのでしょうか。

**村上**：科学的に分析してはいますが証明されてはいません。分析されたうちの一例は、磁鉄鉱でもなく、赤鉄鉱ではないと言う結果が出ています。朝鮮半島の鉄というのは、磁鉄鉱か風化が進んだ赤鉄鉱という製錬しやすい鉄鉱石を使っているのですが、その両方にあたらぬ鉄があるという成果が出ていて、そういうところに褐鉄鉱の可能性がないのかなと考えています。鉄器の分析というのは非常に難しく、阿蘇の鉄器は非常に残りがいいと申しましたが、とは言っても形はよく残っているけれども、中身の鉄分はかなり土中に溶脱しているのです。中身は抜けているけれども形は残っているという状態のものが多いため、良い遺存状況の鉄器の中に残っているメタル部分を

分析する必要があります。そのためには多少遺物の破壊が伴いますので、そういう資料が豊富に出土する機会を待って分析を試みる必要があるのではないかなと思います。それから鉄滓の話をしました。鉄を作る時に出るカスですね。こういう鉄滓の中に鍛冶のスラグと製鉄のスラグという分け方があるのですが、阿蘇で出土して鉄滓をもう少し慎重に分析する必要があると



思います。私が言いました褐鉄鉱原料の製鉄というのは、のちの古墳時代後期、6世紀以降に中国山地とか福岡で大規模な製鉄が始まる製鉄と炉が全然違うのです。それぞれ鉄のでき方も違う、スラグのでき方も違うということもあるので、考古学的手法とは少し違うのですが、技術復元的な要素も踏まえながらきちんとデータを取って、今後出土した遺物を比較して、私が述べたことが正しいかどうかということを証明していきたいということがあります。それから、今日お見せしました鉄器の中で摘鎌といって稲穂を刈る道具がありましたが、異常なほどに薄い例があります。その薄さというのは、非常に柔らかい鉄を素材としている可能性が高いと思います。朝鮮半島製の鋼は硬いのです。そのように薄くできる素材というのが朝鮮半島にあるのかどうかという問題も問いながら、阿蘇の褐鉄鉱製鉄というものを証明していきたいというふうに考えています。

**田中：**鉄器が作れる焼成温度が出せれば、ベンガラはできるのですか。

**村上：**十分です。

**田中：**杉井先生のお話にもありましたが、古墳時代になるとなぜかそういう鉄やベンガラで栄えた集落がパタリとなくなって、古墳もないという状況がある訳ですが、そういう断絶について、村上先生は地震とか災害と関係があるのではないかというお考えを示されましたが、そのあたりについて他の先生方はどういうふうにお考えでしょうか。順番にお願いします。

**杉井：**今日の村上先生のお話を聞いて、確かに災害、地震によって集落の断絶が起こったというのは十分考えられるなと思いました。それで阿蘇から全く人がいなくなったのかどうかというのは良く分からないというのが正直なところですが、私の報告の写真でも紹介しました通り、阿蘇谷の東部のほうでは、かなりの沖積といえますか堆積といえますか堆積がすごくて、今の地表面よりも相当下のほうに古墳時代の集落が埋まっていないのかどうか、ということも考えています。もう一つは阿蘇神社のある周辺の調査がもう少し進めば、古墳時代前期にあたる集落が検出されることはないのだろうか、そういうことを考えています。

**宮本：**確かに弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、遺跡の分布をみても、まさしく西部から東部へ弥生から古墳にかけて、いわゆる東遷と言いますか、パタッと様相

が変わってきている、これは何だろうかと疑問に思っています。今日の村上先生の基調講演で断層の話がされましたが、まさしく熊本地震を経験して、ああいう自然災害の要因は確かにあるのだろうと感じています。もう一つはやはり調査の不足というか、まだまだで、阿蘇谷の西部のほうは発掘調査が進んでいるのですが、東部に関してはなかなか発掘調査がされていない地域ですので、杉井先生もおっしゃるとおり、非常に堆積が多いところで、もしかしたら見つけきれない可能性もあります。今後、そのあたりの調査を進めると、もしかすると弥生から古墳の繋がりというのが見えてくるかもしれません。

**木村**：震災の可能性は一つの大きな理由になると思います。ただ、阿蘇から人がいなくなったような感じになっていますので、それは人々の生活の痕跡がまだ見えないだけで、これから見つかる可能性は非常に高いのではないかなと思います。阿蘇は熊本平野とかに比べて調査例が少ないところがありますので、今後は発掘調査の事例が増えてくれば、阿蘇盆地での歴史像が語るることができるのではないかと考えております。

**会場から**：そういうところは神話の中にでてきていると思うのですが、健甞龍命が外から阿蘇にやってきているということですね。ですから、政権の交代があったというか、そういうことが神話の中にも明らかに出ています。良く見るのが鬼八の伝説です。鬼八が在地勢力の代表じゃないかと思われま。

**村上**：遺跡の発掘状況に基づいた評価といいますか、大集落の経営、それから鉄器の量、ベンガラの問題といった、発掘されている遺跡の状況からはそのように見えているということです。今おっしゃったように阿蘇全体の調査が進むことによって変わってくると思いますが、ただその場合でも、遺跡の集中が西から東に移るという印象は否めないのかなと思います。私も当然、全く人がいなくなったとは考えていなくて、むしろそれがどういうふうに継承されていったのかということに一番の関心があります。阿蘇の高度に発達した鉄やベンガラの技術が古墳時代の前期・中期になるとどのように生産が営まれたのかということ、ぜひ解明して頂きたいと思っています。



**杉井:**ひとついいですか。ベンガラの話なのですけども、最近ベンガラの科学分析が進んでおりまして、溜まり水などにいる鉄細菌に由来するベンガラというのは、顕微鏡で覗くと、そういうバクテリアがパイプ状のものになって見えるのです。ただ、褐鉄鉱から作ったベンガラに関してはパイプ状のものが全く見え



ないらしいです。そのため、パイプ状ベンガラとパイプが見えないベンガラということで、今はベンガラが大きく2つに分類されているのです。褐鉄鉱のすべてが阿蘇谷産だとは限定できないのですけれど、パイプが見えないベンガラは阿蘇の褐鉄鉱が原料であると仮定すれば、古墳時代中期ぐらいまで、パイプが見えないベンガラもずっと使われているので、そうすると、阿蘇谷のどこかでベンガラを作っていたらうけれども、ただ古墳時代にはそれが良く分からない状態なのだと考えられます。

**会場から:**それはつまり、阿蘇のベンガラはパイプ状のものが見えるベンガラであるということですか。

**杉井:**それは逆です。阿蘇の褐鉄鉱を原料とするベンガラはパイプが見えないのです。

**田中:**今の話で古墳時代中期までであるということは、まさに長目塚古墳の石室の中に塗られていたベンガラも阿蘇のベンガラを使っていた可能性があるということですか。

**杉井:**可能性があるということですよ。

**田中:**古墳時代になると弥生時代後期のすごく繁栄していた姿が追えない。一部はベンガラを作っていた可能性もあるけども、集落とか古墳を見ると続きが見えないという現状に関わる質問ですが、「東側の大分県側の菅生台地に同様の傾向があると聞いたことがあります。関係はありますか」という質問ですが、これは私が答えます。大分県の阿蘇外輪山の台地上では古墳時代の初めになっても集落がずっと続きます。そこから次第に衰退して中期の初めくらいにほぼ終わります。その後どこに行ったかという谷に行きます。谷に降りると中期から後期の集落遺跡があります。谷に田んぼを作るほうが有利になったので、田んぼを作りやすい谷に降りて行くのではないかと考えておりまして、外輪山を挟んで弥生時代後期までは阿蘇の鉄器やベンガラがたくさん大分県側にも入ってくるのですが、その後の状況は違ってまいります。

次に110m級の長目塚古墳がなぜ阿蘇に登場したのか。どうして阿蘇にこれだけの古墳群が作られるようになったのかということを考えていきたいと思っております。それについては、立地の問題とか色々な側面から考えることができると思いますが、阿蘇に中通古墳群が中期に造られ続けたということは、それだけ有力な首長が阿蘇に継続



して現れたということです。そういう事態がなぜ阿蘇に生じたのか。そのあたりの問題について、皆さん、どうでしょうか。「外来系の土器とか遺物とかの議論がありましたか」という質問も来ています。木村さんどうでしょうか。

**木村**：先ず遺物から言いますと、先ほど申しましたように、近畿の中央政権との繋がりが非常に強い遺物があるということと、その一方で在地の熊本県内のネットワークというかそういうものと認められる遺物が両方あるということですね。ここにいた人達が近畿とどういう繋がりを持っていたか、これは現状では全く分かりません。弥生時代の状況を考えると、鉄生産でほかの地域より優位性を持っていたのかなと考えたこともあったのですが、やはり弥生時代から古墳時代に移り変わるときにパタッとそれが終わっています。鉄生産が古墳時代の中期まで続いているということを考えると、何か別の要因でこの地域が重要になってきたのではないかという気はします。ただ、ほかの地域は水田耕作が発達し、それを背景に成長していくのですが、阿蘇地域はその形跡もまだ認められませんので、なぜこの地域に有力な豪族が出現してきたのかというのは、まだ考えがまとまっていないところです。



**田中**：木村さんは須恵器がご専門ですが、陶邑というのは大阪の和泉ですね、そこで焼かれた須恵器が阿蘇に達するとしたら、こういったルートを通ってきたと考えますか。

**木村**：可能性は二つあると思っております、一つは瀬戸内海側から通って北部九州から熊本平野を通って、白川・黒川を遡ってくるルート。やはり川を伝うルートというのが一番、人が移動しやすいルートだと思いますので、一つはそういうルートだと思います。もう一つは、大分のほうから直接、竹田とかを通って阿蘇に来るルートという可能性を考えていますけれども、どちらから来たかというのはまだ具体的には分かりません。熊本平野の須恵器の出土状況を見ますと、長目塚古墳の時期には出土例が多くありません。どちらかというところ宇土半島のほうですとか、県北とかの有力な古墳には同じ時期の須恵器が入っているという状況です。ただ、可能性としてはやはり熊本平野側と大分側のどちらかではないかなと思います。

**田中**：ありがとうございます。先ほど木村さんの報告の中で、熊本県で見た須恵器の中で一番きれいな須恵器は長目塚古墳のものだというお話がありましたが、そのような須恵器がどういう経過を経て伝わってくるのかということが、重要な問題になると思います。その点はどうですか。

**杉井**：正直、分かりません。阿蘇谷の中通古墳群の時期を古墳時代中期としますと、カルデア底というか平地部にこれだけの古墳を造っているということ自体に非常に意義があると思います。同時期の古墳群が、これは私の報告の最後の方のスライドに

示しましたけれども山田地区にあります平原古墳群が恐らくほぼ同時期の古墳群で、非常に有力な古墳群なんです。ただそれは丘陵の上に造られていて、今年測量したひとつの古墳は直径 60m くらいの円墳になります。とても大きな円墳があるというのが今年分かったのですけれども、そういう有力な古墳群が、中通古墳群と同時期に造られていることが分かって、それは丘陵部にあるんです。阿蘇谷東部の丘陵縁辺部にも石棺がたくさん造られているんですね。東手野なんかの地域です。前期に遡るものもありそうなんですけど、ほとんど中期に入りそうに思います。そういう阿蘇谷全体の古墳立地の中で、中通古墳群が平地部にあるということの理由が今一つ分からない。先ほど控室で田中先生がおっしゃっていましたが、外輪山の上からちょうどよく見える場所であることが重要なんじゃないのかと、そういう立地も考えなければいけないと思いました。

**田中：**今、立地の問題という話が出ましたけれども、杉井先生のご指摘通り、普通、古墳というのは高いところ、集落から見上げるところに造っているのが通例なんです。同じ阿蘇の中でもそういう場所に造ってある古墳も当然あるのに、中通古墳群だけは全部低いところにある。僕なんかも車で通りがかりに外輪山の上から休憩している時に眺めると、大観峰くらいの高いところから見ると本当によく見えます。質問の仕方を変えて、この阿蘇盆地に古墳が造られる条件あるいは原因は何か。例えば、ほかの地域との交流とか、立地の条件についてはどう考えられますか。阿蘇の地の利みたいなのは。

**杉井：**私は非常に単純ですけども、九州島中央にあってですね、東西南北の結節点であるという場所の利なのかなと思います。

**田中：**具体的には、特に地元の方は阿蘇の地の利をどういうふうにお考えですか。

**宮本：**視点をどこまで持っていくかによるのですが、まさしく杉井先生のおっしゃるとおり、九州という範囲で考えれば九州の真ん中にある。もう一つは広めに阿蘇地域で考えると、九州の主要河川、例えば白川・緑川、熊本の白川、あとは福岡方面は筑後川、大分方面は五ヶ瀬川の一級河川になっている主要な河川の源流域にもなっています。恐らく古い時代の集落はそういう河川沿いに発達し

ていっていることを考えれば、九州島の真ん中にある、色んな地域と交流しやすい結節点であるんだと思います。ただ、現時点で皆さん、阿蘇以外から来られているという方は分かると思うのですが、非常にカルデラの内外というのは行き辛い。比高があるし、当時は道がないから大変であったらろうと。広い視点でそういった見方をすれば九州島の中の結節点であるが、もうちょっと視点を狭めれば、阿蘇の中と外輪



の外との行き来は結構苦労が多いのかなと。広い視点でいうと結節点になりうるのですけれども、実際、外に出ようと思ったときに結構大変な地域かなと思います。

**田中**：外輪山まで上がれば広がっていますが、そのあたりは神社の関係では何かありますか。意外と大分は阿蘇社の末社が非常に多い。中世以来、色んなところにあるのですが。

**池浦**：私は神社の分社がたくさんできる理由というのを古墳時代まで持っていくのはちょっとどうかなと思いますが。

**田中**：あちこちあるので地理的条件があるのかなと。

**池浦**：それとですね、神社をどう捉えるかということで、阿蘇神社は歴史的な見地から見ても必ずしも地域神社ではないという捉え方で、少なくとも肥後国一宮という取り扱いを受けてきている訳ですけれども、要するに全国区と言われなくても中央にどういう評価を受けてきたかということは、その要因要件は何なのかということを考えなければならないと思うのですよね。私は火山信仰の評価のウエイトが大きいのかなと思っているのですが、ただ今日のお話はそれよりもちょっと前の段階の話なので、そこは私の中では中々及ばない領域ですね。

**村上**：本日の杉井先生のご報告の中で、やはり中央政権と関係があったから長目塚古墳があって、周りに円墳が営まれるということなのですけども、ああいう姿というのは、ものすごく古いと言うとちょっとおこがましいのですが、一望できるようなところに造るというのは一つの理想ではないかと思います。ですからそういう意味でいうと、平場に造っているということと、それから一つ平原古墳群は高いところにあたりするの、もしかしたら在野的な本来土地とずっと繋がっていた血筋の人のお墓という捉え方もできると思うのですけども、じゃあ、それをなぜ中通に造ったかというのが先ほどから問題になっているけれど、一つ九州の結節点ということも出てくると思います。今、仮説を言っている訳ですけれども、阿蘇という存在が神秘的なものを創り出しているというか、その世界に入り込むと祭祀の話とかをしなくちゃいけないので難しくなってくるのですが、例えば中国の正史の『隋書』倭国伝に阿蘇の記事が出てきますよね。つまり、火を噴く山があったりという表現があったり、そういう表現がされている、中国の正史に出てくる場所が特定できる場所というのは非常に限られているんですね。ですから、そういう場所だからこそ、やっぱり中央政権が入っていきたくらいと思った可能性がある。ではその時に一体何がほかの地域に比べて阿蘇地域が特異なのかというと、やっぱり一つ山を鎮めるための祭祀性とか、そこから出る神秘性とかが出てこないかなというのがありまして、そういうところで一つ疑問に思うのは、古墳時代中期でいうと古墳があって集落があって、もう一つ祭祀遺跡というのが結構ありますよね。古墳時代中期というのは。古墳時代中期の祭祀遺物というのは阿蘇にはないですか。

**宮本**：今のところは見つかってないです。

**村上**：ご神宝あたりにないですか。勾玉とか子持ち勾玉とかそういった類のものは阿

蘇神社に納められていないですか。

**池浦**：神社が持っているものの中で一番、年代特定ができて古いものは多分、長目塚古墳の出土遺物だと思います。その後も、平井古墳もそうなのですけど、古いものがある種、奉納されてきた歴史性があるんですよ、神社の宝物って。うちはそんなに多くないのですが、色んな人が色んな理由で、色んなジャンルのものが色んな時期に奉納されてきた事例はもちろんあります。確認できるものと確認できないものがあるのですけれど、特に考古資料というものは取り扱いを慎重にしないといけないと思います。それを伝世品といえは捏造になってしまう可能性があるんで、出土地が分からないものは分からない、という表現をしないといけないと思います。そういうデリケートなものだと思っております。

**田中**：今、村上先生がおっしゃった阿蘇地域での祭祀遺物は非常に重要な指摘だと思います。ただ、その時代の考古資料では一番祭祀遺物が出ているのは、玉名市の西迫間日渡遺跡でかなり大量のお祭りの道具が出ています。大分県側に行くと実は殆ど出ていなくて、6世紀ぐらいになるとチラホラという感じで、山岳地に行きますと阿蘇を含めて殆どそういう祭祀遺物はまとまって出ていないという状況です。どこかで発掘で見つければまた状況は変わってくるのではないかと思います。改めて、村上先生にお聞きしますが、先ほどの話の中で阿蘇のものが九州の各地に行くという点に関して、阿蘇であるからという地の利はあるのでしょうか、もちろん阿蘇でリモナイトが取れるということが条件にあるのですが、そういうふうに広がっていく際の条件はあるのでしょうか。

**村上**：幅・津留遺跡が発掘されて、すごい数のお墓が出てきたのですが、道路幅の調査であれだけ出てきている訳ですから、広く掘ったらもっと出てくるでしょうけど、本来、その地域に住んでいた人達ではなくて、あちこちから来ているのではないかと数なんですね。そういう人が集まる理由は何だったのかということを考えなくてはならない。その時に、弥生時代中期の後半というのは、まだリモナイトが有名になっている時期ではないんですよ。阿蘇ベンガラが有名になる時期よりもちょっと早いのではないかと思います。そうしますと弥生時代後期は、私はベンガラというものが各地の祭祀とか色んなものに使われるのに重要で、外側から物が入ってくるのではないかと考えたのですが、その前の段階ですね。人がたくさん来る弥生時代中期の後半という段階に、それがきっかけとなってそこからベンガラが多くに認知されていくと思うのですが、そこがちょっと分からないですね。後期は確かに出てくる。その前は先ずは人が来ているのですけれども、そのきっかけを作った阿蘇の魅力が、惹きつける力が何なのかというのがまだ分からないですね。

**田中**：弥生時代の後期、阿蘇が他の地域との交流などで栄えた背景にあるのは、先ほど出たリモナイトや立地の問題があるかだと思います。ただ、古墳時代の中期に、なぜ中通古墳群が出てくるのかという点は、まだ謎です。逆にこのような議論を呼ぶ古墳群であることが今回のシンポジウムを通じて分かったんじゃないか思います。これか

らこの古墳群、あるいは阿蘇全体の古墳を活かしてこれからどうするのか。それは学問的には調べること、行政的には色んな施策の中に活かすことなどがあると思うのですが、そのあたりについてのご意見等を最後に発表者の方々にご意見をお願いできればと思います。

**杉井**：私は今日の報告の中でも様々お伝えしましたがけれども、まだ分からないことだらけです。その一つの理由は、基礎データがまだ十分足りていないことがあるのではないかなと思います。例えば中通告墳群に関して、各古墳の測量図をもう少し精度の高いものにするとか、古墳群全体の測量図の中に各古墳の詳細な測量図を挿入した図だとか、そういう基礎



的なデータをまず作っていくことが大切だと思います。例えば東手野などには石棺がまだ残っていますけれども、その辺りの基本的な図を作るとか、さらに今日は未報告資料をたくさん紹介しましたがけれども、それらを阿蘇市の方々や大学などが協力しながらきちんと報告・分析していくとか、そういう作業を先ず積み上げないと、なかなか見えてこないところが多いと思いますので、そういったところを、近い将来、私も一緒にやっていきたいと思っています。

**木村**：今日は行政的な意見を言わせて頂きたいのですが、現在、私は県下全域の史跡の担当をしております、もちろん県外の史跡も色々見て回ることもありますが、こんなに田んぼの中に古墳がポンポンあって、それが今も自由に見学できるところはほとんどないですね。地元の方はもしかすると見慣れてこれが当たり前とっいていらっしゃるかもしれませんが、県内どこにも見られません。ぜひこれを活かして、何か活用して頂きたいと思います。県史跡になってもう60年、地元の方々の協力を守ってきて頂きましたので、今後もぜひ史跡を守って未来に繋げて行って頂ければと思います。

**池浦**：私の個人的な見解になると思うのですがけれども、神社に宝物として伝わってきた考古資料である長目塚古墳出土品が、こうした形で学術的な評価を受けるような場を作って頂いて、今後もそうした機運が高まっていけば良いなと思っておりますが、文化財行政で取り組んでおられます世界文化遺産推進等で構成資産としての価値が今後どんどん高まっていく過程の中で、木村さんがお話しされました史跡のレベルがもっと高まっていく可能性を感じておりますが、そうした中で、古墳が過去の遺物として取り扱われるという側面と、少なくとも神社の所有地である宗教性とのバランスをどう考えていくべきか、という課題に今後接していかなければならないと思っております。直接、古墳に対して神社が何か祭祀行為や行事を行っている訳では今は全くない訳です。ただし、それが神社の所有地であるという事実と、神陵だという伝説・

伝承的な部分は少なくともウエイトの中には少しはある訳ですから、現在進行形の宗教性という部分と過去の遺物・遺跡という部分のバランスを所有者としてどう考えて将来進んでいくべきか、しっかり考える、そういう時期が来るのではないかと考えています。

**村上**：私も熊本県出身でありますので、阿蘇に良く通いましたので中通古墳群とはこういうもののかなというイメージはあったのですが、やはり杉井先生が『長目塚古墳の研究』という報告書を出されたことで、ぼんやりとしたものが専門家の立場から見てものすごく鮮明になったと思うのですね。その発見で研究としては次の段階に進むのですが、その明らかになったことを地域の方々と共有することによって、次の活動の契機が生まれてくると思います。それが無いのに何か活動しようと思っても張子の虎のようなもので、結局はただのつくりものだったということになりますので、今回分かったようなデータ、それから基礎データの蓄積が必要であると話がありましたけども、やっぱりこういう活動を支える考古学的な学術的なデータはきちりと押さえながら地域の活動に繋げていくことをしていく必要があるのではないかと思います。それから我々も自分たちで発掘した遺跡を地域に活かしていこうという中でよく地域の方々・行政・大学の三位一体という話をするのですが、今日は池浦さんの貴重なお話を聞かせて頂いて、しかも長目塚の資料を良く保存されていて、それを研究することによって今回の報告書に繋がったということなのなのですが、そこに神社が加わったことで四位一体という、なかなか他所にはないような形の古代文化の研究の仕方といいますか説明の仕方に触れまして、非常に勉強になりました。

**宮本**：私は中通古墳群のある集落で生まれ育ったのですが、地元民としては、木村さんがおっしゃったように田んぼの中に古墳が佇んでいるという風景は心象風景として大事なものという思いがあります。古墳を守りつつもその周りに水田があって、そこで営農があって、生業があってという空間というものを今後も続けていければと思います。これは文化財の保存というよりも地域の持続可能な形で今後もこの姿を続けていければという思いがあります。一方、学術面とか研究面に関しては、杉井先生がおっしゃったように分からないことがたくさんあって、基礎的なデータがないです。発掘調査されている長目塚古墳も前方部だけで、他の墳丘は発掘調査しておりませんし、実はそれぞれの古墳の時期差が分からないです。前後関係が今のところ全く分かっていません。写真を出していますが、中通古墳群を二分するように河川が流れていて、今は一体として中通古墳群と言っていますが、河川で二分されている古墳群を本当に一体として扱っていいものかどうか個人的に疑問に思っています。右岸と左岸で本当に差があるのかないのか興味もあるので、過去の資料もそうですし、今後王道的に基礎的なデータを集めていく。しかし発掘調査となると、なかなかこの掘るということに関しては、文化財保護の面で慎重にならざるを得ないということもありますので、今どんどん技術が進歩しておりまして、掘らずとも地中の様相が分かるような技術もあります。これは杉井先生や県教育委員会の木村さん、所有者である池浦さ

んは歴史の研究者の立場でもあるという関係者に恵まれている環境にありますので、少しずつ解明しながら進めていきたいと思っています。今回、発掘から 70 周年ということで、地元の方々から改めて古墳の価値を見直すきっかけになったとお声かけ頂いておりますので、地元の方々と一緒に、今後 10 年・20 年、100 周年を遠い先に見ながら中通古墳群を地元と一体になって守り、伝えていければと考えています。

**田中：**ありがとうございました。最後に感想を述べさせていただきます。私は大分出身で大分と熊本を行き来することも多いのですが、非常に近いのですよ。外輪山まで来て阿蘇に下りるとというのは、大分の自宅から車で 2 時間もかかりません。にも関わらず、今日の話で出た外輪山を境に大分の古墳時代と随分違うのだと。じゃあ古墳時代の熊本の人が大分と行き来がなかったかということ、そんなことはない。こんなに近いので始終行き来があったと思います。災害があったら大分のほうに逃げた人も一杯いたと思う。でも、考古遺物に表われた古墳を見ると大分と阿蘇が大きく違う、なぜそうなるのか、そのことが非常に不思議に思いました。それが一番の感想であります。それでは、これで時間になりますので、シンポジウムを閉じさせていただきます。改めて、先生方、ありがとうございました。



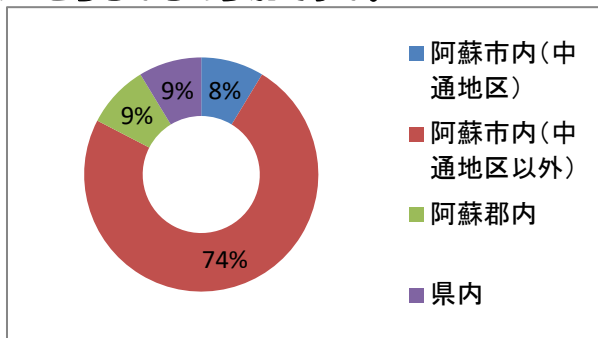
**司会：**ありがとうございました。これで、パネルディスカッションを終了させていただきます。皆様、今一度盛大な拍手をお願い致します。今回のパネルディスカッションでご提案頂きました、基礎的な調査を継続していくことと、また、田園の中の古墳という景観を活かした保全活動、中通古墳群の在り方というのを村上先生

が提案頂いた四位一体で考えていきたいと思っております。私たち行政、地域の皆様、研究者の皆様で次の 80 周年、100 周年に確実に繋がっていくような取り組みを可能な限り努力して参りたいと思っております。今後とも皆様のご支援、ご協力をお願い致します。以上をもちまして、長目塚古墳発掘 70 周年記念シンポジウム「中通古墳群を考える」を終了させていただきます。長時間に亘りまして、ご清聴ありがとうございました。

中通古墳群シンポジウム  
参加者アンケート集計結果

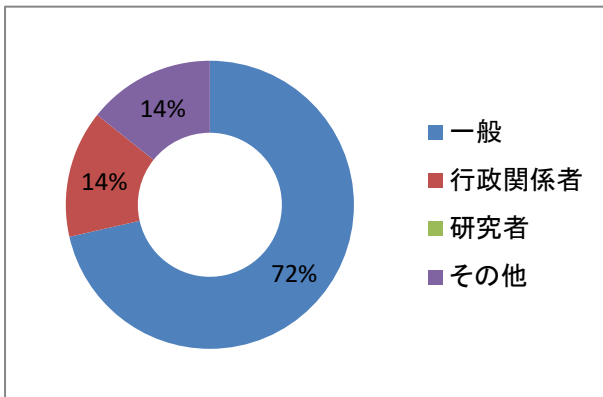


1 どちらからの参加ですか。



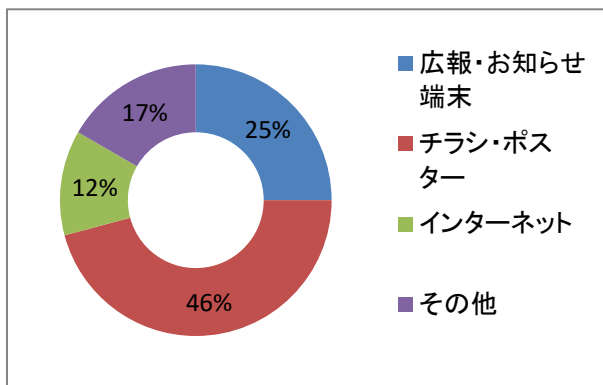
在住地	数
阿蘇市内(中通地区)	2
阿蘇市内(中通地区以外)	17
阿蘇郡内	2
県内	2
その他	0

2 所属を教えてください。



区分	数
一般	15
行政関係者	3
研究者	0
その他	3

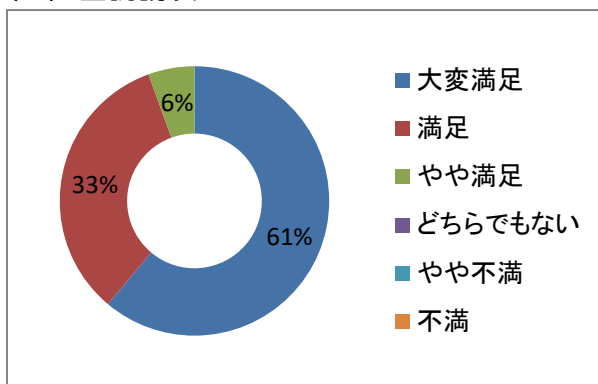
3 シンポジウム開催をどのようにして知りましたか



手段	数
広報・お知らせ端末	6
チラシ・ポスター	11
インターネット	3
その他	4

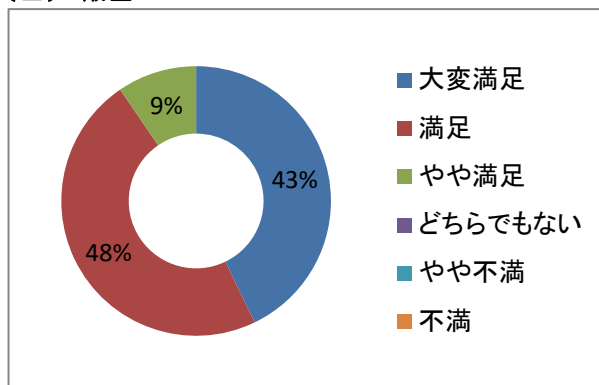
4 シンポジウムの満足度

(1) 基調講演



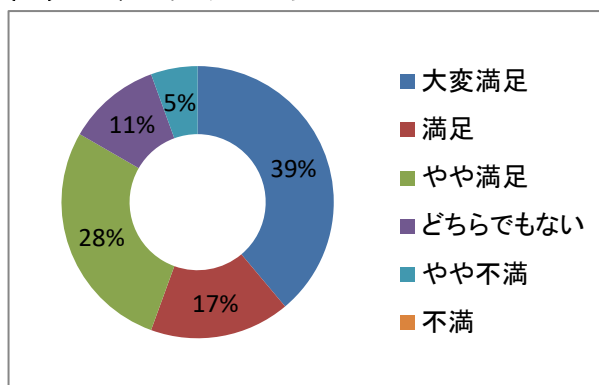
満足度	数
大変満足	11
満足	6
やや満足	1
どちらでもない	0
やや不満	0
不満	0

## (2) 報告



満足度	数
大変満足	9
満足	10
やや満足	2
どちらでもない	0
やや不満	0
不満	0

## (3) パネルディスカッション



満足度	数
大変満足	7
満足	3
やや満足	5
どちらでもない	2
やや不満	1
不満	0

## 5 自由記載

- ・村上先生のご講演をお聞きして、私の想像していた弥生時代、弥生人の能力・技術力・文化・情報網・交易など遥かに超越した世界が展開されていたことができ、私自身が恥ずかしくなりました！。
- ・パネルディスカッションを聞いていても中に入れない。尋ねたいと思っても尋ねられない。結局、まあいいかという気持ちになりました。
- ・会場席が椅子だけだったので、メモする時が資料を下に置いたり大変で不便を感じました（贅沢でしょうか）。テーブルを置いてほしかったです。音声は良かったです。パネルディスカッションは要らないと思いました。
- ・村上先生と池浦さんのお話が分かりやすく良かったです。
- ・資料は一冊にまとめて綴じた方が良いのでは。
- ・中通古墳群がこの地に築造されたかは、引き続き調査研究をしていく必要があると感じた
- ・大変興味深かったですが、個人的に湧いてくる疑問や意見を専門家の方と直接意見交換したいと思いながら終わってしまったのでモヤモヤしています。
- ・この催しを評価します。意義があったと思います。しかし、あまり知られていなかったのではないのでしょうか。出土品を見せる機会を作ったらどうですか。
- ・中通古墳群がについて調査されていなくて良くシンポジウムができました！！今後色々な方向から調査し、発表されることをお待ちしております。興味深く受講しました。ありがとうございました。
- ・非常に良かったが、まだまだ多くの方が参加できたら良かったと思います。世界文化遺産を目指すうえでPRをしたら良いかと思います。
- ・大変ありがとうございました。この遺産をまちづくり、地域づくり、観光地づくりに繋げていく！
- ・是非、古墳めぐりをしたいなと思いました。未知なる部分の発掘と時代考証。結論づけが難しいところがロマンではあります。
- ・阿蘇は大分から外輪山に来て、山田の上から拓けてきたと聞いております。その方面から考えてみるのも。研究してください。

## 中通古墳群シンポジウム意見・質問票

No.	内容
1	弥生時代の農業について、この時代に牛とか馬が活躍していたのでしょうか？
2	交通について、馬が主役だったのでしょか？
3	国造神社と阿蘇神社はどちらが先に創建されたのでしょうか？
4	阿蘇には歴史に残るものや火山などたくさんあります。阿蘇の成り立ちや食文化など人々が何処にどのくらい住んでいたかなど知りたいです。
5	長目塚古墳の系譜の移動についての根拠をもう少し詳しく教えてもらいたいです。
6	長目塚古墳の調査時に周壕は見つかっていますか？。
7	外来系の遺物は他の地域との量の違いはありますか？鉄・ベンガラ・鉄それぞれの焼成温度は？
8	古墳の年代ですが絶対年代の測定をなぜしないのですか？
9	阿蘇から出土した鉄器が阿蘇の濁鉄鋳を製鉄したものであると証明できればいいと思うのですが...鉄器の科学分析・物性的分析から、不純物分析等、それに使った濁鉄鋳の産地を特定することはできないのでしょうか？また、そのようなことを研究している方はいないのでしょうか？科学的に証明できれば阿蘇での製鉄が証明できると思うので…。
10	4m埋没している古墳については、その経緯は地質調査等で、ある程度環境の変化等を推測できるのではないかと思います。
11	古墳時代がその後の歴史にどの様に影響を及ぼしたのか興味があります。
12	なぜ、中通古墳群がこの地に築かれたのか。どのようにして地元の人たちが古墳を守ってきたか？
13	弥生～古墳時代間の断絶期間（と呼んで良いのでしょうか？）について、大分県竹田市の菅生台地でも、同様な傾向があると聞いたことがあります。大地震以外の原因があるのでしょうか？。
14	中通古墳群は、中通村の所有者が明治or大正の頃に阿蘇神社に寄付されたという記録をどこかで見た覚えがあります。詳細が分かれば教えてください。
15	中通古墳群を阿蘇市の観光に活かして欲しい。世界遺産の足掛かりにして欲しい。ジオガイドにもっと活用して欲しい。今後も調査を重ねて公表して欲しい。農業と歴史のかかわりを調査して欲しい。象ヶ鼻古墳との関係も深いと思われるので、その点を調査して頂きたい。

## 関 連 事 業

1. 古代体験学習（鏡づくり体験）
2. 中通古墳群講演会（中通地区学習会）
3. 長目塚古墳出土品特別公開
4. 阿蘇中央高校出前授業
5. 一の宮小学校土曜授業地域体験活動
6. 小嵐山景観・環境整備事業

# 1. 古代体験学習（鏡づくり体験）

- (1) 日 時 令和元年8月3日（土） 午前10時及び午後1時30分
- (2) 会 場 阿蘇図書館研修室
- (3) 参加人数 30名（小中学生を対象とした定員制）
- (4) 内 容 青銅器の製作技術と古代の文化についての理解を深めるため、市内の古墳から出土した現物を教材としたミニ講座と鑄造の鏡づくり体験を行った。併せて「3D体験！ミニミニバーチャル博物館」と題して、中通古墳群の墳丘や上御倉古墳の石室、宮山遺跡の出土品などの3Dモデルをスマホやタブレットで表示して体験するコーナーも設置した。



## スマホ・タブレットで3D体験！ ミニミニバーチャル博物館

阿蘇市には昔の人たちが大切に残してくれた貴重な文化財があります。その貴重な文化財を3Dモデルにしました。スマホやタブレットを使って文化財の3Dモデルをぐるぐる動かしてみましょ！スマホやタブレットでQRコードを読み込むと画面に3D文化財が表示されるよ！

中通古墳群 長目塚古墳		中通古墳群 上鞍掛塚A古墳	
上御倉古墳の 玄室		上御倉古墳の 石室（全体）	
尾籠の六地藏		中通古墳群 車塚A古墳	
宮山遺跡出土 弥生時代の壺		宝篋印塔	

**【スマートフォン・タブレットの使用上の注意】**  
 3Dを表示するにはパケット通信料が発生します。お使いのスマートフォン・タブレットによっては通信データ量の制限を超えて通信速度が遅くなる場合があります。自分のスマートフォン・タブレットを使用する際は、無料WiFi「くまもとフリーWi-Fi」をご利用ください。

## 2. 中通古墳群講演会（中通地区学習会）

- (1) 日 時 令和元年8月24日（土） 午後1時～午後3時  
(2) 会 場 阿蘇市公民館中通分館  
(3) 参加人数 110名  
(4) 内 容 12月に開催するシンポジウムに先立ち、市民向けに中通古墳群についての基礎講座を開催した。熊本大学の杉井准教授に古墳時代の概観と阿蘇の古墳時代についての講演を頂いたあと、阿蘇市教育委員会の宮本学芸員が長日塚古墳の発掘調査を中心に中通古墳群の概要について講演を行った。また、会場では熊本大学の学生による中通古墳群や同大が調査を進めている平原古墳群のポスターセッションも開催した。講演会ののちに、熊本大学の学生たちの案内による現地見学会を行う予定であったが、雨天のためやむなく中止した。地元の公民館事業との共催ということもあり、多くの地元の中通地区の皆様にご参加頂いた。



中通古墳群長目塚発掘調査70周年・熊本県史跡指定60周年  
長目塚古墳出土品熊本県重要文化財指定記念行事

## 中通古墳群を見る・知る・学ぶ

### 【講演会・見学会・出土品特別公開】



**【講演会・古墳見学会】**  
**日時** 令和元年8月24日(土)  
 午後1時～3時  
**会場** 阿蘇市公民館中通分館  
**主催** 阿蘇市教育委員会・阿蘇市公民館中通分館  
 熊本大学

**【長目塚古墳出土品特別公開】**  
**日時** 令和元年8月25日(日)  
 午前10時～午後4時  
**会場** 阿蘇神社斎館  
**主催** 阿蘇市教育委員会・宗教学人阿蘇神社

**【お問い合わせ先】**  
 阿蘇市教育委員会 社会教育係 電話0967-22-3229  
 ※各イベントの詳細は裏面をご覧ください



熊本を代表する古墳群「中通古墳群」。  
 今年はその中で最大の古墳「長目塚」が発掘調査されて70周年。古墳群全体が熊本県の史跡に指定されて60周年となります。そして今年3月には70年前の発掘で発見された出土品が熊本県重要文化財に指定されました。これらを記念し、地域が誇る文化遺産「中通古墳群」の歴史と魅力について研究者が語り案内するイベントを開催します。参加費無料。

**【講演会・古墳見学会】**  
**阿蘇市教育委員会・阿蘇市公民館中通分館・熊本大学 共催**  
**日時** 令和元年8月24日(土) 午後1時～3時  
**会場** 阿蘇市公民館中通分館  
 ・講演会 午後1～2時まで  
**講演①「古墳時代の概観」** 熊本大学文学部 杉井 健 准教授  
 世界文化遺産登録で注目されている日本の古墳時代について、熊本の古墳研究の第一人者が解説します！  
**講演②「中通古墳群について」** 阿蘇市教育委員会 富本 利邦 学芸員  
 中通古墳群と阿蘇の歴史について、NHKプラタモリにも登場した地元出身の学芸員が解説します！  
 ・古墳見学会(徒歩コース延長3.3km) 午後2～3時まで  
 熊本大学で考古学を学ぶ学生ボランティアが案内します。

※参加の際は、熱中症対策として各自飲料水等をご持参ください。  
 また見学会に参加される方は動きやすい服装やスニーカーなどご準備ください。

**【長目塚古墳出土品特別公開】** 阿蘇市教育委員会・宗教学人阿蘇神社 共催  
 今年3月26日に熊本県重要文化財に指定された長目塚古墳出土品を特別公開します。  
**日時** 令和元年8月25日(日) 午前10時～午後4時  
**会場** 阿蘇神社斎館  
 ・ギャラリートーク 1回目:午前11時 2回目:午後2時  
 出土品の調査に携わった研究者が出土品の解説をします。  
 解説 熊本県文化課 木村 龍生 氏  
 熊本市文化振興課 三好 栄太郎 氏

なか どおり こぶん ぐん  
**中通古墳群**  
 熊本大学文学部考古学研究室 3年 藤森あきの 2年 崎谷 京加

**中通古墳群とは**  
 中通古墳群は熊本県阿蘇市一の宮町中通にあります。古墳群とは、古墳がいくつか集まってできたグループのことです。中通古墳群は少なくとも14基の古墳から構成されていますが、現在確認できるのは10基のみです。その中で前方後円墳と呼ばれる「鍵穴」のような形をした古墳は上藤田塚A古墳と長目塚古墳の2つで、そのほかは円墳です。



**切断された!? 長目塚古墳**  
 中通古墳群の中で最大の古墳は、長目塚古墳です。長目塚古墳は全長1115mの前方後円墳で、阿蘇地域ではもちろんのこと、熊本県内でも屈指の規模を誇ります。当古墳は、1949年(昭和24年)に調査が実施されました。真横を流れる東高川がたびたび大雨によって氾濫していたので、それを防ぐために前方部(前方後円墳の四角い部分)を破壊し、川の築れをまつぐにすることを決めたからです。前方部は失われましたが、前もって調査をしていたことで河川改修前の古墳の記録は残されました。



**長目塚古墳から出てきたものとは…?**  
 長目塚古墳で調査された前方部からは「石室」と呼ばれる、亡くなった人が納められた部屋が発見されました。床や壁はベンガラという黒く赤く塗られていました。石室内には一部分の銅鐙骨が散っていたそうで、出土した骨から35歳くらいの女性と推定されています。また一輪に勾玉といった玉類の他、銅鏡、武器などが出土しました。



**いつ、誰の古墳なの?**  
 長目塚古墳は出土した遺物から古墳時代の早ごろでも早い段階、すなわち5世紀初めに造られたと考えられます。この古墳に最初に葬られた人は、当時の阿蘇地域でもっとも力をもっていた人であったと言えるでしょう。



ひら ばる こぶん ぐん  
**平原古墳群ってどんな古墳?**  
 熊本大学文学部考古学研究室 3年 石本祐太郎 2年 松本青葉

**平原古墳群の位置**  
 平原古墳群は、熊本県阿蘇市山田平原に所在します。遠見ヶ森(観音)と象ヶ鼻のほぼ中央に位置し、標高が500～530mの場所にあります。熊本大学考古学研究室では、2011年度から平原古墳群の調査を行っており、今年で5度目の調査となります。



**平原古墳群の今**  
 古墳群が立地する丘陵は針葉樹(杉)に覆われています。もし丘陵上に樹木が生えていなかった場合、平原古墳群の南東に存在する中通古墳群と、互いを見通すことができると言われています。古墳は南尾根と北尾根の2箇所に分かれて分布しています。南尾根グループは古墳4基(2・3・6・7号墳)と甍式古墳壘2基、北尾根グループは8号墳の他、3基の円墳が存在すると言われています。



**6号墳の構造**  
 平原古墳群の6号墳は、直径が約30m、高さ4～5mの円墳です。構造としては、二段築成といって、墳丘の斜面が二段の階段状に造られています。また、古墳の断面には石が並べられていた(積石)。



**遺物について**  
 平原古墳群からは、壘形埴輪、土師器、須恵器の破片が出土しています。平原6号墳の出土遺物は、それらの特徴から5世紀前半頃であると推測されます。



**今年度の調査**  
 今年度の調査は、古墳の構造解明を目的として、3号墳と6号墳の発掘調査を行います。また、古墳分布の解明を目的として、8号墳を中心に測量調査を行います。



### 3. 長目塚古墳出土品特別公開

- (1) 日 時 令和元年8月25日（日） 午前10時～午後4時
- (2) 会 場 阿蘇神社斎館
- (3) 入場者数 270名
- (4) 内 容

長目塚古墳出土品の所有者である阿蘇神社のご協力のもと、熊本県指定記念と冠づけた特別公開を開催した。展示は県指定の9種451点中、保存状態が良好な9種50点を展示した。展示にあたっては、ギャラリートークとして熊本県文化課の木村龍生氏と熊本市文化振興課の三好栄太郎氏に一般向けに非常に分かり易い解説を頂いた。併せて、平成28年熊本地震により被災した阿蘇神社の災害復旧事業の経過を紹介パネルも展示した。前日の講演会以上に大勢の来場者が訪れ、関心の高さが窺える展示会となった。



中通古墳群長目塚発掘調査70周年・熊本県史跡指定60周年  
 長目塚古墳出土品熊本県重要文化財指定記念行事  
**長目塚古墳出土品特別公開**

【長目塚古墳出土品特別公開】  
 日時 令和元年8月25日（日）  
 午前10時～午後4時  
 会場 阿蘇神社斎館 入場無料  
 主催 阿蘇市教育委員会・宗教法人阿蘇神社  
 協力 熊本大学文学部考古学研究室

熊本を代表する古墳群、「中通古墳群」今年はその中で最大の古墳「長目塚」が発掘調査されて70周年。古墳群全体が熊本県の史跡に指定されて60周年となります。そして今年3月には70年前の発掘で発見された出土品が熊本県重要文化財に指定されました。これらを記念し阿蘇神社が所蔵する長目塚古墳出土品を1日限定の特別公開を行います。

今回は出土品のうち、発掘された石室内部から発見された主な埋葬品を展示するほか、平成28年熊本地震の被害から復旧工事を続けている国指定重要文化財である阿蘇神社の社殿群のこれまでの修理の歩みと修理で明らかになった建造当時の歴史、これからの復旧計画についてパネルで紹介いたします。

また、展示物の解説として出土品の調査に携わった研究者がギャラリートークを行います。



【長目塚古墳出土品特別公開】  
 令和元年8月25日（日）  
 午前10時～午後4時  
 ギャラリートーク  
 1回目：午前11時  
 2回目：午後2時  
 解説  
 熊本県教育庁教育総務局文化課 木村 龍生 氏  
 熊本市経済観光局 文化・スポーツ交流部文化振興課 三好 栄太郎 氏

【お問い合わせ先】  
 阿蘇市教育委員会  
 教育部教育課 社会教育係  
 〒869-2695  
 熊本県阿蘇市一の宮町宮地504-1  
 TEL：0967-22-3229  
 FAX：0967-22-5205

【会場案内】





# 県指定長目塚古墳出土品一覧

熊本県教育庁教育総務局文化課作成

員数	名称	内 訳	点 数	出土位置	掲載頁※	図版番号※
1	鉄刀	鉄刀	2	石室内	35～36	15
			計 2			
2	鉄鍬	短頸片刃鍬束	1	石室内	38	16、17
		長頸柳葉鍬束	1	石室内	39	18、19
		長頸鍬、矢柄	32	石室内	40、41	20～23
			計 34			
3	刀子	刀子(両関7、方関4、不明3)	14	石室内	46	24、25
		刀子の可能性のあるもの	8	石室内	—	26
			計 22			
4	鉄斧	有袋鉄斧	1	天井石上	48	26
			計 1			
5	銅鏡	内行花文鏡	1	石室内	49	27
			計 1			
6	玉類	勾玉(メノウ製1、水晶製2)	3	石室内	51	28
		管玉(碧玉製4)	4	石室内	51	28
		ガラス玉(丸玉・手玉30、小玉157、小玉破片3)	190	石室内	51	28
		白玉(滑石製20)	20	石室内	51	28
			計 217			
7	須恵器	壺	7	墳丘	58	30、31
		無蓋高坏	1	墳丘	58	30、31
		脚付短頸壺	1	墳丘	58	30、31
		器台	3	墳丘	58	30、31
		壺	2	墳丘	58	30、31
		甕	3	墳丘	58、59	34～37
		須恵器破片	44	墳丘	—	30～39
			計 61			
8	土師器	高坏	23	墳丘	64	40～41
		坏	3	墳丘	64	40～41
		壺/甕	1	墳丘	64	40～41
		土師器破片	11	墳丘	—	40～42
			計 38			
9	埴輪	円筒埴輪	20	墳丘	47～50	42～49
		壺型埴輪	16	墳丘	52～54	50～59
		線刻のある破片	3	墳丘	—	60
		埴輪破片	36	墳丘	—	44～59
			計 75			
点 数 合 計			451			
附	残欠	鉄刀残欠	一括	石室内	—	—
		鉄鍬残欠	一括	石室内	—	—
		土器類残欠	一括	墳丘	—	—

※掲載頁数、図版番号は、『長目塚古墳の研究』のもの。

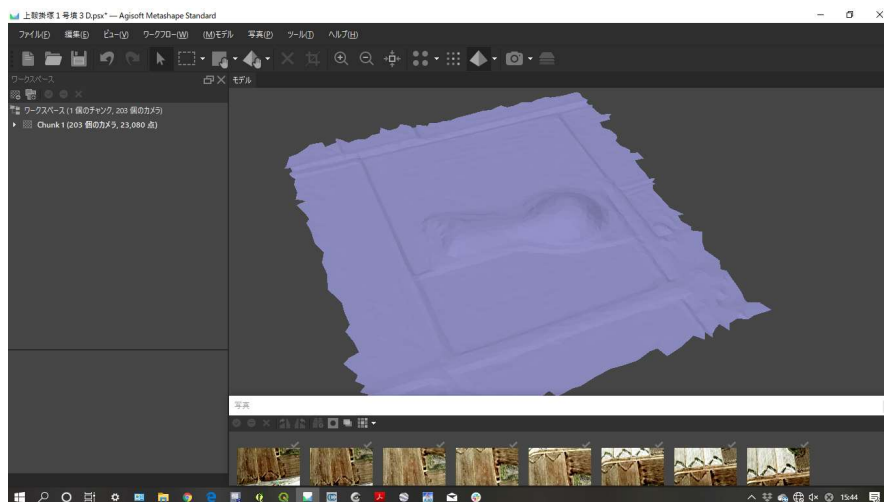
## 4. 阿蘇中央高校出前授業

(1) 日 時 令和元年9月13日（金） 午後2時45分～午後3時35分

(2) 会 場 阿蘇中央高校阿蘇校舎

(3) 入場者数 35名（3年生日本史選択）

(4) 内 容 阿蘇中央高校は日本史の授業において、郷土の歴史や文化と関連付けた学習に取り組むことによって、生徒の郷土への興味・関心を高めると共に、さらなる日本史の理解向上を図るという効果的な授業に取り組まれている。そのような中で、3年生の2学期に日本の古墳時代の学習を行うことから、学校からの依頼を受け阿蘇市教育委員会の学芸員が中通古墳群を題材に出前授業を行った。授業後の生徒の感想には、生徒全員が阿蘇に県内最大級の前方後円墳があることを「知らなかった」、「驚いた」、「誇りに思う」、「大切に守っていかなければならない」という意見に加えて、周知や情報発信が足りていない、詳細な調査を進める必要があるなど大人顔負けの意見もあり、生徒のみならず互いに意義深い出前授業となった。

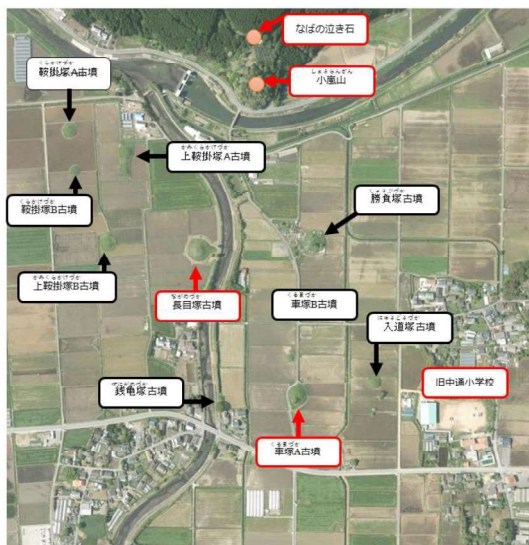


## 5. 一の宮小学校土曜授業地域体験活動

- (1) 日 時 令和元年10月5日(土) 午前8時30分～午前11時10分
- (2) 会 場 中通地区一帯
- (3) 入場者数 180名(阿蘇市立一の宮小学校5年生87名、6年生81名、保護者等12名)
- (4) 内 容 一の宮小学校及び同校の学校運営協議会との共催で、郷土を大切にする子どもを育てようと、中通地区にある「中通古墳群」や「なほの泣き石」、「小嵐山」など学芸員の解説付きで一帯の散策を行った。今回の体験活動により中通古墳群の成り立ちや歴史や文化等に理解を深め、地元の文化遺産に興味・関心を向ける機会となった。



中通地域体験活動マップ



## 6. 小嵐山景観・環境整備事業

(1) 実施年度 令和元年度～令和2年度

(2) 内 容 阿蘇市が設立・運用しているASO環境共生基金の「景勝地景観形成事業」を活用し、中通古墳群の視点場である小嵐山の支障木伐採による眺望景観の回復や説明版や安全柵の改修など展望所の再整備を実施した。本事業においては、「文化的景観」をキーワードに、地元中通地区をはじめ、市役所の関係各課（財政課・観光課・住環境課・教育課）が協力・連携し、大変スムーズに各事業を進行することができた。



着 工 前



着 工 後



長目塚古墳発掘 70 周年・熊本県史跡指定 60 周年  
出土品熊本県重要文化財指定記念シンポジウム

## 中通古墳群を考える

－ 長目塚古墳の温故知新 －

シンポジウム記録集

令和 3（2021）年 3 月

編集：発行 阿蘇市教育委員会

熊本県阿蘇市一の宮町宮地 504-1